年報

平成２８年度

東京医療保健大学東が丘・立川看護学部

TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

Faculty of Nursing

平成 28 年度　年報

目次

○頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

○組織図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

○学校行事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

○入試状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

○教職員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

○委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

○教育活動

学部

‣臨床看護学コース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

‣災害看護学コース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

大学院

‣高度実践看護コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

‣高度実践助産コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

‣高度科学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

‣博士課程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

○業績

臨床看護学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

災害看護学コース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105

初めての「博士論文」審査を終えて

東京医療保健大学看護学専攻科博士課程が平成26年4月に設置され3年が経過した本年（平成29年）3月に、4人の修了生に「博士（看護学)」の学位を授与することができました。

理学や工学などの博士課程の学生さんと異なり、看護学の博士課程の学生さんの場合は、大学の教員、あるいは臨地現場の看護職として勤務しながら大学院で学んでいる学生さんが多いのが特徴です。このため、3年間で学位を取得するには、勤務時間以外の時間を研究に集中・専念するために並々ならぬ努力が必要とされます。学生さんが全力投球で書き上げた博士論文を、評価し、審査する作業も、評価者にとって、かなり神経を遣う作業です。

専門的な視点から博士論文・学術論文として相応しいかどうかの判断・評価を、透明性、公平性、公開性などを担保し、社会的な批判に耐えられるように行うことが求められます。博士論文（抄録も含めて）は、国会図書館に保管され、公開されます。したがって、社会からは、論文そのものの評価は勿論ですが、評価者自身の評価能力も問われることになります。

博士課程での研究成果を学術誌へオリジナルペーパーとして掲載することを論文提出の必須条件にしている大学も少なくありませんが、本専攻科の場合は提出のためのこのような要件を設けておりません。これは、現状の、学術誌への掲載までの査読に要する時間等を考えての方策です。したがって、本専攻科での博士論文審査には、より厳格性、公平性が求められると認識しております。

博士の学位の取得により、初めて研究者・教育者としてのスタートラインに立つことが社会的に認められ、アカデミアの仲間入りができるわけですから、できるだけ規定の 3 年間で「博士」の学位を取得し、自律した教育研究者として積極的に活動して欲しいと思っております。

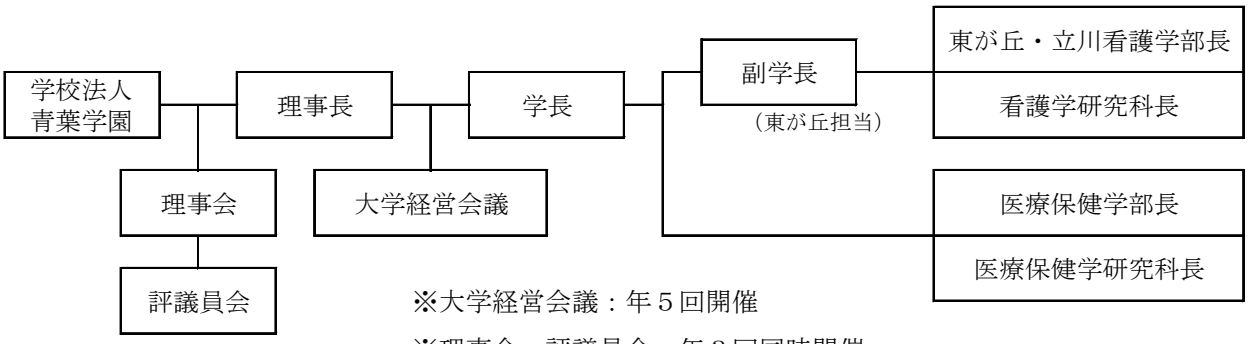
博士論文を完成させるため、持てる力、エネルギーを使い果たした修了生たちは、学位を授与され、「ホット」一段落状態になりますが、一段落が継続しないようにし、教育資源を社会に還元するが求められていることを認識し、看護学、看護教育の進化・発展に寄与して欲しいと思います。

年度末には、博士論文だけではなく、修士特別研究論文、課題研究論文などの審査が行われますが、公平性等を担保した質の高い評価体制の構築に向けての努力を続けていきたいと思います。

平成4年の「人確法」制定以来、看護系大学が増え続けており、平成29年度は250校を超えました。看護教育の質を担保していくための一つの手段として、「博士課程」への進学をお考えいただきたいと思います。

看護学研究科　研究科長　　草間　朋子

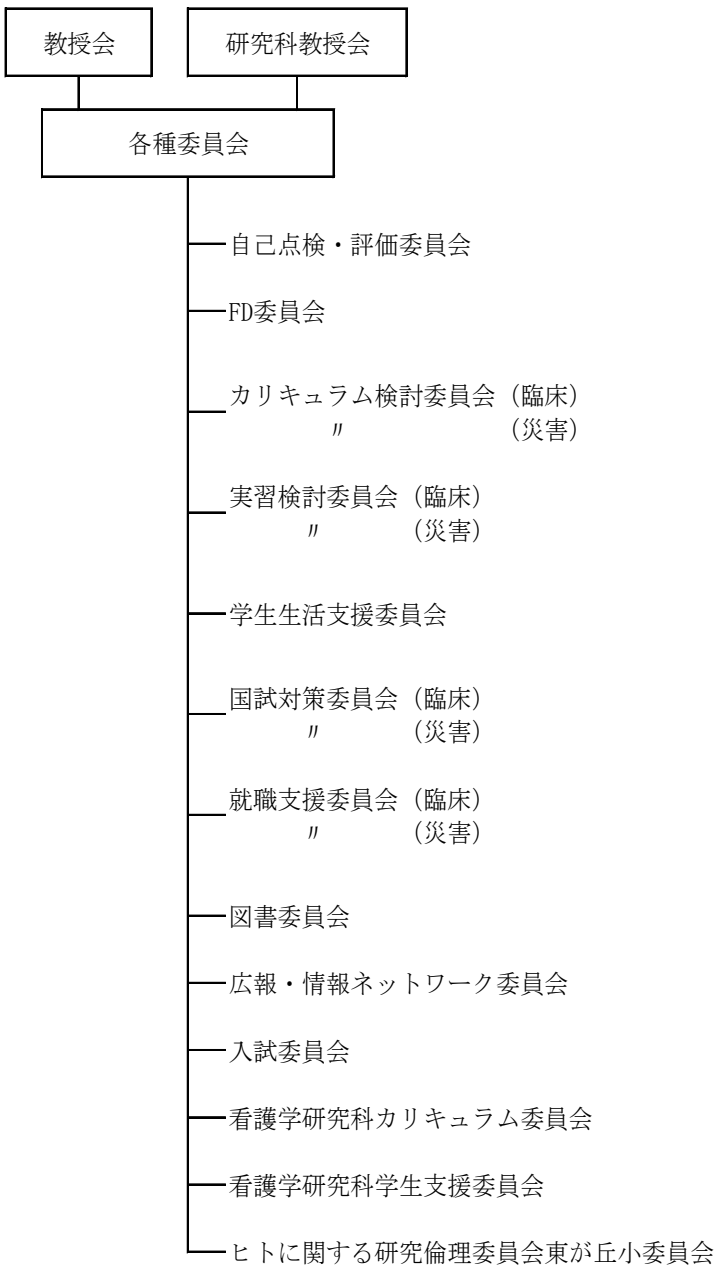
1．大学組織図

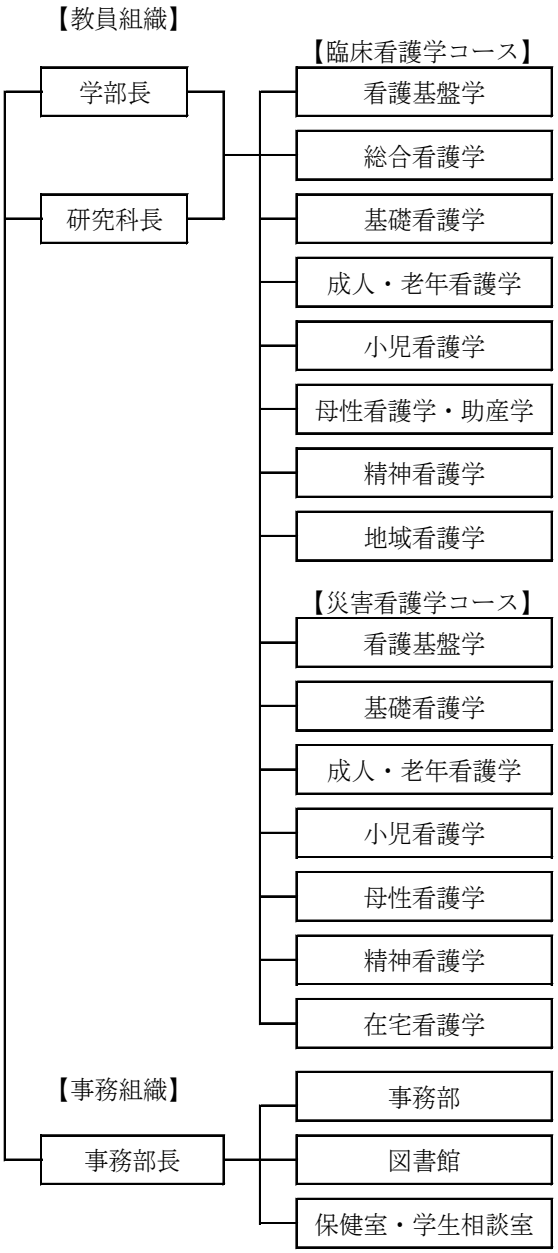


※大学経営会議：年５回開催

※理事会・評議員会：年３回同時開催

東が丘・立川看護学部の運営組織





2. 学内行事の概要

2－1．学年暦

【 前 期 】

4 月
1 日　新入生ガイダンス
2 日　入学式
3 日　学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ、健康診断(～4/4)
7 日　前期セメスター授業開始

5 月
5 日　新入生合宿研修(～5/6)
23 日　在宅看護学実習(臨床～7/1)
30 日　看護過程展開実習(災害～6/10)

6 月
6 日　看護過程展開実習(臨床～6/17)
13 日　看護学体験実習(災害～6/17)
27 日　看護学体験実習(臨床～7/1)

7 月
15 日　スポーツ大会
19 日　看護学統合実習(臨床～7/29)
31 日　オープンキャンパス

8 月
8 日　夏季休業開始(～9/30 まで)
15 日　各論実習－母性看護学実習等
（災害～H29/2/17)
29 日　各論実習－母性看護学実習等
（臨床～H29/2/17)

9 月

【 後 期 】

10 月
1 日　後期セメスター授業開始

11 月
5 日　医愛祭(～6 日まで)
13 日　指定校・公募推薦入学試験
21 日　消防避難訓練(臨床)
28 日　消防避難訓練(災害)
老年看護学実習(臨床～12/9)

12 月
1 日　開学記念日
26 日　冬季休業開始(～H29/1/6)

1 月
10 日　老年看護学実習(災害～1/20)
17 日　国立病院機構病院説明会

2 月
4 日　一般前期入学試験
15 日　老年看護学実習（災害～2/24）
18 日　一般後期入学試験
20 日　日常生活援助展開実習(災害～2/24)
〃　(臨床～2/24)
22 日　就職支援講座
21 日　卒業生との懇談会(臨床・災害)

3 月
7 日　学位記授与式・修了式

2－2. オープンキャンパス

国立病院機構キャンパスでは 7 月 31 日(日)に実施され、受験生、父母等を合わせ、573 名の参加があった。なお、オープンキャンパスの概要は以下の通りである。

会場：国立病院機構キャンパス　本館 1 階～3 階

1）全体説明会(学部紹介)（HM201 教室　9:30～13:20 の間に 3 回実施　1 回 50 分程度)

【内　容】

東が丘・立川看護学部紹介

・学部理念とカリキュラム紹介

・キャンパスライフ「在学生体験談」

・国試対策、就職サポートについて

2）全体説明会(入試説明)（HM306 教室　9:30～14:00 の間に 4 回実施　1 回 40 分程度)

【内　容】

・学長挨拶「大学の理念」

・入試広報「入試概要・面接対策」

3）全体説明会(推薦入試対策講座)（HM306 教室　12:30～13:15　45 分程度)

【内　容】

・看護系大学入試に詳しい予備校講師による本学の過去の「総合問題」に基づく分析と解説

4）個別相談コーナー　(HM206 教室、HM209 教室、HM205 教室)

・東が丘・立川看護学部個別相談

・大学院個別相談

(高度実践看護コース、高度実践助産コース、看護科学コース、博士課程)

・医療保健学部個別相談

・入試総合相談

・就職・奨学金・学生寮相談

・在学生と話そうコーナー

・海外研修展示

5）体験コーナー

・血圧測定他(1 階 HM107 実習室)

血圧測定、衛生学的手洗い、高齢者疑似体験、演習物品展示品の見学：病床環境

・赤ちゃんに触れてみよう(1 階 HM104 実習室)

いろんな大きさの赤ちゃん、赤ちゃんの心音を聞こう

・こころとからだの健康について(2 階 HM208 教室)

アルコール体質判定体験、エゴグラム体験

・大学院高度実践看護コース(2 階 HM204 演習室)

講義：フィジカルアセスメント学演習

実技：心音・聴診体験　　展示・説明：診療看護師って何？

・大学院高度実践助産コース(1 階 HM106 実習室)

母性看護・助産のケアを体験しよう！(アロママッサージ体験、妊婦体験)

6）東京医療センター見学会

1 グループ約 10 名の 6 編成で、所要時間は約 40 分の病院見学を実施。

午前 2 回、午後 1 回に分けて、東京医療センター看護部の案内のもと実施された。

2－3. 東が丘・立川看護学部見学会

本年度の見学会は、8 月 21 日(日)に災害医療センター、10 月 16 日(日)に国立病院機構キャンパスにおいて実施された。受験希望者、父母等を含め 321 名(高校生・受験生 170 名、保護者 151 名)の参加があった。(8/21…178 名、10/16…143 名)

2－4. 個別見学会

下記の日程で個別見学会を実施した。

平成 28 年 5 月 27 日(金)、6 月 22 日(水)、7 月 14 日(木)、9 月 15 日(木)、10 月 7 日(金)、10 月 26 日(水)、12 月 19 日(月)、平成 29 年 1 月 18 日(水)

高校生・受験生・保護者を合わせ延べ 151 名が参加。

2－5. 公開講座等の開催 (FD 企画を含む)

①28.4.6(木)　17:00～18:00　H2511

テーマ: 「東が丘・立川看護学部、大学院看護学研究科の目指す方向性に関して」

講　師: 草間　朋子 (副学長、看護学研究科長)

②28.6.24(金)　16:30～18:00　HM301

テーマ: 「学生のメンタルヘルス」

講　師: 田中　留伊(准教授)、原田　直美(学生相談室相談員)

③28.9.15(木)　17:00～18:30　HM201

テーマ: 「セクハラ・パワハラ・アカハラ等の現状と対処法」

講　師: 森田　穣治(社会保険労務士法人　みらいコンサルティング)

④28.10.28(金)　17:00～18:30　HM301

テーマ: 「事例に学ぶ情報セキュリティ対策」

講　師: 津村　宏(医療情報学科　教授)

⑤29.3.16(木)　講演　14:40～15:20　HM206　　実演　15:30～16:30　HM107

テーマ: 「ノーリフトケア　持ち上げない看護、抱え上げない介護」

講　師: 保田　淳子(日本ノーリフト協会　理事長)

2－6. 学友会活動

1)スポーツ大会

学友会の全学行事である、スポーツ大会が 7 月 15 日(金)に、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館で開催された。東が丘・立川看護学部、医療保健学部あわせて、学生 384 名が参加した。

2)大学祭 (医愛祭)

全学行事である医愛祭が 11 月 4 日(土)・5 日(日)に世田谷キャンパスで開催され、本年は 2 日間で 1,654 名と昨年を上回る来場者数となった。

東が丘・立川看護学部からは、学科企画としてポスター及び写真による紹介をはじめ、ミニ講義、在学生とのおしゃべりタイムを実施した。、また、実習ユニフォーム体験パネルでの記念撮影も行いました。

来場者は 1 日目に 269 名、2 日目には 290 名となった。

3. 入試状況

3－1. 平成 29 度入学者選抜状況(選抜試験は平成 28 年度に実施)

東が丘･立川看護学部看護学科及び大学院看護学研究科の入学者選抜の概略は以下のとおりである。

東が丘・立川看護学部看護学科

入学試験の概要　　※（ ）は、昨年度の実績

試験区分	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
指定校推薦入試	11月13日(日)	(40) 40	臨床 (20) 28 災害 (16) 19 計 (36) 47	臨床 (20) 28 災害 (16) 19 計 (36) 47	――	臨床 (20) 28 災害 (16) 19 計 (36) 47	臨床 (20) 28 災害 (16) 19 計 (36) 47
公募制推薦入試	11月13日(日)	(20) 40	臨床 (36) 60 災害 (43) 35 計 (79) 95	臨床 (36) 59 災害 (43) 35 計 (79) 94	――	臨床 (32) 36 災害 (39) 32 計 (71) 68	臨床 (32) 36 災害 (39) 32 計 (71) 68
センター試験利用入試 前期	1月14日(土) 15日(日)	(15) 15	臨床 (215) 249 災害 (109) 102 計 (324) 351	臨床 (215) 249 災害 (109) 102 計 (324) 351	(21.6) 23.4	臨床 (88) 79 災害 (34) 27 計 (122) 106	臨床 (16) 3 災害 (7) 10 計 (23) 13
一般入試 前期	2月4日(土)	(100) 80	臨床 (367) 298 災害 (194) 140 計 (561) 438	臨床 (348) 277 災害 (185) 126 計 (533) 403	(5.3) 5.0	臨床 (100) 67 災害 (57) 30 計 (157) 97	臨床 (39) 28 災害 (36) 32 計 (75) 60
一般入試 後期	2月18日(土)	(20) 20	臨床 (109) 104 災害 (56) 49 計 (165) 153	臨床 (99) 95 災害 (50) 36 計 (149) 131	(7.5) 6.6	臨床 (17) 17 災害 (3) 5 計 (20) 22	臨床 (5) 13 災害 (10) 10 計 (15) 23
センター試験利用入試 後期	1月14日(土) 15日(日)	(5) 5	臨床 (10) 19 災害 (5) 6 計 (15) 25	臨床 (10) 19 災害 (5) 6 計 (15) 25	(3.0) 5.0	臨床 (4) 8 災害 (2) 0 計 (6) 8	臨床 (1) 3 災害 (2) 3 計 (3) 6
合計		(200) 200	臨床 (757) 758 災害 (423) 351 計 (1,180) 1,109	臨床 (728) 727 災害 (408) 324 計 (1,136) 1,051	(5.7) 5.3	臨床 (261) 235 災害 (151) 113 計 (412) 348	臨床 (113) 111 災害 (110) 106 計 (223) 217

※ 臨床･･･臨床看護学コース　災害･･･災害看護学コース

○　推薦入試

1）指定校推薦入試

（1）対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成 29 年 3 月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が３．８以上の者

（2）選抜方法

調査書・総合問題・面接を総合的に評価し選抜した

2）公募制推薦入試

（1）対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成 29 年 3 月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が３．５以上の者

１）選抜方法

調査書・総合問題・面接を総合的に評価し選抜した

○　一般入試

1）一般入学試験　前期・後期

（1）試験科目

必須科目　英語（100 点）

選択科目　国語総合【現代文のみ】、数学Ⅰ・数学Ａ、生物基礎・生物、化学基礎・化学、生物基礎・化学基礎から 2 科目選択（各 100 点）

2）センター試験利用入学試験　前期・後期

（1）試験科目

必須科目　英語【リスニングを含む】（150 点）

選択科目　国語【近代以降の文章】、数学Ⅰ・数学Ａ、生物、化学、生物基礎・化学基礎から 2 科目利用（3 科目以上受験している場合は高得点のものを利用（各 100 点）

３－１－２．大学院看護学研究科

入学試験の概要　　※（ ）は、昨年度の実績

課程・コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
修士課程 高度実践看護コース	10月1日(土)	(30) 30	(20) 18	(20) 18	—	(18) 18	(18) 18
修士課程 高度実践助産コース			(9) 12	(9) 12		(9) 10	(9) 10
修士課程 看護科学コース			(4) 2	(4) 2		(4) 2	(4) 2
合計		(30) 30	(33) 32	(33) 32	(30) 30	(31) 30	(31) 30

課程・コース	試験日	定員Ⓐ	志願者数Ⓑ	受験者数Ⓒ	競争倍率 Ⓒ/Ⓐ	合格者数	入学者数
博士課程	10月1日(土)	(2) 2	(2) 4	(2) 4	—	(2) 4	(2) 4
合計		(2) 2	(2) 4	(2) 4	—	(2) 4	(2) 4

○　選抜方法

［修士課程］

筆記試験、面接及び出願書類を総合して判定

1）筆記試験

（高度実践看護コース、高度実践助産コース）

看護学に関する総合的な基礎知識を問う問題。

必修問題 2 問、選択問題 3 問から 1 問を選択。試験時間 120 分

（看護科学コース）

保健・医療分野に関する知識と論理的思考力を問う問題。

また、一部の問題は、英語の能力を問う問題。合計 3 問。辞書持ち込み可。

２）面接試験

一人１５分程度

［博士課程］

学力試験・面接の結果が一定の基準に達した者から、学力試験・面接の結果及び出願書類を総合的に評価して判定

１）筆記試験

保健・医療分野に関する知識と論理的思考力を問う問題。

また、一部の問題は、英語の能力を問う問題。合計 3 問。辞書持ち込み可。

２）面接試験

一人 15 分程度

４．教職員名簿

専任教員	担当領域	氏名	職名	採用等年次
	大学院看護学研究科長	草間　朋子	副学長/教授	22.4.1　採用
	東が丘･立川看護学部長	山西　文子	副学長/教授	25.4.1　採用
臨床看護学コース	看護基盤学	今井　秀樹	教授	22.4.1　採用
		酒井　一夫	教授	27.10.1 採用
		小野　孝二	准教授	25.4.1　採用
		小宇田　智子	講師	22.4.1　採用
		鶴巻　香奈子	助教	27.4.1　採用
	総合看護学	山西　文子	教授	25.4.1　採用
		岩本　郁子	准教授	24.4.1　採用
		山田　巧	准教授	25.4.1　採用
		早坂　奈美	助手	22.4.1　採用
	基礎看護学	松山　友子	教授	22.4.1　採用
		穴沢　小百合	准教授	22.4.1　採用
		高橋　智子	助教	25.4.1　採用
		川﨑　香織	助手	27.4.1　採用
		三浦　彩子	助手	28.4.1　採用
		寺山　明香	助手	28.4.1　採用
	成人・老年看護学	竹内　朋子	准教授	25.4.1　採用
		岩渕　起江	講師	24.4.1　採用
		松本　和史	講師	27.4.1　採用
		中村　孔美	助手	25.4.1　採用
		秋場　研	助手	26.4.1　採用
		今井　真喜	助手	22.4.1　採用
		日髙　未希恵	助手	28.4.1　採用
		庄司　満明	助手	28.4.1　採用
	小児看護学	中島　美津子	教授	28.4.1　採用
		玄　順烈	講師	26.4.1　採用
	母性看護学・助産学	宮﨑　文子	教授	22.4.1　採用
		橋本　美幸	准教授	26.6.1　採用
		朝澤　恭子	准教授	26.4.1　採用
		関屋　伸子	講師	24.4.1　採用
		平出　美栄子	講師	28.4.1　採用
		小嶋　奈都子	助教	22.4.1　採用

		加藤　江里子	助教	26.4.1　採用
	精神看護学	田中　留伊	准教授	22.4.1　採用
		田野　将尊	講師	27.4.1　採用
		中村　裕美	助教	22.4.1　採用
	地域看護学	石田　千絵	准教授	26.4.1　採用
		佐藤　潤	講師	22.4.1　採用
		牧　栄理	助手	22.4.1　採用
		手塚　久美子	助手	27.4.1　採用
	その他	金子　あけみ	准教授	22.4.1　採用
災害看護学コース	看護基盤学	高木　晴良	准教授	26.4.1　採用
		石井　美恵子	准教授	26.4.1　採用
		堀田　昇吾	助手	25.7.1　採用
	基礎看護学	岩満　裕子	准教授	26.4.1　採用
		山田　英子	講師	27.4.1　採用
		佐藤　みほ	講師	26.4.1　採用
		栗林　好子	助教	26.4.1　採用
		加藤　知子	助教	26.4.1　採用
	成人・老年看護学	新実　絹代	准教授	26.4.1　採用
		福田　淑江	講師	26.4.1　採用
		藤村　朗子	講師	27.4.1　採用
		折元　美雪	助教	28.4.1　採用
		三浦　由紀子	助教	28.4.1　採用
		大関　春美	助手	27.10.1 採用
	小児看護学	久保　恭子	教授	28.4.1　採用
		江口　千代	講師	27.4.1　採用
		土屋　沙織	助手	27.4.1　採用
	母性看護学	鈴木　久美子	准教授	26.4.1　採用
		山口　幸子	講師	27.4.1　採用
		吉田　亜希子	助手	27.4.1　採用
	精神看護学	金子　眞理子	教授	27.4.1　採用
		筧　亮子	講師	28.4.1　採用
		石﨑　実	助教	27.4.1　採用
	在宅看護学	桜井　礼子	教授	27.4.1　採用
		中川　陽子	講師	25.4.1　採用
		小山　珠美	助教	27.4.1　採用

事務職員	役職	氏名
	部長	利光　重信
	部長代理(立川担当)	内田　智明
	主任(立川担当)	上山　淳
	主任(立川担当)	川下　範子
	主任	佐久間　雄一
	職員	齋藤　容子
	職員	鎌田　りみ
	職員(立川担当)	細井　智世
	職員	望月　陽子
	職員	岡田　友理
	職員	池田　美紀子
	職員	安形　茂
	図書館司書	飯嶋　正敏
	図書館司書	田中　瞳
	図書館司書	金森　美里
	保健室・相談室担当	原田　直美

5.委員会活動

自己点検・評価委員会

構成員

高木晴良(委員長)、関屋伸子(副委員長)、穴沢小百合、石井美恵子、岩渕起江、藤村朗子

活動内容

「平成 28 年度自己点検・評価報告書」及び「第 2 期中期目標・計画」の編集を行った。

また、平成 27 年度の年報を編集・作成し、WEB ページからアクセスできるように公開した。

http://www.thcu.ac.jp/faculty/higashigaoka/pdf/index/higashigaoka-annual_h27.pdf

FD委員会

構成員

高木晴良(委員長)、関屋伸子(副委員長)、穴沢小百合、石井美恵子、岩渕起江、藤村朗子

活動内容

以下のFD企画および、公開講演会、特別講義(一般公開)等を行った。

① 4 月 6 日「東が丘・立川看護学部、大学院看護学研究科の目指す方向性に関して」
(草間朋子 副学長)

② 5 月 16 日「看護政策論特別講義」
(あべ俊子 衆議院議員、薬師寺みちよ 参議院議員)

③ 6 月 24 日「学生のメンタルヘルス」
(田中留伊 准教授、原田直美 先生)

④ 9 月 15 日「セクハラ・パワハラ・アカハラ等の現状と対処法」
(社会保険労務士法人 みらいコンサルティング)

⑤ 10 月 28 日「事例に学ぶ情報セキュリティ対策」
(医療情報学科 津村宏 教授)

⑥ 3 月 16 日「ノーリフトケア 持ち上げない看護、抱え上げない介護」
(日本ノーリフト協会 保田淳子 理事長)

看護学科カリキュラム検討委員会

構成員

臨床看護学部会 構成員

松山 友子(委員長)、竹内 朋子(副委員長)、山西 文子(学部長)、今井 秀樹、中島 美津子、宮崎 文子、石田 千絵、田中 留伊、利光 重信(事務部長)、斎藤 容子(事務員)

活動内容

本委員会は、本学部の教育の資質向上に向け、カリキュラムの充実及び教育環境の整備などに関する年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

1)カリキュラムの運用について

H27 年度カリキュラムが 2 年目に入ったが、事務部と綿密な調整を行った結果、カリキュラムは予定通りに運用できた。現在 3 つのカリキュラムが運用されているため、混乱がないように対

比一覧表を作成して対応した。

2）卒業認定および成績・進級等の学生の成績評価について

4 年次生については卒業要件と照合して卒業の可否について、1～3 年次生については進級要件にしたがい進級の可否について、教授会に資料を提示し、承認を得た。

3）教育環境の整備（教材・教具）について

「看護学実習室・臨床検査学演習室関連物品一覧・配置図」を半期ごとに更新した。施設・設備の改善に関しては要望をまとめて事務部に提出した。

4）履修案内・シラバスについて

これまでの「フォーマットおよび記載方法」を刷新し「シラバス作成ガイドライン」を作成し、内容および体裁の統一が図れるようにした。

5）申し合わせ事項について

委員会の関連事項の周知のため、「申し合わせ事項」を全教員に配付した。

災害看護学部会

構成員

桜井礼子（委員長）、岩満裕子（副委員長）、金子 眞理子、久保 恭子、鈴木 久美子
高木 晴良、新実 絹代、内田智明（立川事務部長代理）、上山 淳（事務員）

活動内容

本委員会は、教育の質向上を目指し、カリキュラムの充実、及び国立病院機構立川キャンパスの教育環境の整備など新たな課題について、年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

1）カリキュラムの運用について

平成 26 年と平成 27 年からの 2 つのカリキュラムが運用されているが、カリキュラムは予定通りに実施できた。また、卒業研究や看護学統合実習など、災害看護学コースの特徴のある教育内容について検討した。

2）成績・進級等の学生の成績評価について

1～3 年次生の進級の可否について、進級要件に従い資料を教授会に提示し、承認を得る手続きを行った。

3）教育環境の整備（教材・教具）について

「各領域の物品一覧」をまとめ、ディスクネッツにて情報の共有を図った。 また、立川キャンパスの実習室の整備について検討を行った。

4）履修案内・シラバスについて

次年度、立川キャンパスで 2～4 年次生が学ことを踏まえ、履修案内の見直しを行った。

5）学生の学力向上に関する取り組み

学生の基礎学力および実践力の向上の方策について、検討した。特に 2 年次の後期で学力確認のための取り組みが必要ではないかとの意見が出された。次年度に具体的な活動について検討予定である。

実習検討委員会

臨床看護学部会

構成員

穴沢小百合(委員長、基礎看護学) 、石田千絵(副委員長、地域看護学)、酒井一夫(看護基盤学) 、岩本郁子(総合看護学)、竹内朋子(成人・老年看護学) 、朝澤恭子(母性看護学)、玄 順烈(小児看護学)、 田野将尊(精神看護学) 、佐久間雄一(事務部)

活動内容

本委員会は東が丘・立川看護学部の教育の質的向上に向け、看護学実習に関する以下の活動を実施した。

1)実習計画

平成 29 年度の実習計画策定および平成 30 年度の実習日程の確認を行った。

2)看護学実習連携会議

東京医療センター看護部との共催で 4 回実施した。今年度はカンファレンスを取り上げ、その充実に向けグループ討議を行い、「カンファレンスにおける教員と指導者の連携と指導の工夫」を作成した。また、昨年度取り組んだ「看護技術指導モデル」については、「実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価」として第 36 回日本看護科学学会においてポスター発表し、来場者からの好評を得た。

3)看護学実習施設に対する説明会

臨床看護学コース、災害看護学コースの実習病院および老健施設や訪問看護ステーションの実習担当者を招き、6 月 23 日(木)に開催した。参加者は 47 名(22 施設)の実習担当者と教員 65 名であった。内容は本学部の教育への取り組みに関する説明および実習領域ごとの分科会における意見交換であった。分科会は今年度初の試みであったが、意見交換が活発に行われ好評であった。

4)看護技術経験表

平成 28 年度の卒業生 93 名を対象に到達状況を集計した。173 種類の看護技術のうち 157 種類 90.8%(平成 27 年度 85.0%)は、60%以上の学生が学部で設定した卒業時の到達度に到達していることが明らかになった。60%未満の到達度であった看護技術 16 項目については、実習検討委員会として対策を検討し提示した。また、各領域で強化する看護技術項目をリストアップし、対策を立てて取り組むこととした。

5)インシデント報告

看護学実習におけるインシデントについて毎月の委員会で教育的な観点から情報共有をすると共に、今年度の報告書を集計・整理した。報告されたインシデントは患者に直接的な影響がなかった。

災害看護学部会

構成員

石井美恵子(副委員長、看護基盤学) 、福田淑江(成人・老年看護学)、桜井礼子(在宅看護学)、岩満裕子(基礎看護学)、久保恭子(小児看護学)、筧亮子(精神看護学)、山口幸子(母性看護学)、内田智明(事務部)、細井智世(事務部)

活動内容

本委員会は東が丘・立川看護学部の教育の質的向上に向け、看護学実習に関する以下の活動を実施した。

1）実習計画

平成 29 年度の実習計画策定および平成 30 年度の実習日程の確認を行った。

2）看護学実習施設に対する説明会

臨床看護学コース、災害看護学コースの実習病院および老健施設や訪問看護ステーションの実習担当者を招き、6 月 23 日(木)に開催した。（詳細は臨床看護学部会報告参照）

3））実習連携会議

平成 30 年度からの実習連携会議の開催に向け、実習連携会議プロジェクトの準備・調整を行った。

4）看護技術経験表

平成 29 年度に初集計となる。演習や実習で看護技術経験表が活用されていることを確認した。

5)インシデント報告

看護学実習におけるインシデントについて教育的な観点から情報共有を行い、今後の予防策について検討した。

学生生活支援委員会

構成員

田中留伊(委員長)、中島美津子(副委員長)、金子眞理子、久保恭子、桜井礼子、朝澤恭子、小宇田智子、小嶋奈都子、淺野直江、利光事務部長、岡田事務員、学生支援センター長、教務部長、

活動内容

1）健康管理

学生の健康状態の把握と感染症予防や拡大防止対策を重点項目として活動した。今年度も 1 年生の結核健診は、T-SPOT 検査を実施した。

2）学年担任・コンタクトグループ

1年次生の合宿研修では「4年後の自分」をテーマとしたグループ討議と発表会を企画・運営した。また、コンタクトグループは年 2 回のミーティングを行った。学生が主体的に取り組む姿が見受けられるようになった。

3）学生生活実態調査

学生の生活実態を把握し、教育活動に活かす目的に 12 月に実施した(回収率 80.8%)。今年度より事前・事後学習の取り組みについて質問し、半数の学生が継続的に学習していることが示された。

4）学友会活動の支援

スポーツ大会や大学祭（医愛祭）、七夕やクリスマス等の全学行事に対応した。定例となった東京医療センターとの協同による、七夕飾りやクリスマスツリーの展示では患者さんからも好評を得ている。また、今年度より災害医療センターとの協同で七夕飾りやクリスマスイベントが行われるようになった。

5）災害訓練・消防訓練

東京医療センターの災害訓練が 10 月 20 日に実施され、臨床看護学コースの 2 年生が患者

役や搬送者役として参加した。また、災害医療センターの災害訓練が9月2日と1月21日の2度行われた。避難訓練は11月21日に臨床看護学コースが、11月28日に災害看護学コースが参加し、事務部との連携のもとに実施した。

国家試験対策委員会

構成員(臨床看護学コース)

岩本郁子（委員長)、佐藤潤（副委員長)、小宇田智子、高橋智子、関屋伸子、玄順烈、

松本和史、中村裕美、利光重信、齋藤容子

活動内容

委員会の目標を「看護師国家試験合格率100%」とし、2年次生から以下の内容を計画し実施した。今年度まで3，4年次生を中心に国試対策を強化してきたが、来年度からは1・2年次生に対する国試対策の強化を図ることが課題である。

1）国試ガイダンス、業者模擬試験計画の立案・対応

2～4年生に対しガイダンス、業者模擬試験の年間計画を立て実施した。4年生にはガイダンス、業者模擬試験を各6回実施し、さらに今年度は業者によるガイダンスを3回追加した。

2）学習強化組に対する支援

模擬試験の結果により学習強化が必要な学生に対し、年間計画を立案し、特に前期に集中して個別面接を行い、学習計画の立案、自己学習への支援、模擬試験の追加等を実施した。

3）ゼミ単位の国試対策の強化

4年次生は卒業研究の領域別のゼミ単位で活動することが多いため、模擬試験結果の振り返り、学習指導、相談など具体的な支援は、各学生の状況が把握しやすいこのゼミ単位で、委員会のメンバーと領域の教員が協力して行った。

そのほかに、学生国試対策委員との連携、教員による補講計画（17コマ）の立案・調整、既卒者への対応等を実施した。

就職支援委員会

構成員

佐藤潤（委員長）

臨床看護学コース：岩渕起江、中島美津子、山田巧、平出美栄子、利光重信（事務部)、岡田友理（事務部）

災害看護学コース：鈴木久美子（副委員長)、佐藤みほ、筧亮子、藤村朗子、福田淑江、内田智明（事務部）

活動内容

本委員会は学生の就職･進学に関する支援を充実させるため、以下の活動を行った。

1)就職支援活動

就職支援活動として、両コースにおいて就職ガイダンス、外部講師を招いての就職支援講座(マナー講座、面接試験の受け方、小論文や履歴書の書き方)国立病院機構就職説明会、卒業生との懇談会を実施した。

今年度より就職支援活動がはじまった災害看護学コースでは 3 年次生を対象に、4 月に就職ガイダンスを実施し、7月から別館2階ラウンジに就活情報コーナーを暫定的に整備し、学生への就職関連の情報提供を行った。

2)奨学金貸与支援

奨学金支援としては、両コースともに東京医療センターおよび災害医療センターの奨学金支援を中心に支援を実施した。さらに、災害看護学コースでは、施設等による奨学金・就学金制度の情報提供と活用などの相談を実施した。今年度の奨学金利用は日本学生支援機構、東京都看護師等修学資金、病院施設からの奨学金であった。

図書委員会

構成員

酒井一夫(委員長)、久保恭子(副委員長)、金子あけみ、山田巧、田野将尊、山口幸子、飯嶋正敏(司書)

活動内容

立川キャンパスの本格稼動を視野に入れ、学生の利便性の確保・向上を念頭に置いて活動した。

1)立川図書館の整備

(1)昭和の森看護学校図書室を譲受けるまでの経過措置として、「図書室」と「閲覧室」を設置した。

(2)平成 29 年度以降の講読雑誌は、東が丘図書館と同様のラインアップとすることとした。

(3)新たに購入する図書の書架を確保するために、昭和の森看護学校図書室から譲り受ける図書のうち、1981 年以前の図書を「除籍(廃棄)図書」候補とした。これを各領域に照会し、保存の要望のあった書籍を除き、除籍措置を取ることとした。

2)東が丘図書館における図書の整理

新規購入図書の配架スペースを確保するため、蔵書の除籍に係る内規に基づき、除籍図書のリストを作成した。これを各領域長に照会し、保存希望あった図書を除いて除籍することとした。

3)月次報告の作成

入館者数、図書受入、図書貸出、複写サービス等に関する実績を月次報告としてとりまとめた。平成 28 年 6 月からは、立川図書室についての情報も含めた。運用状況の把握に活用でき、司書業務の効率化や、利用者へのサービス向上につながると期待される。

広報・情報ネットワーク委員会

構成員

橋本美幸（委員長）、田野将尊（副委員長）、平出美栄子、松本和史、山田英子、折元美雪、加藤江里子、加藤知子、小山珠美、鶴巻香奈子、三浦由紀子、掛川裕史（入試広報部）、西村聡明（入試広報部）、佐久間雄一（事務部）

活動内容

1）大学・大学院案内

平成 28 年度大学案内および大学院案内の作成、活用を行った。

2）オープンキャンパス・学校説明会・個別相談・出張講義等

（1）国立病院機構キャンパスのオープンキャンパスおよび国立病院機構キャンパス・国立病院機構立川キャンパスの見学会を、東京医療センター・災害医療センターと連携を図り実施した。

（2）国立病院機構キャンパスで個別見学会を合計 9 回（参加人数合計 151 名）実施した。

（3）オープンキャンパス、進学ガイダンス、入試説明会等で個別相談を実施した。

（4） 下北沢成徳高等学校 1・2 学年を対象に、6 月と 11 月（各 9 名）に出張講義および模擬授業とキャンパス見学会を行った。

3）ホームページ

（1） 教員データベースを 5 月に新規登録・更新し、東が丘・立川看護学部のページ内容を 7 月に更新した。

4）その他

（1）学報「こころ」を 2 回発行し、教育活動や学生支援の PR 活動を行った。

（2）早稲田塾、医療保健学部と共催し、8 月に早稲田塾スーパーワークショップを開催した。

（3）日本看護系大学協議会データベース「ザ・データベース・オブ・JANPU」を更新した。

看護学研究科カリキュラム委員会・学生支援委員会

構成員

山西文子（委員長）、今井秀樹（副委員長）、橋本美幸、山田巧、岩本郁子、利光事務部長、佐久間事務主任、鎌田事務員

活動内容

看護学研究科「高度実践看護コース」、「高度実践助産コース」、「看護科学コース」、「博士課程」に関する教育計画、実施、評価等に係る質向上のための検討を行った。各コースのカリキュラムや教育・研究に関する取り組みとその評価、単位取得状況等を確認し、研究科教授会への報告及び審議に係る案件の決定を行った。学生支援委員会においては、大学院生の在籍に関する事項、就職、進学の面接指導などを実施した。就職率 100％。

他に「高度実践看護コース」は、臨床実習指導に関する指導者間の指導の統一化を図るため、実習指導者会を毎月 1 回、年間 6 回実施した。「高度実践助産コース」は助産師国家試験合格 100％を目指し、模擬試験や個別指導を実施した。NP コースに関する臨床教授会は、3 箇所の各実習施設で年 2 回実施し、より良い実習をするための「実習要項の検討」および実習終了後の評価、手順書の評価等を行ってきた。

2016 年度入学生に対し、改正保助看法による特定行為研修制度によるカリキュラムを開始。4月に講師変更による届出を厚生労働省に提出。NP 教育との整合性を担保しながらカリキュラ

ム運営が出来ている。2015 年度以前の入学生であり、今年度修了予定の 6 期生に対し、研修管理委員会を開催し、21 区分 38 特定行為の特定行為研修修了基準を満たしていることを免除審査し、全員の修了が認定された。

博士課程においては、本年度初めての修了生を輩出するため、研究課題毎に外部専門家による審査委員を複数決定し、学内において審査会を開催し評価を実施、初めての修了生4人全員が認定された。

教育活動(臨床看護学コース)

【看護基盤学領域】

教育方針

看護基盤学領域は、将来看護師となる人として必要な教養、知識のみならず専門にこだわらない広い視野に立った物の見方を学ぶために重要な分野の教育を担当している。同領域に所属する教員の出身学科は看護学科のみならず多岐に及び、その長所を生かして人間の生命を自然科学的、倫理学的、あるいは社会学的等、多面的な側面より論じる能力を有する看護師育成を目指す。さらに社会医学分野の講義や臨床検査学演習等を通じて、スキルミックスやチーム医療の重要性を教授することにも力点を置いている。

1) 自然科学の基礎:1 年次前期

小宇田智子、高木晴良

専門基礎分野、専門分野における高度な専門科目を履修するために必須である生物、化学、物理、数学等に関する基礎的な知識を学習することを目的とした。学生によって各内容の理解度に大きな差があるため、基礎的な内容を含むようにし、動画等を利用して理解しやすいように工夫した。また、学生の個別の質問に応じ、全学生が最低限の必要知識を得られるように対応した。次年度も学生間で知識の差があると予想される。そのため、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

2) 臨床検査学演習:2 年次前期

酒井一夫、今井秀樹、小宇田智子、鶴巻香奈子、堀田昇吾、別所遊子、大島久二、伊東丈夫

診断・治療の基礎として活用されている臨床検査の原理を理解し、意義を学ぶことを目的として演習を実施した。組織学検査、心電図、血液検査、尿検査、染色体検査、放射線検査の各項目につき、試料の観察や測定を通して、その基本原理を学ぶとともに、解剖生理と病態に関する理解を深めた。東京医療センターの協力を得て、実際に病院において臨床監査がどのように実施されているかの見学も実施した。この病院見学が学生たちの印象に残っているように見受けられた。次年度は、病院見学と、実験室での演習をより関連付けるような工夫を凝らしたい。

3) 臨床薬理学演習:2 年次生後期

小宇田智子、小川千晶

1 年次生で得た薬理学の知識をもとに、治療対象となる患者の状況(年齢、性別、生理的状態など)による薬物動態の知識、作用と薬効について理解させることを目標とした。主に、臨床現場で使用されている薬物の使用目的、作用機序、有害作用・禁忌などについて、随時、解剖生理学や疾病の成立ちの知識を確認しながら概説した。次年度は、臨床的な投与時の看護のポイントなどについても取扱い、より臨床に近い形での教育を目指す。

4) 看護研究の基礎:3 年次生前期

酒井一夫、今井秀樹、佐藤潤、小宇田智子、鶴巻香奈子

エビデンスに基づく看護に資する看護研究を実施する素地を形成することを目標に講義を実施した。看護学における研究の意義、研究を開始するにあたっての基礎となる情報の集め方から始め、研究手法の分類と進め方、倫理的配慮、研究のまとめ方にいたるまでの一連のプロセスについて概要を講義した。

次年度は、より具体的な研究(例えば卒業研究)を題材として取り上げる等の工夫をし、より具体的な事例に即した講義を目指したい。

5) 英語論文の講読:3 年次生前期

酒井一夫、今井秀樹

医学の現場に近い教材を選び、講義を実施した。講義にあたっては、教科書(視覚教材)に加え、聴覚教材も活用しつつ、学生が自ら参加できる工夫を施し、関連専門用語・フレーズの習得に努めた。次年度は、学生側からの発表の機会を増やす等の工夫を行い、全体としての英語コミュニケーションの能力向上に資するような講義を目指したい。

6) 公衆衛生学:3 年次生前期

今井秀樹、鶴巻香奈子

単なる国家試験対策ではなく、ヒト集団の健康像は様々な環境因子から影響を受けながら具現化されること、また，ヒトの生活はヒトを含んだ生態系を改変させて行くことを理解させることを目標とした。特に「環境」とはヒトあっての「環境」であり，ヒトの健康に影響を与えてこそ「環境問題」が「環境問題」たり得ることをわからせるために，環境保健学的問題については多くの時間を割き最新のデータを踏まえながら概説した。来年度も内容のアップデートを行う。

7) 英語論文のクリティーク:4 年次生前期

酒井一夫　各領域担当教員

英語原著論文の検索法を示し、各学生が興味のある英語原著論文を選定した。論文の内容は、各領域における卒業研究に関連のあるものとした。次いで、英語論文の構造、独特の言葉遣い等について解説したのち、選定した論文を精読し、発表と討論を行った。指定された英語論文を精読し、卒業研究グループの中で発表と討論を行った。来年度は、学生の関わりをさらに促進する工夫をしたい。

【総合看護学領域】

教育方針

学生は、各領域の看護学に共通する基礎となる知識・技術・態度を基礎看護学で学び、更に対象の発達段階、状態等別で異なる各看護学領域の学びを積み重ね、総合看護学領域に出会う。つまりここでは、それまでの学びを統合して、チーム医療を 24 時間体制で提供するため看護のマネジメントの基礎を学ぶ機会である。出来るだけ現実に近い形で知識の統合、判断の根拠、思考のプロセスを繰り返し、技術の実施、評価というPDCAサイクルを廻せるように支援する。また、チームの一員としてのセルフマネジメントの重要性も再確認する機会であり、臨地実習最後の纏めである。

臨床への第一歩がスムーズに踏み出せるように 4 年間の纏めでもあり、社会への橋渡し的な位置づけである。学生にはその重要性・大切さを認識させたい。

1) 看護倫理:1 年次後期

岩本郁子

本科目は看護実践における倫理の重要性、倫理的問題の解決方法を理解し、看護の対象の人権擁護の視点から、看護師としての責務を追究する姿勢の育成を目的としている。実習経験が少ない学生が自分の問題としてイメージできるよう毎回の授業で、倫理的判断が必要な事例を記載した用紙を配布し、学生個々がどのようにその事例の倫理的問題をとらえ判断するか

について記載する時間を設定したり、最新の医療倫理に関するニュースの提示、さらに学生に配布され臨地実習で使用する「実習要項」を教材として取り上げ、倫理的問題に対する関心を高めるよう工夫した。看護場面における倫理的問題の分析と対処について検討するグループワークを設定した。グループワーク前に課題提出を課した個人ワークを実施したため反転学習としての効果があり、事例分析を行うことができた。

テキストは自己学習に活用できるよう事例掲載が多いものを選択しているが、十分に活用されていないため、来年度は事前・事後学習にテキストの活用を前提とした課題を提示し、自己学習の強化を図りたい。

2) 政策医療論:2 年次後期

山西文子　矢﨑義雄　池田千絵子

日本における医療の歴史的経緯と現状および課題を理解し、変化の激しい医療ニーズに答えていくための医療者の役割を考える。また、我が国において全国的に国立病院機構が担っている政策医療について、民間医療では担えない国としての不採算医療、国として責任を担う医療等についての認識を深め、今後の医療の在り方について考え方や対応を広く捉え、専門職業人としての考えや役割などを明確にする。日本の医療提供体制の変化、政策医療ネットワークによって展開する医療の実際、現代医療における諸問題などを講義により学び、初めて知る我が国の医療の実態を数字として知り、安全・安心な医療の提供体制が超高齢化社会によって医療費が高騰し、脅かされる状況も生じていることも理解し、どのような社会が良いのか、医療がどうあれば良いかを個人的にも考えをしっかり持つことを狙って、レポートを纏めた。

3) 看護理論:2 年次後期

岩本郁子

看護学の基礎となる看護理論の意義を理解し、主な看護理論の特徴と実践への活用について考察し看護の奥深さ、面白さに関心を持ち、看護実践への活用の試みを行えるようにすることが講義の目的である。10 名の看護理論家と 4 つの中範囲理論についてその理論の特徴と看護実践における有効性について取り上げた。今年度より理論の理解を深めるためテキストも採用した。授業開始時に毎回、看護理論の機能要素（人間、環境、健康、看護）等に関する学生の考えを記載する時間を 10 分程度確保した。授業最終日に記載したものを学生に返却し、自らの看護観、その根底にある看護理論に興味が持てるよう工夫した。

前回までは看護の実践経験がない 1 学年次の開講であり、学生自身が理論と実践がどのように結びつくかについて確信を得られるか否かが課題であった。今年度から 2 年次後期となり、講義の途中で老年看護学実習が設定されていたため、実習開始前の授業で実習での理論の活用を課題とし、実習終了後の授業では、理論の活用についてレポートし発表の場面を設定した。来年度は事前・事後学習の充実を図り、より学生の参加を促すような教育方法を工夫したい。

4) 医療安全学:3 年次後期

岩本郁子

本科目は、医療安全の基本的な考え方を理解し、医療における安全性の確保に向けた看護職の役割について学習することを目的としている。医療安全に関する社会的関心は高く、国レベル、医療機関レベルで様々な取り組みが実施されている。それらの取り組みを理解した上で、より安全な看護を提供するための看護職のあり方、自己のあり方を追究する姿勢の育成を

ねらいとしている。医療現場の日常の中でどのようにして医療事故が発生するのか、開発された事故分析ツール、医療安全に向けての新しい概念・取り組み等を中心に、最新のデータや事例を活用して授業を構成した。医療機関レベルでの医療安全の取り組みについては実習施設の医療安全係長(看護職)に1コマ授業を依頼した。また、授業ごとに実習での体験の記述や事例についての考え方を問いうレポートを課し、2年次生までの実習体験をできるだけ想起しながら医療安全について取り組めるようにした。医療安全に関連した新しい情報は日々提供されているため、どの情報をどれだけの時間配分で授業計画の中に取り入れていくのかが課題である。来年度は自らの研究についても授業内容として位置付け学生の関心を高めていきたい。

5) チーム医療とスキルミックス:4 学年前期

山西文子、武田純三、久部洋子、大島久二、加藤良一、磯部陽、

医療においてそれぞれの職種がチーム医療の現状と課題をどのように捉えているか、また、チーム医療の実践報告を下にスキルミックス展開のために自分たちはどのように実践するのかを学び、実際的な各職種間の役割の違いを理解し、看護職としての役割を果たせるようになることが狙いである。そのため、一施設の病院長がチーム医療をどのように捉えているか、施設長としての方針・考え方を講義し、各医療職種が何を望み実践しているのかを話して貰った。また、副院長 3 人の立場からの考え方、他に「感染管理」「医療安全管理」「地域連携」「病院管理・運営に関する実際」「薬剤師・臨床検査技師・放射線技師等メディカルスタッフの役割」など役割の違いを明確にし、チーム医療についての理解を深めていけるように幅広く実践報告を聞き、その中て理解を深めた。

6) 看護管理学:4 学年前期

山西文子

日本における医療の歴史的経緯と現状および課題を理解し、医療ニーズに応えていくための医療者の役割を考え、また、日本において国として全国的に医療展開している国立病院機構の医療の現状や組織的な政策医療ネットワークのあり方の現状の特徴と課題を理解し、今後の我が国での医療のあり方はどうあれば良いか、専門職業人として考えを明確にし、このような状況下での看護職の役割はどのようにあれば良いか思料する。 そのため医学・医療の変遷および日本の医療・看護の動向を講義し、変化が激しい医療提供体制の特徴や課題を明確に認識するように、現実的にイメージが出来るよう実際の施設の例を挙げながら動機づけしてきた。自己の考えをレポートとして提出して貰ったが、4年生としてしっかりした考えを持っている学生も居ることが解った。総合看護学実習の導入的な内容で、スムーズに実際に繋がった。

7) NP 論(選択科目):4 学年前期

草間朋子、山西文子

本学大学院において、高度実践看護(NP)コースを開設しており、NP に関心を持っている学部学生が多いことから開設した科目である。1 学年の殆どが本科目を選択し、授業にも積極的に参加した。前半は我が国における NP 教育の実態及び世界各国における NP 教育・役割・活動の実際について概要を講義し、その後は我が国において大学院 NP コースを修了し現場で活躍している NP の方々に活動の実際を話して貰い、後半の 30 分の時間を質疑応答の時間とした。毎回クラス全員が発言し積極的参加型の授業にした。最後の日にはハワイ州で小児の NP をしていた日本人の方が1時間講義された。本授業では、クリティカル NP、プライマリ NP、小児 NP と活動の場もバラエティに富み、活動の実際がとても興味深く、最後まで充実感を味わ

えた。関心が高い学生が選択し、入学して以来このような授業は始めてである。将来はNPになりたいと希望する学生も数名いた。良い反応が多く聞かれた。

8) 看護政策論(選択科目):4 学年前期

草間朋子、山西文子

看護行政等に関心の高い学生の選択者は 50 名以上であった。

看護実践を支える関係法律・制度が立案されていく過程を理解し、将来に役立つための政策的な視点を培い、看護政策策定に参加できる基礎的な能力を養うことで少数でも看護行政官をめざす人か出て欲しいと考え、開設した科目である。3人の国会議員による基礎的な知識と実際の政策決定過程に携わった実践編。その過程において必要な手法である課題に対するディベートの演習を行い、非常にリアルにプロセスを学べた。また必要な交渉力、説得と合意形成などの重要な知識・技術を学び、演習等を通して基本的な看護行政を司る役割の重要性を認識し問題意識を持つことに繋がった。学部生には非常に高度かも知れないと思っていたが、選択した人は関心の高い人達で、能力も高く、各人のニーズにも合っていた様で各人の学びが深まった。

9) 看護学統合実習:4 年次後期

山西文子　岩本郁子

本実習は、4 年次までに学習した全ての看護学実習の内容や看護マネジメントの学習を統合した実習として位置付けている。看護実践能力の向上、看護を統合的にマネジメントするための基礎的能力の育成、自己コントロールと自己開発への課題の明確化を目的としている。

実習は学内実習(45 時間)と臨地実習(90 時間)からなり、学内実習では 4 月～7 月にレポートの作成・プレゼンテーション、看護技術の演習を計画実施し、臨地実習は 6 施設で 7 月～8 月に実施した。臨地実習は「日勤看護師同行実習」「複数患者受け持ち実習」「看護マネジメント実習」「チームリーダー実習」「夜間実習」から構成し、チームの一員として病棟カンファレンスにおける問題提示も実習内容とした。実習施設への事前訪問日を設定し、実習施設の見学、看護マネジメント、看護の特徴についての説明を受け、事前学習の効果を図るとともにスムーズな臨地実習への移行を促した。実習終了後は領域を対象としたアンケート評価を実施し来年度に向けての課題を確認した。来年度は開講して 5 年目になるため、今年度のアンケート評価に対応し実習の充実を図るとともに教育内容、教育方法に関する総括を行う予定である。

【基礎看護学領域】

教育方針

本領域においては、看護に関する考え方やその変遷についての理解を踏まえたうえで、看護実践能力の基盤となる看護技術力や判断力、問題解決力を養うことをめざし、講義・演習・実習を展開する。具体的には、基礎看護学領域の各科目の教授内容を関連付けながら、人間やその生活の特徴を理解し、統合体としての人間に関する情報を的確に収集する力、その情報を分析・判断し看護上の問題や課題を見極める力、一つひとつの看護技術のもつ科学性や安全性、安楽性や倫理性を追求しつつ対象の個別性に応じた看護技術を提供する力、常に自らの看護技術やその提供過程を評価し、「何故そうするのか」「何が最善か」を自問自答していける力の育成をめざす。また、看護学の学習の導入となる領域として、学生が看護の奥深さや楽しさに触れると同時に、専門的な学習への動機づけとなるような授業展開を探求していきたいと考えて

いる。

1）看護学概論：1年次前期

松山 友子

本授業は、看護および看護に含まれる基本概念（人間・環境・健康）について理解し、看護の歴史的変遷を踏まえて今日的課題や今後の展望を考察するとともに、学生自身が今後の看護学の学習に向けた自己の課題を明確にすることを目的に授業を展開した。「看護とは何か」という問いに対し、看護実践の記録映像から看護を考えることを導入とし、ヘンダーソンの理論やICNの定義およびその発展から、看護に対する理解が深められるように教授した。看護の対象となる人間やその生活、看護の目標となる健康については、時代とともに移り変わる人々の意識も含めて理解できるようにした。また、看護の具体的な活動と看護師の役割については、記録映像をもとにグループで検討した。さらに、今日に至るまでの看護の変遷を振り返り、これからの時代の中で看護職を目指す自らの課題をレポートとして課した。毎回の授業では、自らの考えをまとめ、発表する時間をとった。次年度も、配付資料や文献を読み込み、自らの意見を述べることを課題として継続したい。

2）看護学体験実習：1 年次前期

穴沢 小百合 松山 友子 髙橋 智子 川﨑 香織 寺山 明香 三浦 彩子 加藤 江里子 中村 孔美 今井 真喜 早坂 奈美

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、病棟、手術室、外来の 16 看護単位に学生を配置した。本実習は学生が入学後 2 か月間の講義・演習を通して学んだ看護・人間・健康・環境の内容を、実際の医療現場において見学することや指導者からの説明により体験的に学習した。

今年度、学生は看護師が患者を深く理解していることに特に感銘を受け、人間を身体的・精神的・社会的側面を有する統合体として捉えることで、個別性が把握できることを深めていた。また、カンファレンスやレポート記述、全体まとめ等では、実習で体験した具体的な事象を講義の内容と関連付けて解釈すること、新規の学習内容を言語化して説明することを強調した。例えば学生は、「看護師が患者に声をかけている場面から意思を汲み取ろうとしている」と解釈し、講義で耳にした「その人らしい生活」と関連づけて考え、「それを支えるためには意思を確認することが必要だ」と学んでいた。最終日の発表会では、具体的かつ整理された学びが発表され学習の深化が伺えた。今後も講義と実習を関連づけ、新たな気付きが得られるように指導を工夫したい。

3）看護実践技術論Ⅰ（日常生活における援助技術と判断）：1 年次前期

松山 友子 穴沢 小百合 髙橋 智子 川﨑 香織 三浦 彩子 寺山 明香

看護技術の基本的な成り立ち及び人間の生活の特徴に関する理解に基づき、様々な状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶことを目的として授業を展開した。看護技術の基本的な成り立ちについては、人間を対象とする看護技術の特徴を理解し、安全と倫理に配慮しつつ科学的根拠に基づく看護技術を提供する意義や看護職が専門的な視点から人間の生活過程を整える意義を教授した。また、看護技術に関する基本的な考え方を踏まえ、看護場面に共通する技術（感染予防、ボディメカニクス）や人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境の調整技術・活動休息・安全・安楽・衣生活・排泄・食事を整える技術）について、講義やグループワーク、看護技術演習を実施した。演習にお

いては、各看護技術の典型事例の援助過程を通し、技術の原理・原則を理解して実施することに加え、専門的視点による観察、安全・安楽への配慮、患者への倫理的配慮を具体的な行動レベルで理解できることをめざした。次年度も、臨地実習における実践を仮定した看護技術の自己学習の促進を継続課題としたい。

4) 看護実践技術論Ⅱ（治療、処置における援助技術と判断）:1 年次後期

穴沢 小百合 髙橋 智子 松山 友子 川﨑 香織 寺山 明香 三浦 彩子

人間の健康および医療に関する理解を基盤として、看護職による専門的な診療の補助の意義と方法および看護技術を提供するために必要な知識・技術・態度について学習することを目的に授業を展開した。

診療の補助技術のうち、無菌操作、与薬、注射、静脈血採血の技術、排泄機能に障害がある患者の援助（浣腸、膀胱留置カテーテルの挿入・抜去、カテーテル管理）を中核とし、演習で使用する物品について、①事前に添付文書等により取り扱い上の留意事項を確認すること、②破損等の有無を事前に確認すること、③必要に応じ無菌的に扱うことを強調した。また、患者誤認防止・誤薬防止・誤刺防止の方法については、原則を遵守する重要性を強調した。一方、看護技術の習得には原則を踏まえた繰り返しの練習を要する。そこで、実習室に物品を準備し学生が練習できる環境を整えると共に、注射の技術については学生の安全確保の観点から、教員の見守りのもとで学習できるよう練習日を設定した。これにより、学生は計画的・主体的に技術の学習に取り組むことができていた。次年度も、学生が主体的に学習できるように指導方法を工夫したい。

5) 看護実践技術論Ⅲ（看護技術の統合）:1 年次後期

穴沢 小百合 髙橋 智子 松山 友子 川﨑 香織 寺山 明香 三浦 彩子

さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために、看護実践において対象の日常生活に関わるニーズを判断し、対象の個別性に応じ、さまざまな看護技術を統合・応用・創造し、最善の看護を実践する意義と方法を学習することを目的として授業を展開した。

対象の個別性に合わせた看護援助の必要性と方法の判断、それらを踏まえた看護計画の立案・実施・評価の重要性および清潔援助について教授し、看護技術の統合を図るため、提示事例について点滴中のトイレ歩行援助と点滴中の清潔援助に関する計画立案・実施・評価を行った。点滴中の援助における教材は、昨年度までは点滴を滴下した状態で援助ができ、刺入部と輸液液面との高低差および刺入部の圧迫・屈曲による滴下変化等の観察ができるものを使用していたが、今年度はこれを改良し刺入部の透明化を図ると共に刺入部位を様々な部位に設定できるようコンパクトにしたものを使用した。学生からは、「本当に点滴しているように看護ができた」、「点滴部位を清拭するときの難しさを学べた」という意見が聞かれた。次年度も、教材や指導方法を工夫し、対象の個別に合った援助を考え実施できるよう検討したい。

6) ヘルスアセスメン:1 年次前期

穴沢 小百合 松山 友子 髙橋 智子 川﨑 香織 寺山 明香 三浦 彩子

対象の健康問題を把握するために必要な観察、コミュニケーション、バイタルサイン測定の技術について教授した。

今年度は、バイタルサイン測定の実施におけるコミュニケーションの活用と原則の遵守を課題とした。講義では事例患者に対する健康歴の聴取や問診を例に円滑なコミュニケーションについて検討し、演習ではバイタルサイン測定時の質問項目を準備して、コミュニケーションを図

りながら測定するように促した。しかし、学生は看護技術の手技に集中してしまう傾向にあり、コミュニケーションを図りながらの援助が難しかった。一方、原則を遵守した血圧測定では、学生の習得促進に向けてデモンストレーションの時間を確保し、丁寧に演示・説明することを心掛けた。その結果、学生個々の技術習得確認では、測定値の読み取りに指導を要したものの、マンシェットの巻き方はほぼ習得できていた。演習での学習教材はリバロッチ型の血圧計を用いたが、実習で使用する電子血圧計も含めさまざまな種類の血圧計による測定方法と測定時の留意事項を検討した。次年度も、患者の個別性に応じたコミュニケーション方法や原則を遵守したバイタルサインの測定を継続課題とし、指導を工夫したい。

7) フィジカルアセスメン:1 年次後期

穴沢 小百合 松山 友子 髙橋 智子 川﨑 香織 寺山 明香 三浦 彩子

対象の健康問題を把握するために、フィジカルアセスメントの基本技術、腹部・消化器系、呼吸器系、循環器系、運動器、頭頸部・神経系の観察について、前提科目の事前学習を促しつつ教授した。

今年度は乳房の触診モデルや耳孔の観察モデルなどの教材を補充し、テキスト等を参考にしながら主体的に学習する時間の充実を図ると共に昨年度同様、大学院生による「心音の異常」に関する講義・演習を実施した。これらは、フィジカルアセスメント能力の強化に加えて、自ら学ぶ主体性の強化、看護学の学習に対する動機付けになった。また、実習で使用する記録用紙を用いて、事例患者に対する問診とバイタルサイン測定の看護計画を立案し、実施・評価をした。これに加え、フィジカルアセスメントを行う看護師に求められる知識・技術・態度、自己の課題等についてグループワークおよび発表を行うことで、実習に向け課題の明確化を図ることができた。看護計画の実施と評価では、学生がフィジカルイグザミネーションにより得られたデータをわかりやすく記録することが不十分であり、次年度はこの点の改善に向けて指導を工夫したい。

8) 看護過程と看護方法論:1 年次後期

松山 友子 穴沢 小百合 髙橋 智子 川﨑 香織 三浦 彩子 寺山 明香

看護過程は、看護の対象となる人々の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法であることを踏まえ、本授業は「看護過程の概要とその活用の意義」「看護過程の展開方法」「看護記録」「質の高い看護の提供に向けた看護過程の活用の現状と課題」で構成した。具体的な看護過程の展開方法については、看護過程の 5 段階を、さらに 11 のステップに分け、ステップごとに「基本的な知識の講義」→「事例展開の課題（個人課題）」→「課題のサンプル例の提示と解説」というパターンで講義・演習を展開した。学生は、事例展開を自分で実施しながらステップを進めたので理解ができたと述べていた。また、基本的知識を確認する小テストや毎回の課題に関する疑問点の解説や分からなかった点のグループ検討を実施し、基本的知識の理解を図った。次年度も基本的知識の理解と定着を継続課題としたい。

9) 日常生活援助展開実習:1 年次後期

松山 友子 穴沢 小百合 加藤 江里子 髙橋 智子 鶴巻 香奈子 中村 裕美 今井 真喜
小野 治子 川﨑 香織 児玉 菜桜 庄司 満明 手塚 久美子 寺山 明香 中村 孔美
日髙未希恵 牧 栄理 三浦 彩子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、13 病棟に学生を配置した。1 名の患者を受持ち、基本的ニードの充足状況の判断に基づく援助を実践することを通し、学

内で学習した日常生活援助に対する知識・技術・態度の統合・向上をはかることを目的とした。学生は、患者のニードの充足状況を踏まえ、個別性に応じた援助の提供をめざして、援助計画を立案し、その計画に基づき実施と評価を日々行った。5 日間の実習期間の中で、学生は患者の反応を的確にとらえ個別に応じて援助することの難しさを実感するとともに、その必要性や重要性を学習し、実習終了時には看護師が日常生活援助を行う意義を自らの言葉で述べ、これまでの学習を深化させていた。

また、実習前課題の看護技術の練習に臨床実習を想定した事例を取り入れたり、グループで技術確認を実施したりしたことにより、学生が実践に向けた課題に気付くことができ、効果的に練習が進められていた。さらに、実習指導の面では、実習指導者と担当教員との相談・連絡のための時間設定が定着してきており、これまで以上に連携が円滑に行われた。次年度も継続したい。

10）看護過程展開実習:2 年次前期

松山 友子　穴沢 小百合　金子 あけみ　加藤 江里子　髙橋 智子　鶴巻 香奈子　中村 裕美　今井 真喜　小野 治子　川﨑 香織　児玉 菜桜　庄司 満明　寺山 明香　中村 孔美　日髙 未希恵　三浦 彩子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、14 病棟に学生を配置した。本実習では、「看護過程と看護方法論」の授業で学習した知識・技術および態度を活用し、一人の受持ち患者の看護過程を展開することを通し、個別性に応じた必要かつ適切な看護を実践するための基礎的能力を養うことをめざした。学生は、受持ち患者の情報をアセスメントし、患者の全体像をとらえた上で、これまでの学習で対応可能な看護上の問題点を 1 つ選択し、その問題に焦点を当てて看護計画の立案・実施・評価を行った。2 週間の実習期間の中で、学生が既習の学習内容と実践の具体例との統合的な理解を効果的に深めていくために、看護過程の展開の進行に沿ったテーマカンファレンスや方法論の理解の促進をねらった全体カンファレンスを組み合わせて設定した。これによって、学生は日々思考を整理・深化させることができたと評価していた。

一方、実習前には基本的知識の定着が図れていない学生が少なくないことから、1 年次に展開した事例資料を使用した事前課題を実施し、実習への導入として効果的であった。次年度も継続して検討したい。

11）看護教育学:4 年次後期

松山 友子　穴沢 小百合

看護教育の教育制度・教育課程等の歴史的変遷について学習し、看護学教育に関する現状と今日的課題について考察した。また、看護学教育の特徴となるカリキュラムや教育方法および評価の概要を学習することを通し、看護職者としての教育的視点を養うとともに、自らのキャリア開発に向けた教育や自己評価の意義を検討した。授業では、看護教育学に関する学生の疑問を洗い出し、その疑問を解決すべく、大学における看護学教育に関わる制度やカリキュラムに関する学習を進めた。また、実際に学生が 5 分間の授業を展開し、相互評価することを通し、看護学教育の授業設計や評価の考え方を学習した。キャリア開発に関しては、新人看護職員研修ガイドライン等を読み、新人看護師としての活用方法を検討した。学生は、4 年間の自分の学習成果を振り返り、大学における看護学教育の意義を見直すと共に、学ぶ側の視点だけでなく教える側の視点へも視野を広げて考えることができ、これからも学び続けることの重

要性を認識できたと述べていた。次年度も、毎回の授業テーマに関するレポートを継続しつつ、グループでの検討も充実させたい。

【成人・老年看護学領域】

教育方針

成人・老年看護学では、成人期と老年期を一連のライフサイクルとして捉え、幅広い年齢層の多様な健康問題を抱える人々を対象とした看護実践能力の育成を目指している。

教育過程としては、はじめに成人・老年期にある人々の身体・心理・社会的・霊的特徴を理解し、次いで各期の代表的な疾患に対する標準的な看護を学習する。そして成人・老年看護に必要な看護技術演習や、具体的な事例に対して看護計画を立案する演習など、臨床実践を意識した授業科目を展開している。さらに臨床実習では、既習の知識をベースに、マニュアル化された看護ではなく、対象それぞれのもつ多様な個別性を重視した custom-made の看護を実践する力の育成を重視している。

臨床実践に直結する教育を担う領域として、“tomorrow’s Nurse”の基礎となる科学的・論理的問題解決能力の錬成につながる講義・演習・実習を展開していきたい。

1） 成人看護学概論:1 年次後期

竹内 朋子, 松本 和史, 秋場 研

成人期にある人々の身体・心理・社会的特徴と、成人看護学の基本を理解することを目標とした。対象への理解を深めるため、成人期の人々の健康に関する人口統計データの概説と併せて、様々なライフイベント、生活習慣と健康問題の関連など、自己に置き換えて考えられる学習課題を設定した。また、成人看護にまつわる主要な諸理論・概念について概説し、自己のこれまでの具体的な経験と照らし合わせることで理解が深まるよう工夫した。さらに、次年度以降の実践論の学習につながるよう、成人期の経過別看護（急性期看護、慢性期看護、終末期看護）の特徴に関してそれぞれ概説した。

成人看護学の導入となる科目であるため、次年度も看護の対象となる成人の多様性や個別性を重視する意義を充分に理解できる講義を目指したい。

2） 老年看護学概論:1 年次後期

竹内 朋子, 岩渕 起江

老年期にある人々の身体・心理・社会的特徴と、老年看護学の基本を理解することを目標とした。対象への理解を深めるため、人口統計データに基づいて高齢者の動向を概観し、老年看護学に関する諸理論・概念、高齢者に関する社会保障制度について講義した。また、加齢による身体的変化が日常生活動作へ及ぼす影響を学習するため、高齢者体験キッドを用いた高齢者体験演習を取り入れた。講義に際しては、自分の老後の生活をイメージしたり、老年観を問う課題などを通して、加齢（aging）を身近に感じることができるように工夫した。

次年度も老年期にある人々を多角的に理解できるような講義を目指したい。

3） 慢性期看護論:2 年次前期

竹内 朋子, 松本 和史

慢性期看護をより具体的に理解できるよう、経過別看護で広義の慢性期看護を構成する慢性期看護と終末期看護の 2 部で展開した。慢性期看護に関しては、慢性疾患をもつ対象者の受容過程やセルフケア能力を高めるための援助について理解することを目標とした。器官系統

別に代表的な慢性疾患とその看護について講義した。解剖生理や病態生理を復習できるような事前課題を課し、疾患と看護が結びつくように工夫した。視覚教材や実演を伴った講義を取り入れ、実践的な理解が深まるよう促した。終末期看護に関しては、終末期にある患者とその家族を全人的に理解し、苦痛の緩和やその人らしさを支える看護について理解することを目標とした。特に、死すべき存在（mortal）である生命を対象とする医療職を目指す者として、自己の死生観を充分に深化させるともに、死にまつわる多様な価値観を理解できるよう、体験型ワークやディスカッションなどを取り入れたり、看護学以外の学問領域の知見についても言及するなどして講義展開を工夫した。

次年度も、課題や講義を工夫し慢性期看護に必要な基礎的知識と実践能力を統合して獲得できるような講義を行いたい。また、引き出す自ら「死」について熟考し、他者と死生観を議論する契機となる講義を目指したい。

4）老年期看護論：2 年次前期

岩渕 起江，日髙 未希恵

本年度より開講した科目である。高齢者の身体機能の低下および精神面や社会的背景を取り入れ、高齢者を取り巻く社会の現状をふまえ講義を展開した。高齢者に多くみられる症状および看護について視覚教材を取り入れ、また全ての講義では事前学習を実施することにより、学習効果が高まる工夫をした。

認知症高齢者の増加に伴い、症状や疾患別看護の中で認知症の特性を生かした看護実践について学ぶ必要性があることを考慮し、次年度は認知症の講義を初回で実施する事とする。

5）老年看護実践論：2 年次前期

岩渕 起江，日髙 未希恵，秋場 研，庄司 満明，中村 孔美，今井 真喜

老年期看護論で学習した内容をベースとし、高齢者の特徴をふまえた看護を展開する実践能力の基盤となる看護過程の演習を中心とした講義を実施した。本年度より NANDA-Ⅰを取り入れた。演習に用いた 2 事例はいずれも高齢者に多い疾患と症状を組み合わせ、国家試験の状況設定問題を視野に入れ作成した。演習の展開は提出期限を設定した個人ワークであり、学生個々の学習状況に応じた指導に努めた。

看護過程のステップを確実に獲得し高齢者の個別性を考慮した看護を考察できるよう、次年度はさらに事例を精選し、演習の展開方法についても検討していきたい。

6）成人看護実践論Ⅰ（急性期）：3 年次前期

松本 和史，秋場 研，庄司 満明

急性期にある対象の身体的・心理的・社会的特徴と生命維持、合併症予防、QOL 向上のための看護について理解することを目標とした。科目の前半では、生命維持機能と生命危機状態についての講義を行い、その後周術期看護や救急看護の講義につなげることで、侵襲による身体の変化やその予防方法について包括的に理解できるようにした。また、急性期の心理社会的側面を理論的に理解するために、危機理論などを用いて説明した。さらに、急性期看護に必要な看護技術として、呼吸管理・輸液管理・創傷処置・ドレーン管理等の演習を実施した。演習前には、看護技術の原理などを講義し、知識と技術が統合できるよう工夫した。後半は、代表的な手術療法を行う疾患の看護についての講義を行い、各手術療法に特有の合併症や看護についての理解を深めた。

カリキュラム改訂により、本科目は本年度で終講となる。

7) 成人看護の探求:3 年次後期

竹内 朋子, 岩渕 起江, 松本 和史, 秋場 研

成人看護にまつわる今日的課題について理解し、看護職として自己の見解を述べられることを目標とした。急性期・慢性期・終末期の経過別および成人看護全般の枠組みの中から8つのテーマを選出し、それぞれに関する基礎知識をベースに最新の動向を講義した。講義は特定の知見に偏ることなく多義的な解釈が可能な内容にし、参加型ワークやディスカッションを通して他者の価値観についても理解できるよう工夫した。各回の講義後にテーマに関して論述するレポートを課し、各自が考察を深め、自己の見解を他者に伝えられるように促した。

カリキュラム改訂により、本科目は本年度で終講となる。

8) 老年看護学実習Ⅰ:2 年次後期

岩渕 起江, 竹内 朋子, 松本 和史, 日髙 未希恵, 秋場 研, 庄司満明, 中村 孔美, 今井 真喜

各学生が、特別養護老人ホームまたは介護老人保健施設において実習することにより、地域と施設で生活する高齢者の現状と看護師の役割を理解することを目標とした。昨年までは実習の振り返りが最終日の学内であったため、実習の学びの考察を十分できていなかった。そこで本年度より施設実習の翌日を学内実習に切り替え、前日の学びを個人やグループ単位で振り返り、学びの深化に努めた。また学生にとって各論実習の初回となるため、心配な事や疑問点についても教員に相談する時間を確保した。

次年度も本年度と同様のスケジュールで実習を展開し、地域と施設で生活する高齢者の理解を深めることができる実習を展開していきたい。

9) 成人看護学実習Ⅰ(急性期):3 年次後期

松本 和史, 秋場 研

外科的治療を受ける患者を 1 名受け持ち、周術期から回復期までの看護展開を行った。今年度も、受け持ち患者などの手術見学を取り入れることで、患者が受ける侵襲の実際や周術期の看護師の役割への理解が深まるように図った。さらに、実習最終日に手術室看護師とのカンファレンスを行い、手術見学の学びを振り返る機会を設けた。病棟での看護展開では、術直後から全身状態の観察や合併症の予防のための看護援助を自分で計画したうえで行うよう促した。また、クリニカルパスや経過観察表などを積極的に活用し、経過を予測して看護を計画・実践できるよう工夫した。これらにより、急性期における患者やその家族のおかれた状況、治療経過に応じた看護援助、合併症の予防について実践的な学びを深めた。

次年度も、周術期を中心とした急性期の看護を自律的に考え実践できる能力を獲得できるような実習展開を目指したい。

10) 成人看護学実習Ⅱ(慢性期):3 年次後期

松本 和史, 今井 真喜, 中村 孔美

慢性期にある対象の特徴を理解し、対象が生活過程を整えながら社会生活を営み、セルフマネジメント能力を身につけるための看護実践を学ぶことを目的とし、独立行政法人国立病院機構東京医療センターと東京病院にて臨床実習を行った。今年度は、対象のセルフマネジメント能力を引き出し、生活を再構築するための看護過程を既存の理論やモデルに基づいて展開できるよう促した。また、実習初日に、退院支援看護師からの退院支援における看護に関する講義と地域連携室の見学を設け、退院や社会復帰への支援について多角的に学べるよう工

夫した。

次年度は学内での事前準備をさらに充実させ、個別性のある看護展開を実施できるようにしたい。

11) 成人看護学実習Ⅲ(終末期):3 年次後期

竹内 朋子, 庄司 満明, 中村 孔美

終末期患者を 1 名ずつ受け持ち、一連の看護過程の展開に基づいて、終末期患者とその家族を支える看護を実習した。終末期患者とその家族の抱える全人的苦痛をアセスメントし、その緩和のための看護実践を行なうことだけでなく、実習やカンファレンスを通して、患者、家族、グループメンバー、医療スタッフたちの死生観に触れ、看護職としての自己の死生観を深化させられることも目指した。必ずしも全ての学生が終末期患者を受け持つことができないのが課題ではあるものの、臨死期・臨終時・死後のケアを実践・見学できたグループメンバーの実習体験について、カンファレンス等を通して共有し、各自の学習を深めることができた。

次年度も終末期患者の安楽と尊厳を重んじ、その人らしい最期を迎えるための看護実践能力を高める実習を目指したい。

12) 老年看護学実習Ⅱ:3 年次後期

岩渕 起江, 日髙 未希恵

65 歳以上の高齢者を 1 名ずつ受け持ち、高齢者の特徴をふまえた看護実践を展開した。本科目では経過別や疾患別看護に特化せず、高齢者および家族に対して、入院中だけではなく、退院後の生活を視野に入れたに看護を実践できるよう指導した。本年度よりバーセルインデックス(BI)を用い、高齢者の ADL 能力の変化を明らかにし、自らの看護実践について評価できるようにした。しかし BI の点数設定の幅が広く、高齢者のわずかな変化についての記載が難しいといった声も聞かれた。

次年度は高齢者のADL能力の変化について評価が簡便となるようなスケールについて検討していきたい。

【小児看護学領域】

教育方針

あらゆる発達段階および健康状態にある子どもと家族を理解し、小児看護が実践できる能力を養うことを目的としている。小児各期の子どもとその家族やそれらに影響を与える社会的環境も含め、身体的・精神的側面だけではなく社会的生活体として小児を捉えるための小児看護学として位置づけ、「小児看護学概論」、「小児看護実践論」および「小児看護学実習」の科目で構成している。

1) 小児看護学概論:2 年次後期

中島美津子、玄順烈、小野治子

小児各期の成長・発達理論とその評価方法を学び、小児医療の歴史的変遷、倫理、理念および機能を学び、現代に小児看護の役割と課題を明確にすることを目的とした。

講義内容は、各成長・発達段階の理論を学習後、評価ツールによる演習を実施、その後、理解を深めるため幼稚園・こども園の一日見学を実施した。実際の子どもとの関わりを通して、認知形成プロセスや遊び、運動機能、言語発達などの個人差、月齢差など発達段階の違いを学んだ。学生評価には、成長・発達を考えながら接することで、子どもへの苦手意識が払拭さ

れ、小児看護学実習でこの学びを活用したいと述べていた。後半は、子どもを取り巻く環境と家族として、多角的現代の視点で子どもを取り巻く環境、法律、施策を学習後、学生自らテーマを決め調べ発表するアクティブラーニングによる学びの共有化を実践した。その結果、子どもを社会的生活体として身近に捉えることができるようになったという評価が聞かれた。次年度は幼稚園・こども園の見学を2日間としさらに実体験からの学びを深め、あらゆる成長・発達段階にある子どもたちの理解と看護の実践力に繋げていく。

2) 小児看護実践論:3 年次前期

中島美津子、玄順烈、小野治子

子どもと家族を理解し、子どもの病状や経過、子ども特有の症状に応じた看護実践に必要な基礎的知識を学ぶ。また、子どもの健康障害の回復や成長発達の促進に向けて、子どもと家族の援助方法を理解することを目的としている。

講義内容は、子どもと家族への看護および急性期から終末期までの経過別看護、また障害をもつ子どもと家族の看護など事例を用いて教授した。具体的には、子どもの病態の理解から検査、治療処置、看護を展開した。小児看護技術演習においては、小児看護に特有な看護技術としてバイタルサインズ測定および身体計測、静脈内点滴時のシーネ固定や与薬などを、DVD 教材やバイタルサインズ人形、新生児モデル人形などを用いて実施した。また、看護の展開においては、発達段階が異なる川崎病、骨折、気管支喘息の子どもと家族の看護に取り組んだ。学生は、グループワークやプレゼンテーションを通して実践に活かせる小児看護の学びが共有できていた。次年度はさらに発展する医療的ケア児や発達障害等も含め、病状や治療に関する情報と成長発達との関連を明確にさせるような演習の展開を考えている。

3) 小児看護学実習:3 年次後期

中島美津子、玄順烈、小野治子

子どもの特徴や成長・発達、健康レベル、家族の繋がりに対する理解を深め、小児看護実践に必要な基礎的能力を養うことを目的とした。実習は、東京医療センター5B 病棟、成育医療研究センター、東埼玉病院(障害児(者)病棟)の3看護単位において各グループ2週間ずつ実施した。実習1週目の水曜日を学内日とし、基礎知識の確認とアセスメントの指導、看護実践のシミュレーションを行った。実践内容は、患児 1 名を学生 2 名で受持ち、実践以外にもカンファレンスを通じて子どもが示す反応の意味、子どもが力を発揮するための援助の創意工夫、家族の状況などの状況共有し、具体的援助の実践に帰結していた。障害児(者)病棟では、非言語的コミュニケーションを多用し、反応を詳細に捉えることで患者の理解を深めることができていた。また、多職種連携(IPW)の実際を学ぶ機会となり患者を多角的に捉えられていた。今後は、学生の学習達成度の評価を継続的に行うとともに、実習指導の充実に向けて教員と実習指導者がさらなる連携の下、実習指導を推進していく。

【母性看護学・助産学領域】

教育方針

母性看護学では、人間の生涯における性と生殖の健康問題と予防法に主眼を置き、特に女性のライフサイクル(乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期)およびマタニテイサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護学実践論、母性看護学実習から成り、母

性看護学実習では妊娠期・分娩期・産褥・新生児期に重点を置いて実習を展開する。

1) 母性看護学概論:2 年次後期

宮﨑文子、朝澤恭子、関屋伸子、加藤江里子、三島典子

母性看護学概論では、母性看護の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖(種族保存)の側面から、女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点を置き、母性各期における援助方法および母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとした。講義内容は、母性の概念、リプロダクテイブヘルス/ライツの概念、セクシュアリティ(人間としての性学)、母性看護とは、社会の変遷と母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計から見た母子保健の動向、母性看護の対象となる人の理解、女性のライフサイクル各期(思春期、成熟期、更年期・老年期)の健康問題と看護、母子保健に関する関係法規、母性看護における倫理的課題(生命倫理)と対処法(演習)について教授した。全体的に学生参加型の授業内容を取り入れ出席状況は良好であった。来年度も教材の精選を行い学生主体の教授法を考慮していきたい。

2) 母性看護学実践論:3 年次前期

朝澤恭子、加藤江里子、宮崎文子

本科目では、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある母子とその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを実践する上での援助方法を学ぶことを目的とした。授業は、講義と演習により構成し、対象である母子の生理的・社会的特徴などの基礎知識を踏まえて、対象のニーズを理解できるようにした。講義では毎回ミニテストを取り入れて学んだ知識が定着するよう工夫した。演習は、母性看護の基本的看護技術と看護過程の展開シミュレーションで構成し、基礎知識を踏まえて対象のニーズをアセスメントし、ケアのための具体的な計画や看護技術が実践できるように計画した。学生は、母子の身体的・心理・社会的特徴を理解した上で、ウェルネスの視点でマタニティ期ある対象者をアセスメントし、周産期の母子とその家族に対する基本的な母性看護技術を習得した。

3) 母性看護学実習:3 年次通年

朝澤恭子、関屋伸子、加藤江里子

母性看護学実習は、周産期にある母子およびその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを展開するために基礎的な看護実践能力を身につけることを目的としている。実習は、東京医療センター5A 病棟および産科外来、日産厚生会玉川病院の産科病棟および産科外来において 90 時間実施した。

妊娠期のケアとして、産科外来の妊婦健康診査における妊婦計測の実施および妊娠各期の保健指導、超音波診断法、母親学級、助産師外来を見学した。分娩期のケアでは正常な経過をたどる産婦のケアの一部実施または分娩見学を行った。産褥期のケアにおいて、学生は1組の母子を受け持ち、看護過程の展開を実施するとともに、看護実践として母子の健康状態の観察、褥婦に対するアロマトリートメントおよび足浴、新生児の沐浴またはドライケアを行った。周産期の異常へのケアについてはカンファレンスを実施し、学生主体でディスカッションを行った。

次年度は学生からの要望である事前のオリエンテーションおよび技術演習の充実を反映させ、より効果的な実習ができるよう学生を支援する。

4) 疾病と治療Ⅳ:2 年次前期

宮﨑文子、斉藤史郎、金子あけみ、酒井一夫

本講義は、泌尿器系、生殖器系、内分泌系の器官における特徴的な疾患を取り上げ、病気のプロセスと病態生理、特徴的な症状と経過、診断の基準、検査データー、治療方法、予後について、テキストやオリジナルなパワーポイント、プリント等を用いた講義を行った。看護実践の基礎となる疾病による形態・機能及び代謝の変化、病気の発生機序や症状出現のプロセスに関する理解を深めるためには、1 年次に学習した解剖生理学が前提となるため、これらの基礎知識について確認しながら講義を進めるとともに、特徴的な疾患と関連する部分の問題を提示・解説し学生の関心が高まるようにした。また、講義だけではイメージがつきにくい疾病に伴う生理学的な変化や治療の実際については、DVDの視聴や実際のインスリン注射器に触れさせたり、乳癌教育用視聴診モデルを用いて実際に視聴診の体験を取り入れる等、実践的でリアリティのある講義となるよう工夫した。

オムニバス形式の講義であるため講師との連携が取りにくいため、試験・実習結果から見て学生の理解は十分とは言い難い。次年度は連携を深め体系的な授業になるよう工夫したい。

5) 国際看護学:3 年次前期

橋本美幸、石井美恵子、山田英子、小嶋奈都子

進展するグローバリゼーションと健康問題との関連、世界の健康問題の現状や課題を知り、医療従事者としての役割機能や国際貢献について学び、考える内容の講義を行った。後半は対象の文化を考慮した看護ケアについて考えることを目的として、Team-Based Learning 方法を用いて、学生間で討論を行った。これにより国内外の看護活動における異文化理解についての理解を深める機会となった。

【精神看護学領域】

教育方針

精神障害だけにとどまらず、身体・知的を含む三障害の概念や特性を理解できるように、歴史的背景や障害に関する基礎的な知識、実際に行われている看護援助を示しながら、障害に対する理解を深められるようなカリキュラムを実施している。また、授業や実習を通して、自らの障害者観と向き合いながら、障害者の健康増進を考えられる力を身につけ、ノーマライゼーションの推進を支援できるようになることを目指している。そして、知識として習得することだけに留まるのではなく、障害者を取り巻く現状や課題について、自らの意見を持ち、積極的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

1)臨床コミュニケーション論:2 年次前期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

看護を提供する上で重要なコミュニケーションに焦点を当てた科目である。コミュニケーションの構成要素や影響する要因などの理解を深め、自己のコミュニケーションを見つめ直し、自己啓発していく重要性を認識することを目的とした。内容としては、日常的な場面の「聴く」・「話す」等の技術について、陥りがちな課題に焦点を当てながら、段階的に実際の臨床場面での効果的なコミュニケーションを考えていける構成とした。また、看護場面での対象との支援関係形成や信頼関係構築を考えることを目的として、プロセスレコードを活用した。学生が積極的に参加できるように、すべての授業において、ワークシートを用いた体験型の授業展開を行った。コミュニケーションが上手くいくことだけにとらわれず、専門的で相手の立場に立った自分らしいコミュニケーションを常に模索していけるような授業展開を心がけていきたい。

2) 精神看護学概論:2 年次後期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

初学者であるため、できる限り難しい専門用語を用いず、精神看護について関心が持てるように心がけた。こころの働きや精神的健康、障害の概念や障害者の歴史的背景が理解できるように、教科書やオリジナルのパワーポイントを用いながら授業を行い、将来看護師として、精神障害や精神障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。また、健康レベルに応じた人間理解を深め、精神障害者の健康増進・ノーマライゼーションを推進するために必要な基礎的知識を身につけられるように展開した。一方的な授業にならないように、授業内で学生が発言できる機会を設けたり、リアクションペーパーを書かせるなどの配慮を行った。

3) 精神看護実践論:3 年次前期

田野将尊、田中留伊、中村裕美

精神的な健康に障害を持つ対象を理解できるように、主な精神疾患や特徴的な症状について、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。精神科医療の現状を踏まえ、入院治療だけではなく地域社会生活への適応に向けての看護実践方法を考えられるように視聴覚教材を用いて授業を行った。また、精神障害のある対象の支援に必要な基本的な看護技術が学べるように看護過程を展開させ、グループワークを行う事で学びを深めた。さらに、後期の精神看護学実習先の施設で活躍している専門看護師を外部講師として招き、大学と病院の連携を図るとともに、学生の実習に向けた意識づけを行い、学習効果を高められるよう工夫を行った。各授業の最後にリアクションペーパーを提出させ、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足、フィードバックできるような工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は「解らないことが質問しやすい」・「知識の確認になる」など好評であったため、次年度以降も継続していく予定である。

4) 障害者看護論:3 年次後期

田中留伊、中村裕美、田野将尊

精神・身体・知的の三障害を持つ対象を理解できるように、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。障害とともに生きることで社会生活への参加が制限されたり、生活行動の変更を余儀なくされる対象に対する理解を深めるために視聴覚教材を用いて学び、看護の特徴を考えられるように授業を行った。また、筋ジストロフィー、重症心身障害、神経難病などの対象の具体的な看護実践や生活の質を高める看護実践の方法については、臨床で看護を実践している講師を招き、生きた看護体験を学べるよう授業を行った。各授業の最後にリアクションペーパーを提出させ、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足、フィードバックできるような工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は好評であったため、次年度も継続していく予定である。

5) 精神看護学実習:3 年次後期

田中留伊、田野将尊、中村裕美

独立行政法人国立病院機構東京医療センター、国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院、医療法人社団碧水会長谷川病院、公益財団法人井之頭病院、NPO 法人ハートフル翔ワークイン翔を実習施設として実習を行った。本実習では、精神障害を持って生きる人を包括的に理解するとともに、精神障害者の自立および自己実現に向けた援助を通し、必

要な看護が実践できる基礎的能力を育成することを目指した。学生は 1 人の受け持ち患者を通して看護過程を展開し、看護計画の立案・実施・評価を行った。また、実習指導者や担当医師から臨床講義をして頂いたり、作業療法や参加しているプログラムに一緒に参加させて頂いたりしたことで、精神医療の実際を知るとともに、保健医療福祉チーム・システムの現状や課題等について考えることができた。さらに、全ての学生がプロセスレコードを記述し看護場面の再構成を行うことで、患者との関わりを通して自己洞察を行った。実習中は毎日カンファレンスを実施し、学生の疑問をその日に取り上げ、翌日の看護に結び付けられるように指導した。実習の最終日には学内で実習まとめ会を行い、他の施設や病棟での学びを共有する場を設け、自らの精神障害者観を明らかにし、看護の役割と課題についての考えを深める機会とした。今後も、実習指導者や担当教員の意見を反映させ、効果的な指導を検討していきたい。

【地域看護学】

教育方針

地域看護学領域では、在宅看護学と看護師を対象とした地域看護学を教授している。

地域で生活するあらゆる発達段階や健康レベルに応じた個人・家族、小集団・地区を対象とした健康の増進、健康・生活上の課題を解決するための理論と方法および地域看護の役割を理解できることをねらいとしている。

地域特性を踏まえ、行政保健、学校保健、産業保健、在宅ケア・訪問看護の場において、そこで生活・活動する人々が自らの健康状態を認識し、制度や社会資源を活用しながら疾病予防、健康の保持・増進を図るための支援方法、潜在的・顕在的な地域のニーズを把握するための地区診断の理論と方法、住民・専門職・関係者が協働で取り組む健康増進計画等の立案・実践・評価、地域包括ケアシステム、施策化等について学習すると共に、在宅療養者とその家族がその人らしく療養できるための看護の機能と役割、地域住民全ての安心安全な暮らしを守る視点を学習する。

1) 家族看護学:2 年次後期

石田千絵、佐藤潤、竹内朋子、田中留伊、玄順烈、関屋伸子、岩渕起江

家族を単位として展開する看護の考え方を理解したうえで、様々な視点で家族を捉える見方を養い、病気や障害が家族に与える影響と家族が障害や患者に与える影響について理解し、家族看護の意義と役割を学ぶことを目標とした。また、家族の役割・機能、現代の家族の諸問題に着眼しながら、家族観を見つめなおすことができるように講義を行った。

本科目の第一の特徴は、「オムニバス方式」で行っていることである。家族や家族を対象とする看護について、「小児」「女性」「男性」「高齢者」「死にゆく人」「精神障害」「在宅療養者」の各視点を 7 名の教員が担当することで、広く深く考察できていたように思われた。

第二の特徴は、疾患の枠を超えた「女性」と「男性」の講義があることである。母親や父親の体験を客観的に見直しつつ、自分の近い将来をイメージすることで、家族を予防や保健管理の視点での学習が可能となり、ウェルネスの理解が高まる内容となった。

対象が 2 年生であることから疾患についての知識不足は否めないが、授業スタイルはメリットの多い方法であると考えられたので、来年度も同様の授業内容とする予定である。

2) 災害看護学Ⅰ:2 年次後期

石田千絵、石井美恵子、佐藤潤、牧栄理、手塚久美子

集団災害についての知識を深め、災害医療の概念と展開、災害時の看護の役割を理解し、災害時の社会ニーズに即した看護職の機能について学ぶことと、危機的状況にある多数の負傷者並びに地域全体を対象に、看護を展開できる判断力と看護技術を学ぶことを目標に掲げた。

地域看護学領域の教員は、災害医療・看護の基礎と看護師・保健師の活動を広く担当しつつ、中長期の心身の支援に力を注いだ。本科目より、災害時の手当て法の一つである三角巾を用いた包帯法の演習を始めた。また、HUG（避難所運営ゲーム）を用いた演習を行い、視聴覚教材と身体を使った学習とした。一方、災害看護学のスペシャリストである石井先生は、急性期の災害医療・看護と他国への災害支援を担当し、国内外における急性期の具体的かつ広域的支援の視点を中心に講義を行った。

3） 在宅看護学概論：3 年次前期

石田千絵、佐藤潤、牧栄理、手塚久美子、多江和晃

我が国の社会的背景から在宅看護の必要性を理解し、在宅看護の特徴、看護の継続に必要な基礎的知識、看護技術など対象者（個人・家族）の支援について学び、在宅療養を取り巻く現状の理解ができることを目標に講義を行った。

講義では、在宅看護学の定義から在宅療養者の特徴や対象が本人とその家族であること、顕在的ニーズと潜在的ニーズに対応した訪問看護の特徴等について教授した。また、教科書の他に、多くの視聴覚教材を用いることで、在宅療養者に関するイメージがつけられるように工夫した。さらに、最新の課題について、各自が自分なりの意見をもてるよう支援すると共に、課題解決の自己決定はあくまでも療養者とその家族であることや自己決定支援に必要な情報提供についての学習支援をした。

さらに、訪問看護ステーションの管理者に現場の魅力を話していただいたほか、地域包括支援センターの看護師、社会福祉士らによる認知症サポーター養成講座を実施し、地域包括ケアステムについて、体験的に理解できるよう支援した。

本科目は、統合分野であるため、今後も他領域の学習と連動してシラバスの作成を行っていく必要がある。

4） 在宅看護学実践論：3 年次後期

石田千絵、佐藤潤、牧栄理、手塚久美子、西田壽代、岡部宏生、酒井ひとみ、川口美怜、、今井啓二、仁科恵美子、馬場 タケル、徳永幸介、甲斐望、山田雅子、芳澤松根、藤野智子、伊藤梓

本演習では、①安心安全な在宅ケアの継続と生活の質的向上を目指し、在宅療養環境と療養者・家族のニーズに応じた具体的な在宅ケアの看護実践の方法について学び、②社会情勢を鑑みて、地域特性に応じた地域包括ケアシステムや訪問看護ステーションの運営について学ぶことを目標に演習を展開した。

①在宅酸素療法、人工呼吸療法、ALS 療養者のニーズとコミュニケーション支援、褥瘡予防、フットケア、住居環境の整備のための福祉用具、透析療法、災害時の危機管理における技術を最新の機器や情報と共に提供した。今年度よりノーリフトケアの演習も加えた。

②ケアマネジメント会議のロールプレイ、地域診断のロールプレイを通して、在宅療養者の置かれた環境を広く学び、生活の場で看護支援をすることの意味の理解を深めさせた。さらに、訪問看護ステーションの立ち上げや在宅療養者の看護過程の事例展開を通して、在宅療養

者支援に必要な看護の役割と機能を学び、4 年次に実施する訪問看護ステーション実習や地域包括支援センター実習に学習が繋がるよう支援した。

今後も 4 年次実習への授業効果を考慮し、内容や方法を再検討していきたい。

5) 地域看護学概論:2 年次後期

佐藤潤、石田千絵、牧栄理、手塚久美子

少子超高齢社会を迎えた日本において「病院完結型」医療から「地域完結型」医療への変換が求められている中で、看護職として地域看護学に関するスキルを習得することの重要性を認識し、看護職としての役割を理解することを目的に講義を行った。

講義では、地域看護学の定義から地域を把握する必要性とその方法、地域看護における援助の展開の実際について日本の実情と併せながら説明するよう工夫した。さらに、実際に地域に出て地域診断を行う演習も取り入れた。今後は、看護師に必要な地域看護学についてさらなる授業内容の改善を目指していくことが必要である。

6) 疾病予防看護学:2 年次後期

佐藤潤, 石田千絵, 牧栄理, 手塚久美子

一次予防に焦点を当て、ヘルスプロモーションの概念を理解し、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解することを目的に講義を行った。一連の講義では, ヘルスプロモーションの概念とその歴史を学習し, 各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解させた。また, 疾病予防に関わるヘルスコミュニケーションの展開方法を理解させた。さらに, 補完代替療法に関する講義・演習を取り入れ看護の幅広い知識を習得するよう努めた。

本科目は 2 年次開講科目であるため, 学生の疾患の理解のレディネスに一部問題が見られたため, 次年度は講義内容を一部見直し, 学生の知識に合わせた内容に変更していくことが必要である。

7) 自立支援教育論:2 年次後期

佐藤潤, 石田千絵, 牧栄理, 手塚久美子

慢性疾患や障がいなどの様々な健康課題を抱えた対象に対して, 課題解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論を理解し, 自立支援へとつなげる具体的な手法を理解することを目的に講義を行った。一連の講義では, 健康課題解決に向けたセルフケア能力やセルフマネジメント能力を高める関わり方や自己効力感を高めるための理論を理解し, 自立支援へとつなげる具体的な手法について理解させた。また, 地域住民が自立して生活していくための健康教育を学生自らがテーマを設定し媒体作成および実演を行った。

本科目は講義と演習を組み合わせた形式の科目であるが, 講義と演習のバランスにさらなる工夫をすることと, 制作した健康教育媒体を通して地域住民の自立支援にどのように関わっていけるのかをより明確にしていく工夫が必要である。

8) 地域看護学概論:3 年次後期

佐藤潤、石田千絵、村瀬誠、牧栄理、手塚久美子

少子超高齢社会を迎えた日本において「病院完結型」医療から「地域完結型」医療への変換が求められている中で、看護職として地域看護学に関するスキルを習得することの重要性を認識し、看護職としての役割を理解することを目的に講義を行った。

講義では、地域看護学の定義から地域を把握する必要性とその方法、地域看護における援助の展開の実際について日本の実情と併せながら説明するよう工夫した。さらに、発展的な内容として外部講師を招いて保健医療の国際協力についても教授し、看護職として地域における幅広い役割について興味・関心がもてるようにした。

本科目は講義形式の授業がほとんどなため、次年度は講義が一方的な知識の教授にならないように教員と学生がインタラクティブな授業が展開できるように教育手法に工夫を凝らす予定である。さらに、看護師に必要な地域看護学について情報を再整理し、時代の流れにあった授業内容へとブラッシュアップさせていくことが必要である。

9) 災害看護学・災害看護学Ⅰ:4 年次前期

石田千絵、石井美恵子、秋場研、佐藤潤、牧栄理、手塚久美子、青木太郎、田村早苗、万波大悟、水野英明、二瓶哲彰、仲尾淳一

集団災害についての知識を深め、災害医療の概念と展開、災害時の看護の役割を理解し、災害時の社会ニーズに即した看護職の機能について学ぶことと、危機的状況にある多数の負傷者並びに地域全体を対象に、看護を展開できる判断力と看護技術を学ぶことを目標に掲げた。これらの目標を実現しつつ、より高い視点に導くために、異なる領域の3者で主な担当を分担した。

地域看護学領域の教員は、災害医療・看護の基礎と看護師・保健師の活動等、広く担当しつつ、中長期の心身の支援に力を注いだ。災害看護学のスペシャリストである石井先生は、急性期の災害医療・看護と他国への災害支援を担当し、国内外における急性期の具体的かつ広域的支援の視点を中心に講義を行った。成人・老年看護学領域の秋場先生は、BLS 演習を担当し、BLS 研修の第一人者である青木氏他、多くのボランティアの力を得て、看護職に相応しい救命救急の演習を実施した。

本科目は、来年度まで 2 年次対象の災害看護Ⅰと重複して開講する。

10) ヘルスプロモーション論:4 年次後期

佐藤潤, 石田千絵, 牧栄理, 手塚久美子

ヘルスプロモーションの概念, 基本的理論と方法, ヘルスプロモーションにおける看護の位置づけや看護援助の視点, 期待される役割などを学習することを目的に講義を行った。一連の講義では, 一次予防に焦点を当て, ヘルスプロモーションの概念を理解し, 各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解させた。また, 目黒区の協力の下, 目黒保健所での講義実習を実施した。この講義実習を通して保健所の機能・役割を学び看護職が健康課題を抱えた対象に対してどのようなヘルスプロモーション活動を実践しているのかを理解させた。

本科目は講義が中心の科目になるが, 科目の終盤に見学実習を加える事で, 机上の知識と現場の状況との融合を図ることができていた。ヘルスプロモーションの理念や実践は, 年々変化していくものであるため, 次年度も講義内容を up to date していくことが必要である。

11) 健康教育論:4 年次後期

佐藤潤, 石田千絵, 牧栄理, 手塚久美子

さまざまな健康課題を抱えた対象(個人・家族・グループ)に対して, 課題解決および予防的観点から対象のセルフケア能力・エンパワメントを高める効果的な看護を行うための健康教育の基本的理論と手法を学ぶことを目的に講義を行った。一連の講義では, 慢性疾患や障がい

などの様々な健康課題を抱えた対象に対して，課題解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論を理解し，自立支援へとつなげる具体的な手法について理解させた。また，目黒区の協力の下，目黒保健所での講義実習を実施した。この講義実習を通して保健所の機能・役割を学び看護職が健康課題を抱えた対象に対してどのような健康教育手法を実践しているのかを理解させた。

本科目は講義が中心の科目になるが，科目の終盤に見学実習を加える事で，机上の知識と現場の状況との融合を図ることができていた。次年度は，時代にニーズに即した地域住民の自立支援を促す健康教育に焦点を当てるように内容をブラッシュアップする予定である。

12) 在宅看護学実習:4 年次前期

石田千絵、佐藤潤、牧栄理、手塚久美子、小山珠美、デッケルト博子、松本美緒、立石ひかり、榎本美由貴、早坂玉緒

療養者・家族が安全に安心してその人らしい生活を営むために必要な保健・医療・社会福祉の連携や多職種との協働の実際を学び、地域包括ケアシステムの中の看護の役割と機能を考察することを目的として実習を行った。地域における療養者支援の実際から療養者・家族と療養環境に対する理解を深め、健康・生活上の課題とその看護方法について学ぶことも目指した。

訪問看護ステーションでの 7 日間の実習では、訪問看護師や理学療法士・作業療法士のもとで、療養者・家族の健康・生活上の課題とその支援方法を学び、療養者・家族に対する看護の継続と安全性の確保について学んだ。

地域包括支援センターでの 1 日実習では、地域包括ケアシステムにおける保健・医療・社会福祉のそれぞれの役割と連携を学び、看護の役割と機能を考察した。

担当教員および指導者が実習・カンファレンス等を通じて指導し、学生個々の実習の振り返りと学びの共有化を図ることで、実習施設の特徴や看護師の役割について理解を深めさせた。今後も臨地指導者、学生による評価を鑑みて、効果的な学習環境を整え、具体的な指導に活かしていく予定である。

【その他】

1) 看護職とキャリア形成:4 年次後期

金子あけみ

本科目は、看護専門職として成長するプロセスにおける考え方とキャリア形成に関する。知識を深めること、特定看護師や診療看護師、専門看護師、認定看護師といったより専門性の高い看護職の役割についての理解を深めることを目的としている。最終学年にある学生が自らのキャリアについて真剣に考え、自己のあり方を省察する機会とすることをねらいとしている。講義は、主なキーワーズとして、生涯発達、キャリア発達、リフレクション、形式知・暗黙知、プロフェッショナル等をあげた。これらの概念は抽象的で難解な側面を有するが、看護専門職としての成長には欠かせない概念であることから教材を工夫して解説している。本年度は、診療看護師、専門看護師、認定看護師とキャリア形成に関するテーマのグループ演習を導入し、発表会を行うことで共有学習の機会とした。学生自らが関心をもったテーマを選択したグループ演習であったことから積極的に取り組む姿勢が見られた。次年度も継続したいと考えている。

教育活動 （災害看護学コース）

【看護基盤学領域】

教育方針

看護基盤学領域は，将来看護師となる人として必要な教養，知識のみならず専門にこだわらない広い視野に立った物の見方を学ぶために重要な分野の教育を担当している。同領域に所属する教員の出身学科は看護学科のみならず多岐に及び、その長所を生かして人間の生命を自然科学的，倫理学的，あるいは社会学的等，多面的な側面より論じる能力を有する看護師育成を目指す。さらに社会医学分野の講義や臨床検査学演習等を通じて、スキルミックスやチーム医療の重要性を教授することにも力点を置いている。

1） 自然科学の基礎:1年次前期

小宇田智子、高木晴良

専門基礎分野、専門分野における高度な専門科目を履修するために必須である生物、化学、物理、数学等に関する基礎的な知識を学習することを目的とした。学生によって各内容の理解度に大きな差があるため、基礎的な内容を含むようにし、動画等を利用して理解しやすいように工夫した。また、学生の個別の質問に応じ、全学生が最低限の必要知識を得られるように対応した。次年度も学生間で知識の差があると予想される。そのため、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

2） 臨床検査学演習:2 年次後期

高木晴良、石井美恵子、小宇田智子、鶴巻加奈子、堀田昇吾、伊東丈夫、別所遊子、

佐藤康弘

臨床検査の意義および基本原理を学ぶとともに、解剖生理や病態に関する理解を深める授業とした。組織学的検査、心電図、血液検査、尿検査、放射線検査、染色体検査のそれぞれについて、実験・観察による授業を展開した他、病院の臨床検査部門および放射線検査部門を見学した。組織学的検査に関しては、顕微鏡の専門家を学外から非常勤としてお願いしているため、より教育効果の高いプログラムとなっている。

3） 臨床薬理学演習:2 年次後期

今井秀樹、小川千晶

1 年次で学習した薬理学の知識をもとに治療対象となる患者の状況（年齢、性別、生理的状態など）に応じた薬物動態の知識、作用と薬効について実例をもとに教授した。看護実践における薬物療法の展開方法に役立つ事例を厳選することにつとめた。来年度は内容をアップデートして行う予定である。

4） 医療・看護情報学の基礎： 2 年次前期

高木晴良

情報化社会と言われる現在、身の回りには様々な情報が溢れている。特に医療や看護の世界では一般の人とは異なる性質の情報に囲まれている。そこで、「看護職にとっての「情報」とは何なのか」ということを知り、その「いかし方」と「まもり方」の両方について学ぶ必要がある。この科目では特に「まもり方」を中心に解説した。

「医療・看護情報の特殊性を理解する。」「情報倫理と医療倫理を確認する。」「患者の権利を守るために必要な情報の取り扱いを理解する。」「チーム医療における情報ネットワークを理解

する。」の 4 つを大きな目標として講義を行った。

また、毎回ミニレポートを提出させることで、学生の理解度を確認するとともに、疑問点などについて質問しやすい環境を提供した。なお、質問の回答は個別にメールで行った。

5) 公衆衛生学 3 年次前期:2 年次後期

高木晴良

わが国の保健統計指標の動向や意義、疾病予防、健康の維持増進、健康管理、産業保健、環境衛生に関する事項のほか、食品衛生や感染症の予防など衛生学の基礎知識に関する内容も含んでいる。また、環境と生活者の健康の観点から、環境汚染及び職業性疾患とその対策なども取り上げた。

公衆衛生の理念と目的、集団における健康問題に関する予防医学、社会医学の役割と実際について学修することを目的とし講義を行った。

毎回ミニレポートを提出させることで、学生の理解度を確認するとともに、疑問点などについて質問しやすい環境を提供した。なお、質問の回答は個別にメールで行った。

なお、今年度はカリキュラム変更の関係で、前期(3 年生)と後期(2 年生)に行った。

6) 看護研究の基礎:3 年次前期

高木晴良、石井美恵子、堀田昇吾、

EBNにおける看護研究の意義を理解し、倫理・安全面への配慮も含めた看護研究の進め方について講義した。

看護学における研究意義・研究で用いる用語・研究方法・倫理的配慮について理解するとともに、卒業研究の意義と、論文作成までの一連のプロセスで必要とされる基本的な知識を習得することを目的とした。

後半は、実際のデータを配布し、統計ソフト JMP を使って各自で分析するという演習形式にしたが、2年生で行っている統計の基礎を忘れてしまっている学生が多く、来年度へ課題となった。

7) 英語論文の購読:3 年次前期

高木晴良、石井美恵子、堀田昇吾、

英語論文の構造や医学英語に独特の表現などを理解することで、長文読解能力及び情報収集能力の向上を図るため、グループで英語論文を選択して読解し、その内容を発表するという形式の講義を行った。

「英語論文の構造を理解する」という目標はおおむね達成できたが、目的に沿った英語論文を実際に検索する時間がなかったために、知識・技術として獲得できなかったようである。来年度以降、3 年後期の卒業研究や英語論文のクリティークの際に役立つような基本的技術(英語論文の検索や長文読解力)が習得できるように、講義内容を再検討している。

8) 国際看護学:3 年次前期

石井美恵子、山田英子、山口幸子

進展するグローバリゼーションと健康問題との関連、世界の健康問題の現状や課題を知り、医療保健分野での国際協力のあり方や看護の役割機能について多角的に学ぶことを目的とし、グローバルヘルスやリプロダクティブヘルスの現状や国際協力・国際貢献の実際について学習し、今日的な課題について考える内容の講義内容とした。

教員の実体験をもとにした教材を用いたことで学生の関心が高まり、身近なこととして認知し、

国際看護を考える機会となった。

9) ボランティア論国際看護学　2 年次後期（災害看護学コース、臨床看護学コース）

石井美恵子

ボランティア活動に対する関心が高まり多様なボランティア活動が展開されている現状の中で保健医療の専門職としてボランティア活動に対する理解を深めることを目的として、多様なボランティア活動やボランティア団体等についての講義を行った。講義後に、特に関心をもった団体の活動や理念、アカンタビリティなどについて自ら調査するという主体的な学習方法を導入したことで、よりボランティア活動に関する理解を深めることができた。

【基礎看護学領域】

教育方針

看護とは何かを学び、看護師を目指す意欲が高まることを目指すと共に、災害看護学コースとして災害時に必要となる基本的知識も含めた内容を教授する。本学の育成したい能力でもある「実践能力」を修得するための方略として、講義と演習を通して看護行為の意味づけを各自が考え、知識と技術がリンクできる教育構造を構築すると共に、実習の場を通し、振り返り自ら考え、今後の学習の必要性を理解し、継続的な学習ができる意欲的な学生の育成を教育方針とした。次年度も、「何らかの健康上の問題を持つ人の基本的ニードの充足」を理解できることを看護基礎教育の基盤に置くことは継続していき、学生が看護の視点で患者を観ることの重要性が理解できるように疾患の理解も含め基礎の各科目をリンクさせた思考の構築を目指す。更に、講義・演習で習得した知識と技術を実習の場を通し、自己を振り返り、これからの学習の必要性を理解できる意欲的な学生の育成を目指す。

1) 看護学概論：1年次前期

岩満裕子

看護の基本概念である「人間、健康、環境とは何か」について、ナイチンゲールとヘンダーソンを中心とした理論家の考え方やその理論家の生きた時代背景を含め、看護の変遷が理解できるように講義した。ヘンダーソンに関しては、看護過程展開時に繋がるようにヘンダーソンの視点について教授した。患者理解のための「気づきの目」が看護師には必要であることが理解できるように具体的な事例を基に、看護の喜びが感じられる内容と平常時と災害時の違いも含め講義内容を構築した。「看護とは何か」を考えるに当たり、看護の歴史、日本における健康に関する認識と医療の変化・発展、及び法律を含めた政策の変化など時代の流れの中で、理解することを通して、考えられるよう講義内容を構築した。次年度は、今年度同様に看護師の役割とその重要性、看護師として活動がイメージ化できるように事例等を活用した講義内容としていく。

2) 看護倫理：1年後期

岩満裕子

倫理的問題は、1年生には何が倫理的問題なのかを理解することが困難である為、道徳と法の違いから始め、事例を中心に倫理的問題とは何かが理解できるよう教授した。

看護倫理に関しては、基本である世界医学界宣言と看護師の倫理綱領の内容が理解できるよう読み砕き、倫理観が深められるように実施した。医療倫理に関しては、トム・L・ビーチャムらの記した「生命医学倫理」を活用し教授した。倫理的問題の解決法としては分析ツール（JONSE

Nの窓、4ステップモデル）を用いての実際に事例分析を個人で検討後、グループワークにて分析することで、如何なる視点が必要かという倫理的視点や倫理的問題意識がもてることを狙いとし行った。各自が倫理的問題事例を提示するという事後課題等で思考を深める教育内容とした。次年度は、今年度同様、医療における倫理的課題の事例を多数読み砕くことで理解できるように教授し、災害看護の視点も網羅した倫理教育を実施する。

3）看護実践技術論Ⅰ（日常生活における援助技術と判断）：1年前期

佐藤みほ、岩満裕子、山田英子、栗林好子、加藤知子、田中優希

看護技術の基本的な成り立ちおよび人間の生活過程の特徴の理解に基づき、さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶこと、看護実践において対象の日常生活にかかわるニーズを判断し、科学的根拠に基づく適切な方法で、人間の尊厳や権利の擁護、安全・安楽に配慮しながら援助を実施するための基本的知識・技術・態度を学習することを目的として、授業形態は講義と演習を交えて実施した。演習では、事前に講義の復習とナーシングスキルの視聴、技術の手順の根拠や留意点について自己学習を行い、技術内容をイメージし、演習に臨むよう指導した。演習時に自己学習内容を活かし技術への理解を深められるよう、教員は解説を付けたデモンストレーションを実施した。実技練習では、教員から個別に技術の要点や実施上の留意点の確認、患者への配慮について指導を行った。適宜グループワークを取り入れ、討議や発表をすることで学生相互の学びを深めるように進めた。演習終了後は、各自が根拠・留意点を記載して技術の手順書を作成し、演習を振り返って学びを整理し、講義内容と統合することを目指した。次年度は、今年度同様に実施すると共に、患者体験を看護に活かしていく事を視点に入れた講義・演習内容とする。

4）看護実践技術論Ⅱ（治療・処置における援助技術と判断） 1年後期

山田英子、岩満裕子、佐藤みほ、栗林好子

治療・処置における援助技術は医療現場に必須の看護技術であり、看護専門職としての自律的判断を要し、より高い倫理性と正確性、安全性が求められる。そのため、講義では診療の補助の意義と看護技術を提供するために必要な知識・技術・態度について教授し、演習では講義で得た知識を活用して根拠を明記した手順書を作成してから実践できるような構成とし、演習中もグループワークを取り入れながら、知識と技術が統合できるよう工夫した。技術項目は、無菌操作・排泄障害に対する処置・与薬の技術・注射の技術とその管理を実施した。

次年度は、診療の補助技術を提供するときに、特に患者への配慮の重要性を認識して意図的に実施できることを目指したい。

5）看護実践技術論Ⅲ（看護技術の統合）：1年後期

佐藤みほ、岩満裕子、山田英子、栗林好子

さまざまな状況にある人間の生活過程を整えるために対象の日常生活に関わるニーズを判断し、対象の個別性に応じ、既習の日常生活援助に関する知識や技術を統合・活用して、最善の看護を実践する意義と方法を学ぶことを学習目標とした。

講義では清潔援助に関する基本知識を教授し、演習では種々の清潔援助に関する基本的技術の習得を目指し、指導を行った。さらに事例を用いて、対象のニードを判断し、個別性、安全・安楽、及び倫理的配慮を考慮した看護援助を実施できることを到達点としたグループワークを行った。グループワークを通して、患者の個別性に配慮した援助内容・方法の工夫と援助計画の立案、看護技術の原則の個別性への適用方法について、思考を深化させることができ

た。また援助の実施と評価を記録することで、患者の反応を捉えることや援助を評価することの意義を学び得ていた。加えて本講義の事例演習は、日常生活援助展開実習のレディネス形成にも繋がった。

次年度以降も、日常生活援助の知識と技術を統合する力と、対象の個別性に応じた援助方法の実施とその意義の習得に向け、講義・演習内容について検討していく。

6) ヘルスアセスメント: 1年前期

山田英子、岩満裕子、佐藤みほ、栗林好子、加藤知子、田中優希

対象の健康問題を把握するために必要な基本的看護技術となる観察、コミュニケーションの基本技術、バイタルサイン測定の技術について教授した。また、バイタルサイン測定によって得られた情報は、対象を系統的かつ包括的にとらえ、看護介入を判断する根拠となることを教授した。 バイタルサインから判断する看護援助の演習では冷罨法を実施し、対象とのコミュニケーション技法や効果的な体温調節の援助方法を検討するために解剖・生理の知識を活用するなど、既習の知識を活用しながら、「なぜそれをするのか」という根拠と目的を認識して学習を深められるように指導した。

次年度は、特に血圧測定においては、実習にて使用するアネロイド血圧計によって正確に血圧測定できるよう指導する計画である。形骸的なバイタルサイン測定にならないように根拠と目的を理解し、意図的に実施できるように工夫する。

7) フィジカルアセスメント: 1年後期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子

対象となる患者のどこをどのように見るのか、看護判断する上で最も基本となる看護師として必要なフィジカルアセスメントの知識と技術について、運動系・感覚系・中枢神経系・循環器系をそれぞれ系統別に教授し、具体的な疾患事例として、看護過程で展開した2事例を基に、疾患から予測される症状や今後、起こりうる状況を想定できるよう総合的にどのように視ていくかについて実演を通し教授した。更に、臨床現場ですぐに必要となる知識と技術を中心に講義内容を組み立てると共に、学生がフィジカルアセスメントに興味を持つように人体の反応や誰にでも聞き分けられる聴診及び打診について教授した。肺と心音の聴診については、健康人の聴診は学生間で聞き分けられるよう実施し、疾患を伴った聴診については、モデル人形の肺音と心音を用いて演習を実施した。次年度は、今年度同様に実施するが、系統別での学習では、疾患を持った患者を総合的に観る視点が体得しにくい学生が多いことが実習を通し、判断できたので、次年度は、代表的な疾患別フィジカルも取り入れた教育内容とする。

8) 看護過程と看護方法論: 1年次後期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子

看護の対象となる人々の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法である看護過程について、①概要と意義の理解、②看護過程の展開に必要な基本的知識・技術・態度の習得、③専門的かつ多様な知識・理論を活用する意義の理解、④看護記録の理解、⑤質の高い看護提供の実践に向けた看護過程活用に関する課題の考察を学習目標とした。

科目の大半を占める看護過程の展開に関する各回授業は、それぞれ看護過程の5段階における知識・理論に関する講義と、それら知識・理論を活用した事例展開(個人課題)、その課題に関する見本の提示と解説で構成した。知識・理論の活用に関しては、2年次以降の看護診断を用いた看護過程の展開にもつながるように意識した。また、課題の不足内容や疑問点はそ

の都度解説するとともに、個別指導の機会を設け、学生個々の基本的知識の理解と定着に努めた。さらに、複数種類の患者事例を用いてグループワーク・発表を行い、看護過程展開の知識・技術の定着を図った。今年度はこのグループワーク・発表が有意義になるよう協同学習の手法を取り入れた。

次年度も看護過程に関する基本的知識・理論の習得を図るとともに、看護過程の実践力獲得に向け、講義内容を検討していく。

9) 看護学体験実習:1年次前期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子、加藤知子、三浦由紀子、吉田亜希子、
寺井佳奈江、田中優希、堀田昇吾

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 9 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計16 看護単位に学生を配置し実習を行った。医療施設がどのような機能を保有し、如何なる能力を持った職員が、対象となる患者に何を提供しているのか、病院の機能と形態について実際に見学し、各部門で働く職員の方から直接説明を聞き、病院組織の理解が深まり、病院は医師と看護師等の医療技能職だけではなく、様々な人たちの力で成り立っていることを学ぶ機会とした。更に、病院という環境と患者、看護師の役割、健康とは何かを考えられるように1人の看護師さんと共に行動することを通して学び、学生同士で感じたことを話し合う場を持つことでお互いに理解を共有できるよう実施した。次年度は、更に、実習施設側と目標の共通理解を深める検討の機会を持ち、病院という環境への理解が深まると共に、今後の実習に役立つ知識が持てる実習とする。

10) 日常生活援助展開実習:1年次後期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子、中川陽子、小山珠美、石崎実、三浦由紀子大関春美、吉田亜希子、堀田昇吾、苅田明子、土屋沙織、平野道枝、田中優希(非常勤)、田中悠夏(非常勤)

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 8 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計15 看護単位に学生を配置し実習を行った。日常生活援助の必要性を座学でのペーパー・ペイシェントを用いた学習を基盤に、実際の患者 1 人に学生1人を配置する計画であったが、対象と成る患者が少なかった為、災害医療センターでは、患者1人に学生を2名配置する状況で実施した。自分の受持ち患者には、何が必要な援助であるかアセスメントし、実際に、学内で練習した日常生活援助技術を用いて実施し、自分の判断や提供した技術を振り返り、今後、如何なる学習が自分に必要であるかを考える実習とした。今年度は、実際に患者さんへの援助が全員実施でき、バイタルサインや記録面でも次年度よりは教育効果が見える実習であった。学生は実習を通して技術練習の必要性と疾患やフィジカルアセスメント能力を身に着けることが今後の課題として意識できた実習であった。次年度は実習指導者との連携を密にし、疾患的視点も考慮した援助計画ができるよう学生の教育進度を考慮し過負荷にならない方法で実施する。

11) 看護過程展開実習 2 年次前期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子、加藤知子、田中優希、小山珠美、石崎実、折元美雪、三浦由紀子、堀田省吾、吉田亜希子、寺井佳奈江、土屋沙織、大関春美、
平野道枝、苅田明子

独立行政法人国立病院機構災害医療センターの 9 病棟と村山医療センターの 7 病棟、計

16 看護単位に学生を配置し実習を行った。入院患者を受持ち、看護過程を展開することを通し、看護の対象である人間を統合的に理解し、個別性に応じた看護を実践するための基礎能力を身に着ける目的で実習を行った。病院側の臨床指導体制も整っており、学生にとっての実習体制は整えられた実習であった。今年度は、学生の履修状況と本実習で目標とするレベルの臨床側との共通理解に向けた説明を実習説明会時に強調して事前学習として病棟別の疾患については病棟毎に調べ、実習に臨んだが、昨年同様に、臨床側の学生に求める疾患的知識が高いことによる問題が生じた為、次年度は、学生へのオリエンテーションを活用し、疾患的視点を網羅した報告方法等を指導できるよう検討していく。更に、日常生活援助の実践力を修得できるよう学内の自己学習課題を再検討し、手順を体得させ実習に臨むことを目標とする。

12) 看護理論 :2 年次生後期

岩満裕子、佐藤みほ、山田英子、栗林好子

看護理論とは何か、理論の概念枠組み、構造を理解するとともに、看護実践における理論の活用方法を具体的事例をあげ看護の展開にどの様に理論的視点が盛り込まれているのかを今回、取り上げた理論家ごとに説明することで各理論家の理論が理解できるよう教授した。災害看護の視点から、異文化理解の視点を持つレイニンガーを今年度は追加し 9 名の理論家を中心に教授した。講義終了後のグループワークでは、各グループが「人間」「看護」の概念、学んだ理論家で更に深めたい理論家を選び討議した。最終レポートとして、学んだ 9 名の理論家について、理解したことをまとめる作業を行うことで様々な理論が理解できるよう組み立てた。次年度も同様に実施するが、今年度はグループワークの発表時間が十分確保できなかったので、時間配分と自己学習時間、グループで自主的に集まり検討する時間を再考していく。

【成人・老年看護学領域】

成人・老年看護学は、本学の教育目標でもある将来の医療・保健・福祉を支える専門的な「看護実践能力」育成分野を主に担当している。本学は、超高齢社会に対応した看護展開を主旨とし、成人期という人生で最も長く変化のある期間に引き続き人生の統合期である老年期を併せて編成している。対象理解においては、健康レベルだけでなく、生活・人間的側面に関する知識と思考を基盤として個別性や多様性が理解できる教育を提供したいと考える。演習は臨地実習に連結できるように事例を多く用い健康問題健康障害・看護の視点を追及する。臨地実習では既習学習内容を統合発展させ科学的・理論的な看護実践を追究する。実践力の重要な核となる看護技術は、本学が定める看護技術到達水準に基づき臨床での応用能力に発展できるように教育する。看護専門職として人間に対する尊重の姿勢と自律性・自発性を大切に育成することを目指す。

1) 成人看護学概論:1 年次後期

新実絹代、藤村朗子

人生における成人期の意味、ライフサイクルからみた成人期の発達課題を導入とした。成人期の特徴の理解については、学生の身近な方々にインタビューし、その後グループワークで情報共有や知識と統合させ全体発表会を行い、学生の主体性を重視しつつ成人各期の対象を共通性、個別性、多様性から捉えるようアプローチした。また、成人期にある対象を生活者としての側面から理解するための視点、評価、生活支援のあり方を明確にした。次に健康段階別看護の特性を、健康段階と各期の関連性、看護の概要を教授し健康の保持増進、健康問題に

対する支援につなげた。成人期の健康では、国民健康づくり対策・健康問題を「国民衛生の動向」等を参考に統計データから動向と健康政策への関心が高められるようにした。また、生活習慣、職業、更年期等に関連する健康障害を成人期の代表的健康問題のメカニズムと予防・治療等の概要の理解を深めた。成人看護学に活用する基礎理論を臨床の専門看護師に依頼し学生の身近な場面と臨床場面の事例とを併用し学生と検討しながら進めた。成人各期の健康問題に対する支援の実際をチームアプローチ、ヘルスプロモーションを中心に事例を示し展開した。

2) 慢性期看護論:2 年次前期

新実絹代、藤村朗子、三浦由紀子、大関春美、平野道枝

今年度よりカリキュラム改正となり、慢性期看護、終末期看護の構成となった。各期看護の教育時間が絞られたため、概論的なことを少なくし看護援助の特徴に比重を置き計画した。慢性期看護では、慢性期の定義、慢性疾患の特徴、経過をふまえ、慢性期にある対象を心理・社会的側面、自己概念への影響、家族の特徴等多面的に理解できるようにした。

終末期看護においては、終末期看護の特性、援助者の基本的態度を導入とし、身体的症状と治療、看護は、がん専門看護師を招聘し臨床の最前線の看護実践を教授した。最後に、人生の最期を支える看護師の役割をまとめ、短時間ではあったが事例展開による看護診断を行ない学生が終末期看護実践の具体的なイメージが出来るためには有効であった。今後代表疾患を領域全体で抽出する等新カリキュラムの運用については工夫が必要となる。

3) 成人看護実践論Ⅰ (急性期):3 年前期

藤村朗子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子

急性期看護の基本概念、急性期にある患者・家族の特徴について教授した。学生の理解促進のために範例(学生の経験や知識に適した)を用いて原理や概念に関連付けて講義を行った。後半の講義では、手術療法を受ける成人・家族の把握とその方法ならびに必要な具体的な看護について講義を行った。解剖生理、病態生理、治療を踏まえた個別性のある看護が学修できるよう、事例や臨床場面のエピソード、視覚教材などを取り入れ臨床現場がイメージできるよう講義を展開した。急性期看護に必要な技術として酸素療法・吸引・吸入、創傷管理・ドレーン管理、輸液管理の演習を行った。急性期患者の事例を用いて演習を行った。急性期患者の看護のポイントと共に実習記録様式を用いて、実習記録の記載方法についても教授したことにより、実習の動機づけとレディネスを促進することができた。

4) 成人看護実践論Ⅳ(終末期):3 年次前期

新実絹代、藤村朗子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子

終末期の概念、終末期医療の現状、人間にとっての生と死、終末期看護の特性を導入とし、身体・精神・社会・霊的側面に分け組み立てた。身体症状と治療、看護は、がん専門看護師を招聘し臨床の最前線の看護実践を教授した。死の受容過程をふまえ心理・精神症状の治療と看護、社会的・霊的側面と看護を行った。人生の最終段階においては患者自身の意思決定力が生命や人生の質に大きく影響することから、患者の意思決定を支援する援助を設けた。次にグリーフケア、遺族ケアを中心に患者家族への看護を確認し、臨死期の看護として身体徴候の変化に伴う看取り、エンゼルケア等の臨死後の看護実践を具体的に展開した。最後に、人生の最期を支える看護師の役割についてまとめを行い、終末期患者の 3 事例の看護過程展開をグループワークし発表会を実施した。事例展開は学生の実践力強化に効果的であり、終末

期看護に不安をもつ学生も多い中で臨地実習へのイメージが具体化し導入となった。自己の死生観について修了レポート課題としたが、看護職として死生観をもつ必要性等について良くレポート出来ており教育目標は達成できた。

5) 成人看護の探究:3 年次後期

藤村朗子、福田淑江、折元美雪、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

成人看護におけるあらゆる対象の状況に応じた看護の役割を改革的に考え、看護実践について探究的に学びを創出することを目的に、ナラティブ・プラクティスの手法用いた講義・演習を行った。各自、成人・老年看護学実習科目における 1 事例を抽出し、グループワークでナラティブ・プラクティスを実践することにより、リフレクションすることができていた。また臨地実習の各自の体験を文献などにより考察し、看護実践、看護師の役割について探究することができた。全体発表会を通して、看護観を共有し深めることができた。学生が能動的に学修できる講義の組立てを行ったことにより、学生が主体的に演習に取組むことができていた。カリキュラム改正により、本科目は本年度で終講となる。

6) 老年看護学概論:1 年次後期

新実絹代、福田淑江

高齢者をポジィティブな存在として高齢者の意思を尊重できる幅広い老年観や看護を育成することを重視した。導入として高齢者のイメージを討議した。加齢に伴う高齢者の特徴を身体・心理・社会の 3 側面から理解を深め身体的側面は解剖生理等の既習学習にフィードバックし進めた。高齢者を取り巻く社会保障では、社会情勢や家族形態を踏まえ、介護保険制度を中心に理解を深めた。高齢者の権利擁護について虐待、身体拘束等について検討を行いながら進めた。高齢者の健康のあり方、健康長寿のための健康づくりについて事例を提示し理解を促した。「高齢者が生かし生かされる社会づくり」のテーマでグループワークを行い高齢社会の未来を高齢者の強みから考えることができた。老年看護の役割と理論活用では、コンフォート理論、ストレングスモデルの学習により高齢者が持つ強みに目を向け自立への支援を考える入口とした。高齢者の QOL を高める看護としては、高齢者の QOL を大きく左右するリスクについてのアセスメントと予防的ケアの理解を深めた。今後も高齢者の強みに着目した老年観が看護の実践につながる授業展開を目指していく。

7) 老年期看護論:2 年次前期

福田淑江、折元美雪

平成 28 年度より、老年看護実践論が老年期看護論、老年看護実践論の 2 科目として構成された。教育時間が絞られたため、老年期看護論においては、成人看護学と調整し、老年期に特有な健康障害と症状について精選した。老年期に特有なものとしては地域包括ケアが進められる中、健康段階に応じた高齢者の生活の場の多様性として、介護老人保健施設、介護老人福祉施設に加えグループホームなど地域に繋がるものを加えた。また、今後増加することが危惧される認知症については、専門看護師を講師として招聘し、DVD などによる教材を通して認知症患者看護の実際をイメージしやすく、かつ倫理面側面を考えられる内容とした。高齢者の終末期ケアについては、事前指示を含め終末期における意思決定支援を考えられる講義内容とした。今後、老年期看護論としての教授内容を精選していくことが課題である。

8) 老年看護実践論:2 年次前期

福田淑江、折元美雪、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

平成 28 年度より老年看護実践論は、1 単位 30 時間となった。今年度は演習として高齢者疑似体験を高齢者理解の導入としたが、高齢者理解には効果的であった。また、高齢者に発生リスクの高い褥瘡予防ケア、老年看護学実習Ⅰにつなげるためにレクリエーションの企画を加えた。レクリエーション企画の評価については、老年看護学実習Ⅰの評価結果も含めて評価し、次年度も継続したい。成人・老年学領域で使用する看護過程については、昨年度の評価から授業回数を 10 回に増やした。2 年次生は基礎看護学統合実習でヘンダーソンの枠組みを使用して看護過程を展開した直後であり、ゴードンの枠組みによる看護過程の展開、看護診断の活用に共通性、相違点など多くの意見があった。演習時の教員数は前年度より多くしたことで学生へのフィードバックは円滑にでき、学生の理解につながった。次年度については、3 年次の成人・老年看護実践論のなかの演習との関連で、看護過程の演習内容を検討する。

9) 老年看護学実習Ⅰ:2 年次後期

福田淑江、藤村朗子、折元美雪、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

平成 28 年度は、高齢者センターと介護老人保健施設または介護老人福祉施設で実習を行った。今年度は高齢者の活動性を高めるレクリエーションの企画・実施・評価を、学生全員が実施した。また、高齢者の生活史を理解することを目的としてライフストーリーを聴き取ることを課題とした。

ヘルスケアケアシステムとしての施設の役割・機能、環境、看護・介護にかかわる多職種と看護師の連携と協働について、学生は多くのことを学んだ。また、機能の異なる施設での実習を通じて高齢者の多様性を学んだ。レクリエーション実施の評価としては、施設におけるレクリエーションの意義として、身体および精神機能を活性化させるだけでなく、人とふれあい、生きがいに繋がっていることが理解できた。ライフストーリーを聴き取ることでは、高齢者とのコミュニケーションが深まり、高齢者が生きた時代、価値観など対象の理解が深まった。次年度に向けては、実習での学びをさらに深めるために学内実習の充実を図りたい。

10) 成人看護学実習Ⅰ(急性期): 3 年次後期

藤村朗子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

急性期にある患者およびその家族を多角的に理解し、心身の危機的状況下から生活機能の回復、社会復帰に至るまでの生活過程を整えるために必要な基礎的な看護実践能力を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国立病院機構村山医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の 3 施設で実習を行った。急性期患者の特徴を踏まえ受持ち患者とその家族の置かれている状況や生命危機からの回復に必要な知識、技術を修得できるよう指導を行った。また手術見学を通して、治療によって生じる身体の形態や機能の変化についてや、そのことが患者のライフスタイルとQOLに及ぼす影響についても受持ち患者の看護過程の展開を通して学修できるよう指導した。限られた時間の中で急性期患者の看護問題の優先順位を考慮し、必要な看護実践をすることが困難であったため、次年度は急性期患者の看護がイメージできるよう、患者の状態把握の方法や必要な知識、技術について実践的な講義、演習内容の検討をしていく。

11) 成人看護学実習Ⅱ(慢性期): 3 年次後期

藤村朗子、福田淑江、中川陽子、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

寺井佳奈江

慢性的な健康障害を持ちながら入院して生活する成人およびその家族の特徴を理解し、対

象の健康障害に適応する能力の維持・増進に向けた援助をするための基礎的な看護実践を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国立病院機構村山医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の 3 施設で実習を行った。慢性的な健康障害をもつ患者と家族に生じている身体的・心理社会的な健康問題や強みを総合的に把握し、患者に適した看護が実践できるよう指導を行った。慢性的な健康障害をもつ患者・家族を支援する職種、チームについても臨地でのカンファレンス等で学修することができた。また、在院日数の短縮化により、退院調整の場面を通して、療養の場の特徴を踏まえた患者の生活を調整・再構築する過程を支えるための援助についても学修することができた。今後も、慢性的な健康障害をもつ患者への切れ目のない医療・看護のあり方について教授していく。

12) 成人看護学実習Ⅲ(終末期): 3 年次後期

藤村朗子、折元美雪、三浦由紀子、大関春美、苅田明子、平野道枝

人生の終末を生きる対象を全人的に理解し、対象の置かれた状況に応じた援助の実際を学ぶ。また、対象の苦痛を緩和し、よりよい日常を送るための支援に必要な看護実践能力の基礎を修得することを目的とし、国立病院機構災害医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の 2 施設で実習を行った。終末期にある患者を全人的に理解し、患者の尊厳に配慮した看護が実践できるよう指導した。余命宣告を受けた患者や家族との関わりや臨死期の看護実践の見学を通して、最期までその人らしく生きることを支えるための看護の必要性について考察することができた。カンファレンス等で自己の死生観について言語化し、他者と議論する中で多様な死生観を学修することができた。実習病棟によっては終末期患者の選定に困難を要し、学生 2-3 人で受け持つケースもあった。今年度の実績を基に実習病棟の検討と調整を行う必要がある。

13) 老年看護学実習Ⅱ: 3 年次後期

福田淑江、折元美雪、大関春美

看護の対象として高齢者への畏敬の念と理解を深め、健康障害をもつ高齢者の援助の実際を学ぶ。また、病とともに生きる高齢者を全人的にとらえ、健康回復の促進につながる基礎的な看護実践を学ぶことを目的に、国立病院機構村山医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院で実習を行った。高齢者の加齢による変化を含めてアセスメントし、看護援助においても、環境を整えることにより高齢者の生活機能を高められるような関わりを指導した。また、高齢者の尊厳に配慮した援助について深められるようカンファレンスを活用した。2 週間の実習において、受け持ち患者の変更はなく特に問題は生じなかったが、整形外科、脊髄損傷病棟での実習がほとんどで、対象とする高齢者の健康障害の限られたものとなった。次年度は実習形態が変わるので、今年度の評価を参考に指導方法についても検討する必要がある。

【小児看護学領域】

教育方針

子どもの人権と子どもの特徴、特別なニーズのある子どもと家族への理解と看護を基礎的な能力として備え、次に、現代社会の子どもを取り巻く喫緊の課題である子どもの虐待や発達障害、被災した子どもと家族の理解とケア、重症心身障害児の理解とケアにおいても知識の獲得、実習等で看護実践能力を養う。小児看護の専門性の理解と小児看護の基礎的実践力の獲得、看護過程の演習や実習を通してスキルミックスの展開を考えることができる。

1) 小児看護学概論： 2 年次後期

久保恭子

小児看護学概論では一般的な子どもの成長・発達と適切なケアについて、子どもを取り巻く喫緊の課題である子どもの虐待、小児アレルギー（エピペン使用方法含む）、発達障害について講義と演習を行った。次年度も新しい知見を入れて、同様の講義と演習を実施していく。

2) 小児看護学実践論： 3 年次前期

久保恭子　土屋沙織

小児看護学実践論では、健康障害のある子どもと家族の看護について、科学的根拠に基づいた看護、個別性を理解した看護を講義、プリパレーション等の演習を学習した。28 年度は看護過程の展開に時間を費やしすぎた。次年度は看護過程・プリパレーション・技術演習と一連の流れを作り、より患児と家族の理解とケアを深めるように授業展開を行いたい。

3) 小児看護学実習： 3 年次後期

久保恭子　土屋沙織

小児看護学実習では子どもの人権、スキルミックス、高度な医療技術によって子どもの生命が守られている現実、病児を支える家族の力、在宅看護への移行や法的支援についてなど、多くのことが学習できた。一方で、記録用紙が使いにくく、繰り返しの記述が多いとスタッフからも学生からも指摘され、改良を求められている。次年度はよりシンプルで効果的な記録用紙を作成していく。

【母性看護学領域】

教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子及びその家族への援助理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護学実践論、母性看護学実習から構成している。

1) 母性看護学概論： 2 年次後期

鈴木久美子、山口幸子

本科目では、母性の概念及び母性看護学の意義を理解し、人間の性と生殖（種族保存）の側面から、女性をライフサイクルの視点でとらえ、母性各期における援助法および母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的とした。母性の概念、セクシュアリティ（人間としての性）、リプロダクティブヘルス/ライツ、母性看護の対象となる人の理解、女性のライフサイクル各期の看護、社会の変遷と母性看護の歴史、母子保健統計の動向、母性看護の法整備、母性看護における倫理、母性看護における医療安全、周産期医療におけるチーム医療について教授した。倫理的課題に直面した時の対応についてはグループワークにて、学習を深めた。また、母性看護の役割について、学生が主体的に母性看護に関連したテーマを設定し、グループワークで学習を進め、全体で発表し、それぞれの学びを共有した。次年度にむけては、講義資料や内容について検討し、講義内容の充実を図っていきたい。

2) 母性看護学実践論　3 年次前期

鈴木久美子、山口幸子、関屋伸子、中村直美、高橋美穂子

本科目では、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある母子とその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを実践するうえでの援助

方法を学ぶことを目的とした。授業は、講義と演習で構成し、対象である母子の身体的・生理的・精神的・社会的特徴などの基礎知識を踏まえて、対象のニーズとその援助を理解できるようにした。講義では毎回事前課題を提示し、講義内容が理解できるよう工夫した。演習では、母性看護の基本的看護技術と看護過程の展開で構成し、基礎知識を踏まえて対象のニーズをアセスメントし、看護計画の立案や看護技術が実践できるように計画した。また、学生が母性看護学実習で役立てられるようイメージ化を図り、学習が深められることを期待した。

3) 母性看護学実習： 3 年次通年

鈴木久美子、山口幸子、吉田亜希子

母性看護学実習は、①周産期にある母子およびその家族を対象に、健康を維持・促進するために必要な支援を学習し、リプロダクティブ・ヘルスケアを展開するために基礎的な看護実践能力を身につけること、②関連職種との連携を学び、看護職者としてのチームワークや自己研鑽のあり方を考えること、③親となる過程にある対象に接することで学生自らの母性や父性を育む機会とし、生命の尊厳に対する生命観や看護観を発展させる機会とすることを目的とした。実習は、国立国際医療研究センター病院、国立病院機構甲府病院、国立病院機構西埼玉中央病院において実施した。妊娠期では、産科外来の妊婦健康診査における妊婦計測の実施および、超音波診断法、妊娠各期の保健指導を見学した。分娩期では正常な経過をたどる産婦のケアの一部実施または分娩見学を行った。産褥期・新生児では、正常な経過をたどる母子を受け持ち、看護過程の展開を実施し、母子の健康状態の観察、新生児の沐浴、授乳の一部介助、保健指導の見学等を行った。多職種連携、災害時の対応等についてはカンファレンスを実施し、学生主体でディスカッションを行った。次年度は、看護過程の展開や技術演習の充実を図り、より効果的な実習ができるよう取り組む。

【精神看護学領域】

教育方針

精神障害・知的障害をもつ対象者、身体疾患をもつ対象者の精神・心理面の理解および広くメンタルヘルスについて理解し、知識と技術を統合して看護ケアを提供できるような講義・演習を設定し、災害看護学コースの中の精神看護学領域として、災害時の心のケアについても理解を深められるようなカリキュラムを構成している。さらに、障害者の健康増進、障害者とそれを支える人々の双方の権利擁護について考えられる力を身につけ、講義や実習を通して、ノーマライゼーションを推進する考え方を修得できるようになることをめざしている。単に知識や技術の習得だけにとどまるのではなく、精神・心理的に援助を必要としている対象者や障害者を取り巻く現状や課題について、自らの考えを持ち、主体的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

1) 臨床コミュニケーション論： 2 年次前期

金子眞理子、石崎実

看護を提供する上で重要なコミュニケーションに焦点を当てた科目。コミュニケーションの構成要素や影響する要因などの理解を深め、自己のコミュニケーションを見つめ直し、自己啓発していく重要性を認識すると共に医療者としてのコミュニケーションの方法や技術、態度について学習する事を目的とした。内容としては、日常的な場面の「聴く」・「話す」等の技術について、陥りがちな課題に焦点を当てながら、段階的にアサーションや実際の臨床場面での効果的な

コミュニケーションを体験し、討議を通して自己のコミュニケーションの在り方をふりかえることができる構成とした。また、看護場面での対象との支援関係形成や信頼関係構築を考えることを目的として、プロセスレコードについても教授した。学生が積極的に参加できるように、ロールプレイをとりいれた体験型の授業展開を行った。コミュニケーションが上手くいく事だけにとらわれず、専門的で相手の立場に立った自分らしいコミュニケーションを模索していけるよう授業展開を心がけていきたい。

2) 精神看護学概論： 2 年次後期

金子眞理子、筧亮子、石崎実

こころの働きや精神的健康、障害の概念や障害者の歴史的背景、精神科に特徴的な法律や制度が理解できるように、教科書やオリジナルのスライドを用いながら講義を行い、将来看護師として、精神障害や精神障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。また、ライフサイクルの特徴と課題について理解を深め、各発達段階に応じた人間の理解と支援方法、現代社会に多いメンタルヘルスの問題についてもとりあげ、精神面の理解について討議を通して理解を深められるようにした。

一方的な授業にならないように、授業内で学生が発言できる機会や討議の時間を設けたり、毎回リアクションペーパーを書いてもらう、医療者としてのコミュニケーションに重要だと思われる内容をグループで討議・共有するなど、参加型の講義を心がけ、学生が主体的に講義に参加できた。

3) 精神看護実践論： 3 年次前期

金子眞理子、筧亮子、石崎実

3 年生を対象とした専門分野科目。精神疾患の分類と診断、精神症状の観察と視点や主な精神科疾患の特徴、アセスメント、援助方法について教授した。看護過程の展開ではグループで統合失調症とうつ病の看護過程を行い、発表と討議の時間を設け看護過程の理解を深められるようにした。看護過程の展開の内容が十分でなかった学生には、再度提出をさせて、全員が看護過程について習得できるよう指導を行った。

災害看護コースの中の精神看護学領域として、災害時における精神看護についてもとりあげ、心的外傷後ストレス障害やレジリエンスなど、災害時と関連する内容についても理解を深められるように心がけた。災害時の心のケアについては、リアクションペーパー等でも学生のニーズが高いため、特に災害とここのケアについては次年度もさらに強化していきたい。

4) 障害者看護論： 3 年次後期

金子眞理子、筧亮子、石崎実

3 年生を対象とした専門分野科目。精神・身体・知的の三障害の概念と特性、ノーマライゼーションの考え方について、神経難病や進行性筋ジストロフィー、重症心身障害の看護をとりあげ、障害を持つ対象者と支援方法について理解を深められるようにした。これらの内容については専門性が高い研究者や実践者に講義をしていただき、医療での現状や課題についても考えられるような構成とした。障害者の権利擁護については、障害者と障害者をとりまく環境や政策、制度についても理解を深められるように努めた。精神科や重症心身障害をもつ対象者についても約半数程度は実習で経験をした学生がいる時期での講義であり、知識と実践がつながるような講義の構成を心がけたい。

5) 精神看護学実習　3 年次後期

金子眞理子、筧亮子、石崎実

精神障害をもつ人を包括的に理解し、精神障害をもつ人のセルフケアをアセスメントし、個別性に応じた看護の実践および、患者とのかかわりを通して自己洞察を行い、自己を振り返ることができること、精神医療の実際を知り、保健医療福祉チームにおける看護師の役割について理解することを目標として 3 施設で実習を行った。精神科医療に特徴的な法律を理解したうえで、患者の安全や権利擁護についても実践を通して考え、患者のストレングスにも目を向けながら、セルフケアに基づいた看護展開ができるよう指導を行った。また、患者とのかかわりを通してプロセスレコードを用いた自己洞察を行い臨床指導者からも助言をいただく機会を設けた。患者理解や自己のコミュニケーション、チームの中での援助者としての役割、障害者観や広く精神面で支援を必要とする対象者への看護観など、体験を通して得られる気づきや対象理解を大切にし、これまでの講義や演習と統合できるような実習展開を心がけたい。

【在宅看護学領域】

教育方針

在宅看護学領域は、統合分野である在宅看護学、地域看護学、および看護マネジメントの災害看護学等の科目を担当している。高齢化が進み、地域包括ケアシステムが進められる中で、地域で生活する人々で様々な健康レベルの対象者に対して、地域という生活の場での健康の維持・増進から看取りまでを支援する看護の働きが重要になると考えている。特に在宅看護は、疾病や障がいをもちながら在宅で療養する療養者とその家族が対象であり、療養者とその家族の思いを尊重し住み慣れた場所で、その人らしく生活し続けられるよう支援する役割がある。そのため、多職種と協働し、対象者のセルフケア能力を高めるよう支援していく知識・技術と実践力を身につけて欲しいと考えている。このため、基礎看護学をはじめとする臨床実践看護学などの臨床看護の知識を基礎とし、各領域での学びを統合し、学内での演習や臨地実習を充実させ、実践力を習得できる教育内容を教授したいと考えている。

1) 在宅看護学概論： 3 年次前期

桜井 礼子、中川 陽子、小山 珠美、寺井 佳奈江

在宅看護学概論では、地域で生活する療養者とその家族の療養生活をイメージし、そのケアニーズを理解すること、また、それらを支える制度や社会資源について教授した。在宅で療養する対象者のイメージをもってもらうために、DVD などの映像を活用して、訪問看護のイメージや在宅で療養する方々とその家族のニーズが理解できるよう工夫した。さらに、在宅療養者とその家族の支援のための在宅ケアシステムにおける看護職の役割、および多職種との連携・協働について教授した。さらに、対象者個々が抱える健康問題にそった支援方法や在宅ケアを取り巻く現状と課題について学習を促し、それらの課題を解決するための、社会システムとして、介護保険の仕組みや地域包括支援センターの役割と機能や地域での取り組みなどについて教授した。

次年度に向けては、地域で生活する療養者とその家族に対する訪問看護の必要性について理解を深め、退院支援など、対象者が施設から在宅に移行することをイメージし、各論実習につなげたいと考える。

2) 在宅看護実践論： 3 年次後期

桜井 礼子、中川 陽子、小山 珠美

在宅看護学実践論では、安心で安全な在宅ケアの継続と生活の質的向上を目指し、在宅療養環境と療養者および家族のニーズに応じた、具体的な看護実践の方法を学ぶことを学習目標とし。全体を 3 つのパートに分けて演習をすすめた。1番目は、在宅療養環境と、療養者・家族のニーズに応じた支援のための看護の知識・技術、支援の具体的な方法を、これまで各領域で学んだことを基礎として学習した。2番目は、実在する市をモデルに地域診断を行い、コミュニティの特徴や健康問題、保健医療福祉などの会資源について情報収集とアセスメントを展開する課題に取り組んだ。最後に在宅で生活する療養者とその家族に、訪問看護師としてどのようなケアを行っていくのかを考えられるよう、事例を用いて、在宅看護過程の展開を行い、訪問場面を想定したロールプレイを行った。在宅で 24 時間のケアをどのように構築していくのか、またそれを支える社会システムや多職種との連携や具体的なケア方法を学ぶ機会とした。

次年度は、実践論が 3 年次後期と 4 年次前期に分かれるため、学生の学習状況と 4 年次の在宅看護学実習につなげられる演習内容にしたいと考えている。

3) 地域看護学概論： 3 年次後期

中川　陽子、桜井　礼子

地域で生活する人々の健康と QOL を高めることを主眼とする地域看護学について理解し、地域において展開されている看護活動の全体像と基本的な考え方について学習することを目標に講義を行った。

講義では、地域看護学の基本的な考え方、地域看護活動の基盤となっている制度等、地域看護学の発展過程について教授し、地域において展開されている看護活動の歴史的背景について理解することができるよう資料を工夫した。

また、地域で展開されている看護職の活動について説明し、講義毎にミニレポートを課した。生活習慣病予防をはじめ、地域で生活する人々の健康を支える看護職の役割について学生が自ら考えることを大切にした。

地域看護学の視点を持った看護師として、社会資源の提供や退院支援を含めた看護援助を考えることができるようになることが本科目の目的である。次年度は、地域で展開されている看護活動の実際について、さらに理解を深めることができるよう講義内容を検討していく必要がある。

4) 家族看護学概論　:2 年次後期

桜井　礼子、中川　陽子、小山　珠美

家族看護学は、すべての領域にとって基礎となる内容ととらえ、家族そのもののあり様や家族機能の理解、看護の対象としての家族のアセスメントの視点と方法について教授し、事例を用いた演習を交えて授業を進めた。多様化する家族形態や時代とともに変化する家族の関係性をとらえ、アセスメントの視点を具体的な項目として提示し、家族の全体像が描けるような家族看護過程の演習を展開した。事例を用いた演習とし、特にアセスメント項目については、段階的に情報収集とアセスメントを行い、理解度を確認しながら演習をすすめた。家族の全体像をとらえて家族の問題を明らかにするためには、学生が理解しやすい疾病や健康問題の事例を準備する必要があると考える。

来年度は、家族の基本的な機能や特徴、また家族看護の役割などを具体的な事例を用いながら説明し、家族そのものがもつ力や、家族を社会の単位の 1 つとみて健康問題をもったときのセ家族のルフケア機能など、家族看護の基本的な考え方を徹底して教授したいと考えてい

る。

5) 災害看護学Ⅰ： 2 年次後期

桜井 礼子、中川 陽子、小山 珠美

災害看護学Ⅰでは、 災害時の医療・看護活動の基盤となる法的根拠や災害対策および災害時の救護活動の方法を理解し、刻々と変化する状況下で他職種と連携・協働しながら被災者の状況や特性に応じた看護活動を展開するための基礎的知識・技術・態度について学習することを目標とした。このため、災害の種類と特徴、災害が生活する人々へどのような影響を及ぼすのかを理解し、災害サイクルにそって、発災から急性期、慢性期等の各期における災害への組織的な対応と看護職が支援する内容について学習を進めた。また、トリアージや、救急・応急対応の演習を通して、災害時や緊急時に必要な技術を学習した。さらに、防災・減災の重要性と普段から、個人として、また看護職として備えるべきことなどについて教授した。災害看護学Ⅰでは、災害に対する基本的な知識・技術に関して講義を行った。医療者として、災害にどのように向き合えばよいのかを考える機会になったと考える。

次年度については、災害の経験の有無に限らず、災害をイメージして災害看護の必要性が理解できるよう教育内容をより具体的なものとしていきたいと考える。

6) 疾病予防看護学： 2 年次後期

中川 陽子、桜井 礼子

ヘルスプロモーション及び健康教育の概念、基本的理論と方法について学習し、疾病を予防するための看護職の役割について理解することができるよう講義を行った。

講義では一次予防に焦点を当て、各ライフステージに対応した生活習慣病等の予防・介護予防のための具体的な健康増進方策について理解を深めることができるよう、グループ学習を取り入れた。短時間ではあったが、グループ学習を通して、健康教育の具体的な手法について習得し、看護職が地域住民を対象にした健康教育を行うことの重要性について学習することができるよう工夫した。

次年度は、地域住民が自らの健康課題について考え、生活習慣を改善し、疾病を予防することができるよう支援する看護職の役割について、さらに学びを深めることができるよう授業内容を工夫する必要がある。

7) 地域看護学概論 ：2 年次後期

中川 陽子、桜井 礼子

地域で生活する人々の健康と QOL を高めることを主眼とする地域看護学について理解し、地域において展開されている看護活動の全体像と基本的な考え方について学習することを目標に講義を行った。

講義では、地域看護学の基本的な考え方、地域で展開される看護職の活動の実状について教授し、地域における看護職の役割及び機能について自ら思考を深めることができるよう工夫した。地域看護活動の基盤となっている制度等についても理解を深め、地域看護学の視点を持った看護師として活躍することができるよう、学びを深めていくことが本科目の目的である。

本科目の対象が 2 年生であることから、次年度は地域で生活する多様な健康レベルの人々を看護職が支援する意義について理解することができるように授業内容を整理する必要がある。

8) 自立支援教育論： 2 年次後期

桜井 礼子、中川 陽子、小山 珠美

自立支援教育論では、慢性疾患や障害などのさまざまな健康課題を抱えた対象者に対して、課題解決に向けたセルフケア能力・自己効力感を高めるための理論を理解し、自立支援へとつなげる具体的な手法を学ぶことを学習目標としている。このため、自立支援のための情報提供と行動変容のプロセスを理解し、効果的な健康教育・保健指導の方法について教授した。また、講義の中に、事例や課題を提示して個人ワークを行ったり、保健指導のためのグループワークを取り入れた。すでにセルフマネジメントや自己効力感など、他の科目で既習した内容を復習しつつ、自己の生活体験などを踏まえることで、行動変容の難しさや保健指導を進めるためのコミュニケーションの方法など、具体的な方法についても学習ができたのではと考える。

来年度に向けては、これまでに学習した内容を踏まえて、理論をどのように実践に活かすのか、事例を通してより具体的な支援方法に理解できるような講義にしたいと考えている。

高度看護実践コース

【教育方針】

NP コースのカリキュラムの概要、本コースクリティカル領域のＮＰ教育の考え方、授業科目と学習進度および各科目毎のシラバスをできるだけ詳細に記し、教育計画がどのような考えで、誰がどこまで実施しているかが理解できる資料としてシラバス冊子を作成し、学生および学内教員はもとより実習施設の指導者全員に配布し、コース全体の教育内容を関係者で共有し、折に触れシラバスを確認するよう院生、指導者に促してきた。

本年度は、改正保助看法による特定行為研修に関する指定研修施設に指定されたことから、シラバスには追加の内容等を更に詳細に記し、実習指導要綱と共に学生の学習がスムーズに進むように実施していきたい。また、血管可視化装置、特定行為修得のためのシミュレーターや施設を整備し、可能な教育媒体を活用し、新しい環境の下で高度な判断力・実践力が身につくよう関係者に協力して頂き、充実した内容で教育ができるよう院生をサポートするとともに学ぶ環境の充実をめざす。

今年度も３箇所の実習施設との臨床教授会は年２回ずつ実施し、教育計画に対する意見交換や評価についての検討を行うこととしている。また、修了生が６回生となったことから、NP 教育に積極的に携わるよう関係・連携を密にして修了生自身の教育力がアップ出来るように可能な限り支援していきたい。

１）クリティカル NP 特論

１年次前期

草間朋子・山西文子・岩本郁子・山田巧・前原正明・塚本容子・鈴木美穂

諸外国におけるＮＰの現状を把握し、我が国において高度な実践ができる看護師の現状の問題点および課題を明確にし、役割と活動をどのようにしたら良いのか、クリティカル領域の実践内容などをより深く理解することが必要である。そのため、米国においてＮＰ確立の経緯と変遷、役割拡大の実際、我が国におけるＮＰ教育導入の経緯、教育方法の工夫等について、米国でＮＰの資格を取得し、実践経験のある看護職、医師等の専門家から講義を聴き、文献や資料を下に自分たちのクリティカル領域の役割と活動の実際を検討、資料作成、発表し、クラス全員の知識・認識の統一を図った。クリティカルＮＰを学ぶ上での導入部分について動機づけられた。

２）人体構造機能論

１年次通年

松本純夫、磯部陽、今西宣晶、今井秀樹

人体の構造について臨床に即した知識および検査画像を読み取る能力~~の~~習得を目的として、学生個人のプレゼンテーションとそれに対する医師のコメントからなる授業を行った。また人体解剖を通して肉眼的に人体の構造を観察させた。来年度も同様の内容で行う予定である。

３）クリティカル疾病特論

１年次前期

草間朋子・山西文子・酒井一夫・前島新史・小林佳郎・矢野尊啓・布施淳・安富大祐
樅山幸彦・吉川保・門松賢・磯部陽・浦岡俊夫・大石崇・山根章・小山田吉孝・中村芳樹・
尾藤誠司・尾本健一郎・鈴木亮・石志紘・岩田敏

科学的根拠に基づく医学的な判断と問題解決能力、医療技術の発展に対応できる能力の基礎を身に付けるために、クリティカル領域で頻度の高い疾病について、病態生理、疾病の理解の基礎となる人体の機能や構造に関する基礎的知識を確実に身に付けることとする。そのために患者の生体侵襲について理解しながら、生命維持に直結する呼吸器系・循環器系・中枢神経系・代謝機能・各疾患に生じる問題・感染症等の代表的な疾病の患者に起こっている症状等の問題を臨床推論し、診断を確定していくための医学専門的な思考を統合し、特定の行為を行えるための能力を構築する。導入時には具体的に、グループで主題に関する文献検討をし、指導医から指導を受けながら各自がプレゼンテーションをし、発表後に専門医が指導を行い、知識を確実なものとしてきた。個人学修が不足している学生が出てきているため大学院生としての学修の仕方の確認が必要である。

４）診察・診断学特論

１年次前期

草間朋子・山西文子・酒井一夫・尾藤誠司・大島久二・樅山幸彦・菊野隆明・前島新史・上條敏夫・赤川志のぶ・樋口順也・武山茂

医療における診察、診断の意味を理解し、患者の状況に対応した診察、診断が行えるようにするための知識を得る。診察方法、診察で得られた生理学的な所見を用いて、科学的根拠に基づいた診断を理解する。具体的には、臨床で必要な診察の方法、診断のための検査、いわゆる血液データの解釈、X線、心電図などの読影を実際のデータを使用して理解を深める。具体的には、診療のプロセスと病歴・診察の重要性を学び、医学情報収集の観点から観た面接技術等を学び、臨床検査、画像検査の基本を学んでいる。一人一人の診断時のプロセスが系統的に身につくようクラス全体で取り組みを支えていく。主体的な学修を支えていく。

５）フィジカルアセスメント学演習

１年次前期

山田巧､早坂奈美､小山田吉孝､布施淳､安富大祐､鄭東孝､有野浩司

高度実践看護師がクリティカル領域にある患者の健康問題を解決する上で必要とされ、身体的・包括な機能評価のためフィジカルイグザミネーションについて、グループ学習させ、それを学生がプレゼンテーションおよびインストラクターとなって演習を展開し、ディスカッションンしながら学習する形式をとった。 具体的には視診・聴診・打診・触診など 、フィジ

カルイグザミネーションに共通する診察方法について教授することで、2 年次に行われるOSCE 試験の前提となる系統的なフィジカルイグザミネーション技術の修得に至っている。講義後半は、医師による事例を用いた演習を取り入れており、医学的根拠に基づくフィジカルアセスメントのプロセスや実践的なフィジカルイグザミネーション技術について修得できている。

６）臨床推論

１年次前期

草間朋子・山田巧・尾藤誠司・鄭東孝・山下博・鈴木亮・南修司郎・安富大祐・尾本健一郎・菊野隆明・矢野尊啓・樋山光教・野田徹・込山修・斉藤史郎・有野浩志・吉田哲也

クリティカル領域で遭遇する症状や状態に応じた臨床推論ができるよう、その過程を学び、それを裏付けるためのフィジカルアセスメントを行い、症状に応じた的確な判断・臨床推論ができるための知識・技術を習得することが主である。そのために、初期臨床研修医の研修医長である講師に前提となる考え方を指導頂き、その後クリティカルで遭遇する１７症状に対する臨床推論の実際について、事例を用いて１症状２コマ使用し、専門医からの指導を受け理解を深める展開とした。時間的には最も多い時間をかけ学修するよう臨床教授も積極的に協力している。実習時に繋がるように復習した内容についても指導をして貰っている。

７）診断のための NP 実践演習

草間朋子・山西文子・山田巧・岩本郁子・早坂奈美・樋口順也・菊野隆明・尾本健一郎・鄭東孝・尾藤誠司・安富大祐・鈴木亮・布施淳・有野浩司・早川隆宣・近藤久禎

臨床のクリティカル領域で経験する患者のフィジカルアセスメントができ、特徴的な検査について、安全かつ確実に実践できるための知識・技術を修得する。また、臨床のクリティカル領域で経験する機会の多い特徴的な症状について、科学的根拠となるデータに基づく診察・診断の考え方・診断方法を想起しながら診断するプロセスを実践的に学ぶ。また、クリティカル領域の事例に対して確実な診断技術を身に付けると共に診断に伴うインフォームド・コンセントが行えるための力を身に付けることが重要となる。そのために具体的に超音波検査、ＣＴ、ＭＲＩ、ＰＥＴ等による画像診断の目的、方法、基礎知識、読影の実際について、東京医療センターの放射線部門で、３人から４人のグループを組み、一人が１日計４日間、現場での実際の患者さんを見学しながら診断までの流れを認識し、最後に画像による診断の根拠を専門医から説明を受けて理解を深めている。また、クリティカル領域の主な症状等に付いての特徴的・基礎的症状のある実際の患者の画像を用いて診察・診断の実際を学んでいる。

さらにトリアージの概念と機能、方法を学び、事例を用いてトリアージの実際を学ぶため模擬患者による演習を行っている。これらの後、診断後の患者・家族への支援についてどのような役割を取れるかをグループ学習して纏めている。

今回から手順書をクラスで作成し、臨床実習に資料として持っていることにした。実習のローテーションで出合う指導医師の手順書に関する理解も深まってきつつある。

８）臨床薬理学特論

１年次前期

草間朋子・山田巧・廣田孝司・青山隆夫・大島信治・布施淳・吉川保・磯部陽・石志紘

高度実践看護師として診断に基づく薬物療法を安全に、かつ効果的に進められるよう基本的な知識を修得することが重要であり、そのために、薬物動態の基礎を理解する。さらに、クリティカル領域で遭遇する頻度の高い事例についての薬物療法の必要性を確認し、各種薬物と生体との反応機序、薬物の効果に個人差が生じる要因等について理解し、安全な治療が進められるようにする。という目標で、外部の専門講師による講義、薬事法を含む薬物の安全管理と処方について理解を深め、更に、クリティカル領域における疾病に対して用いられる薬物の理解については、臨床現場の専門医から指導頂いた。非常に難しい範囲であるが、第一段階として動機づけはされたので、今後は各学生の個人学習に係っている。

９）治療のための NP 特論

１年次後期

草間朋子・山西文子・山田巧・金子武彦・吉川保・磯部陽・大石崇・加藤良一・中村芳樹・大迫茂登彦・石志紘・矢野尊啓・尾藤誠司

治療についての考え方を踏まえて、クリティカル領域における治療法の科学的根拠を踏まえた適応や治療法の特徴を理解する。治療継続にかかわる生体へのメリット・デメリットを理解し、治療計画の変更や終了などの判断ができるための知識を修得する。ここでは、特に周術期の管理、具体的にはリスク評価とその予防、輸血、周術期の管理として基本的な手術を学び、広領域の各手術に発展させるという考えの下、消化器系手術、呼吸器系手術、脳の手術、心・大血管系の手術、術後の感染予防などについて臨床の専門医から直接指導を受けて理解を深めてきた。

１０）治療のための NP 実践演習

１年次後期

草間朋子・山西文子・山田巧・岩本郁子・早坂奈美・吉岡早戸・小井土雄一・佐藤康弘・高里良男・正岡博幸・尾本健一郎・磯部陽・宮田知恵子・小山田吉孝・吉川保・菊野隆明・落合博子・浦上秀次郎・加藤良一・大石崇・鄭東孝・安富大祐・鈴木亮・布施淳・有野浩司・松浦友一・斉藤史郎・松村美絵

治療についての考え方を踏まえて、クリティカル領域における治療法の科学的根拠を踏まえた適応や治療法の特徴を理解する。治療継続に関わるからだへのメリット・デメリットを理解し、治療計画の変更や終了などの判断ができるための知識を修得する。また、経験する機会の多い事例への特徴的な治療方法についてエビデンスと患者の意思決定に基づいた治療方法の選択と治療していくプロセスを実践的に学ぶ。治療方法を確実に行えるための技術を修得す

る。また、治療の際の自己の役割・限界を明確にする。

以上のために、救急・重症患者の管理方法、集中治療の管理方法、がん化学療法とペインコントロールの方法、人工呼吸器・気管挿管・抜管・縫合・圧迫止血・経腸栄養・中心静脈ライン確保・褥瘡の治療方法などの処置等に付いての適応、目的、手順、各種ガイドラインの活用、方法及びメリット・デメリット、合併症など、知識、技術、説明・対応などについて、学習のプロセスを踏み、講義、デモンストレーション並びに実施など学内の実習室において演習をしてきた。本科目にかける時間数は特定行為研修との関連で 120 時間を設けており、学生の取り組みも熱心で頼もしい。

また、クリティカル領域で遭遇する疾病に対する薬物療法の実際については事例を設定し、各学生が学習し発表、指導医から指導を受けるという方法で学びを深めてきた。

そして、最後には、総合的なシミュレーショントレーニングをクリティカル領域で頻繁に遭遇する典型的な事例の設定で、各人が役割を果たせるように、総合演習を実施した。

１１）統合演習

2 年次前期

山田巧､山西文子、岩本郁子、早坂奈美､秋場研、菊野隆明、鈴木亮、布施淳、林哲朗、森川日出男、他

ICU および初療室等における診療看護師としての役割について考えることができることをねらいとしている。これまでの看護経験と 1 年間学修してきた医学知識を統合し、急変事例および外傷事例において、リーダーシップ、メンバーシップをとりながらチームパフォーマンスが最大限に機能できる基本的能力を養う内容としている。昨年度までは学外のシミュレーショントレーニングセンターで実施していたが本年度からは学内に新規に設けたシミュレーション室で実施した。学生には外傷初期診療ガイドライン、teamSTEPPS 等について事前学習を課し、初療または ICU における急変事例にスムースに対応できるよう工夫した。シミュレーション後は医師や修了生である診療看護師を交えデブリフィングを実施しており、学生が客観的に自己洞察できる機会を設けた。評価は、チームダイナミクスおよび急変時の対応について評価し、加えて科目目標の到達度に関するレポートで行った。今後控えている OSCE 試験や統合実習の良い動機づけとなった。

１２）統合実習

２年次前期・後期通年

草間朋子・山西文子・山田巧・岩本郁子・早坂奈美・今井秀樹・田中留伊・桜井礼子
福田淑江・児玉菜桜（非常勤）

２年次５月から１１月初めまで約６ヶ月間、国立病院機構東京医療センター、災害医療センター、東京病院の３施設において、救命救急センター、総合内科、外科系病棟、麻酔科の各診療科をローテーションし、計１７週の実習を行った。主治制により患者を受け持ち、一連

のプロセスを経験する中で、臨床教授の医師による指導を受け、１年次から学んできた知識と技術・態度を統合し、チーム医療の一員としてまた、患者を中心に診療看護師としてどのような役割を果たしていけば良いのか、チーム医療のキーパーソンになるのには、どのようにすれば良いのかを討議し、考察して明文化を試みている。また、特定行為の経験も重ね、安全、安楽に、確実に身につくよう積極的に実践してきている。実習の評価も良く、全員無事に修了した。毎月教授会の終了後、実習指導教員の意見交換は実施してきた。実習に対する施設等についても個別に指導してきた。

１３）コンサルテーション・インフォームドコンセント特論

１年次後期

石田千絵、山西文子、尾藤誠司、大島久二、岩田　敏、矢野尊啓

医療におけるインフォームドコンセントのもつ意味を理解し、診察で得られた所見、画像診断やデータ分析に基づく診断内容について、患者の状況に対応して説明できることを目標とした。看護におけるコンサルテーションは、インフォームドコンセントの技術を用いた包括的な援助であることを理解し、患者が納得するプロセスをたどれるよう具体的な実践方法を学べる内容とした。

具体的には、インフォームドコンセントとコンサルテーションの基本理論と概念について学習し、その関連を理解した後、オムニバス方式で臨床医師がクリティカル領域、外来、小児、終末期における現状と課題に関する講義を行った。これらの学習を踏まえたうえで、現役の高度実践看護師がインフォームドコンセントにおける役割の実際を講義し、各自が高度実践看護師の役割を明確にできる内容とした。

１４）チーム医療とスキルミックス

１年次前期

田中留伊、田野将尊、矢野尊啓、小川千晶、眞隆一、福長暖奈、阿部美佐子、千歳はるか

チーム医療におけるスキルミックスの理解を深め、チーム医療のあり方を探りながら、役割分担、協働のあり方を見つめ直し、これからのチーム医療を探求的に学ぶことをねらいとして授業を実施した。講義は各医療職の役割について理解が深まるよう、なるべく多職種の講師から情報提供を頂き、意見交換が図れるように講義内容を工夫した。また、自らが経験したチーム医療の現状と対比しながら思考を深められるようグループワークや全体討議を重視した。これにより、院生は自身の活動を振り返り、今後の新しいチーム医療のあり方、ＮＰや特定看護師に期待される役割等について考え、課題を明確化する機会となった。しかし、院生の気づきや学習の深まり、学習成果を言語化あるいは文章化することに関しては個人差がみられた。授業評価や院生の意見・感想を踏まえ、学習効果の維持・向上が図れるよう授業内容、外部講師の選定等を工夫し授業展開することが課題と考える。

１５）医療安全特論

１年次後期

草間朋子・山西文子・岩渕起江・加藤良一・岩田敏・大石崇・福元大介

医療上の事故等は、日常的に起こる可能性があることを認識し、事故を防止し、患者の安全を最優先することを理解する。特に実践の現場では、医療事故を防止するために、医師の指示を批判的に思考する力、危険を回避するために医療行為の優先度を決定する力、患者に不利益な状況が生じている場合に対象に情報提供出来る力、対象が受ける治療や処置に伴う有効性や危険性について理解できるように説明できる力などを実践的に培えるように配慮した係わりを持ってきた。

具体的な授業展開は日本で実際にあった事例を取り上げ、グループで既存の理論を使用して分析し、主要な原因や要因、解決策まで明確になるよう課題を与え、纏めて発表し、皆で討議を重ねてきた。結果としては、前述した重要な力が課題発表内容、質疑応答の内容、個人のレポート等により確認できた。同時に分析方法の知識獲得、また確実に身につく機会にもなっていた。

１６）政策医療特論

１年次前期

草間朋子・山西文子・松本純夫・武田純三・加我君孝・女屋光基・石原傳幸・大島久二

我が国における過去からの医療提供体制の特徴である歴史的な疾病対策が取られてきた「政策医療」は、民間医療施設には任せられないため、今でも国立として実施している医療である。その一端の現状を医療者として認識していく必要があり、特に公的な役割を果たしている施設管理者により、歴史的経緯と実態までを含めて講義して貰い、看護者として、診療看護師として今後そのような患者さんに出会ったときに対応がスムーズに出来るようになるために、これからの課題と展望を考察する内容であった。

１７）医療倫理特論

１年次前期

宮﨑文子、穴沢小百合、矢野尊啓

大学院は受講対象者の経験年数が高いため、看護基礎教育で看護倫理を学んでいない人が多い。また、講義回数が8コマと少ないため、教授内容を精選して講義を4コマ、その後、事例検討を２コマ、グループワーク及び発表を２コマに配分して実施した。

講義目的は、看護専門職としての倫理の原則、意思決定のための判断基準について学び、院生の経験を踏まえて分析的に思考し、倫理の理念から説き起こし、倫理的葛藤が生じるプロセス、倫理的意思決定のステップなどについて臨床で遭遇しうる倫理的問題を抽出しながら、事例検討をすすめた。グループワークでは価値葛藤が生じる事例における倫理的判断について意見交換し、学習を深めた。事例検討では興味を持って積極的に取り組めており、クラス内での意見交換が活

発になされた。出席率100%。しかし、倫理の問題を掘り下げる視点から考えれば時間不足は歪めない。

１８）ラボラトリー・メソッド特論

１年次前期

小宇田智子、今井秀樹、酒井一夫、別所遊子

ヒトの健康像を理解するうえで必要な医学･生物学の知識を得るための手法を教授した。臨床現場で使われている手法や最新の科学研究で使われている手法を用い、個体、組織、遺伝子および分子レベルでの生命現象について理解させた。来年度も同様の内容で行う予定である。

１９）保健医療福祉システム論

１年次後期

桜井 礼子　佐藤 潤　　日比野 守男

高齢化の進展と制度改革が行われる中、保健医療福祉システムの枠組みを理解し、新たなシステム構築やネットワークの形成、社会資源の活用や創出し、今後の看護実践に活かすために、保健医療福祉に関する制度・法律の基礎知識を３名の教員で教授した。具体的には、疾病と社会との関係、社会保障全体の構造と財政、保健医療福祉の制度、および地域包括ケアシステムとネットワークなどの講義内容であった。また、後半６コマ分を「実践現場における保健医療福祉システムの課題」を演習テーマとし、2～3名のグループ編成で、グループごとに課題を選定し、文献検索やインタビューなどから情報収集しまとめ、プレゼンテーションとディスカッションの時間を設けた。演習は、学生が自らの経験や関心のある領域の課題に取り組むことができており、保健医療福祉制度に関する学びをさらに深める機会となったと考えられる。

２０）看護教育学特論

１年次後期

岩本郁子　石田千絵　山田巧

今年度は初めて開講し、受講者は看護科学コース 4 名であった。自律性が高く社会のニーズに対応できる看護専門職者の育成に対する看護基礎教育、継続教育への期待は大きく、すべての看護実践者はそのキャリア形成過程を通し看護教育において重要な役割を担う。そこで、日本の看護学教育について、教育制度、教育内容・教育方法・教育評価、継続教育等に着目して分析し、考察を深めることを本科目の目的としている。

4 名は臨床経験が豊富で看護基礎教育、継続教育に指導者として関わっており、教育についての関心が高く、さまざまな疑問や課題を持っていた。そのため問題提示し学生同士による意見交換の場を多く設定した。また日頃の教育実践の根拠となる概念や理論を理解したいというニーズが高くそれに対応できるよう説明、文献･資料提示を行った。看護学教育に関する課題についてレポートを課したが、准看護師教育、看護学生の看護実践能力の到達度と継続教育、小児看護学実習に関連した

文献検討、専門職養成におけるカリキュラムの比較と各自の視点から問題提起がされ活発な意見交換が行われた。来年度は受講者の人数とニーズにより早い時期から講義内容、方法について検討、対応したい。

２１）看護管理学特論（共通科目）

１年次後期

新実絹代・山西文子・山田巧・鈴木久美子

変革が進む医療を取り巻く動向の中で看護専門職として組織運営に参画し役割を発揮していくために必要な看護管理に関する基礎理論とスキルを学ぶことをねらいとした。ヘルスケアシステムの現状と看護管理の機能等を導入とし、「組織概論」と「看護組織論」で組織運営の基本や組織人行動の理解を深めた。更に「リーダシップ論」の理解のもと、演習として事例で部署運営におけるリーダシップのあり方を検討した。組織発展に重要な「人材育成」では、目標管理、キャリア開発の理解を深め、「人事管理」では、法的根拠と医療経営の視点からの人的資源活用を確認した。看護管理の基礎知識である「時間管理」「安全管理」「物品管理」等を網羅し学生の経験にフイードバックし進めた。「医療経済と看護活動」では、診療報酬制度と看護、医療・看護サービスの特性と評価について検討した。これまでの学習を統合する演習として、NP コースでは「外来・病棟における NP 活動」、助産コースでは「助産師外来の設置」をテーマとし、BSC で事業計画を立案し発表会を行った。今年度は「経済評価」について追加説明を行った。学生数も多く両コースの特性を共有でき独創性に溢れた内容であった。今後、組織で新たな役割を担うことが期待される学生のマネジメント力向上に役立つものと思われる。

２２）研究特論

１年次前期

今井秀樹、佐藤潤、高木晴良、小宇田智子、関屋伸子、朝澤恭子、田中留伊

看護研究における研究テーマの設定法、データ収集・解析法、倫理上の配慮などについて具体例を示しながら解説した。次年度は教員・内容の構成を若干変更する。

２３）原著論文購読

１年次通年

酒井一夫、田中留伊、石井美恵子、佐藤　潤、小宇田智子、中川陽子

学術論文を読むために必要な基本的知識・技術について講義を行った。その上で、実際に医療・看護に関係した和文・英文論文を読んで内容をまとめる訓練を行った。次年度は、論文の読解能力に加え、読解した内容を発表する点についても重点を置き、研究者としての情報収集・発信を全体的にレベルアップする工夫をしたい。

24)課題研究

酒井一夫　今井秀樹　田中留伊、その他全教員

関連情報の収集に始まり、研究課題の設定、研究計画の立案、実施、結果のとりまとめと発表に至る、研究全般にわたるプロセスを実施した。これらの実施にあたっては、必要に応じ担当教員の助言・指導を得た。発表にあたっては、学会を模した形式で、抄録やスライドの準備を行い、研究者として必要なトレーニングを実施した。次年度は、より一層現実の研究活動に近い状況での実施を工夫したい。

課題研究テーマ一覧(高度実践看護コース)

IVR を受けた患者のフォローのための記録シート（IVR 手帳)の作成　有阪光恵

指導教員名　草間研究科長

男性看護師の育児休業取得に関する実態及び就業継続意思との関連　池田達弥

指導教員名　竹内准教授　田野講師

Rapid Response System (RRS) の課題に関する文献レビュー　小川喜久恵

指導教員名　竹内准教授　田野講師

救急看護師のストレスとコミュニケーション・スキルの関連　川名由美子

指導教員名　竹内准教授　田野講師

看護大学生の死生観に影響を与える要因について～看護基礎教育のカリキュラム・科目に着目して～　木村広大

指導教員名　草間研究科長

閉経モデルラットにおける希少糖 D - プシコースのインスリン抵抗性予防作用

指導教員名　田中准教授　小宇田講師　中村助教　白石佳奈

離島の急性期病院で働く看護師の特定行為に対するニーズに関する研究 -都市部の急性期病院との比較-　小波本直也

指導教員名　山田准教授　金子准教授　松本講師

診療看護師の倫理的感性の特徴　近藤信吾

指導教員名　山田准教授

クリティカル領域における NP 学生が臨地実習で獲得した学習方略　笹島絵理子

指導教員名　岩本准教授　岩渕講師

沖縄の住民における医介輔という存在　-医介輔の診察された住民の体験の語りより-
指導教員名　石田准教授　朝澤准教授　諸喜田睦子

3次救急搬送患者を収容するICUに勤務する看護師の家族看護のケア内容とそれに影響する要因分析　鈴木嵩
指導教員名　山田准教授

NP教育課程修了生の職域確立の現状 -新規就職先の開拓を試みた体験を通して-
指導教員名　田中准教授　小宇田講師　中村助教　関口奈津子

医師-看護師間の協働と看護師のコミュニケーション・スキルとの関連　瀧波典子
指導教員名　岩本准教授　岩渕講師

救急外来トリアージナース（TN)の職場におけるストレス要因　谷口宜子
指導教員名　橋本准教授　日比野客員教授

外来看護師が体験した怒りの過程　中野千春
指導教員名　岩本准教授　岩渕講師

本邦における Rapid Response System 要請症例の分析　永谷創石
指導教員名　今井教授　関屋講師　鶴巻助教

医療訴訟判例から分析する看護師特定行為～法的根拠から医療機器を用いた気道に関連したsafety managementを考える～　福井由香理
指導教員名　田中准教授　小宇田講師　中村助教

診療看護師養成課程の大学院生の臨床推論プロセスとその中で感じる困難さ　本郷葉子
指導教員名　宮崎教授　玄講師　松本講師

整形外科手術を受けた患者の退院に対する心理的反応に影響する要因の検討　和出南
指導教員名　松山教授　佐藤准教授　高橋助教

課題研究テーマ一覧(高度実践助産コース)

生殖年齢の男女における卵子凍結保存の知識および意識の実態　石井茜
　指導教員名　朝澤准教授　石田准教授

看護大学生女子における妊孕性に関する性教育の効果　黒田野明
　指導教員名　宮崎教授　玄講師

保健体育教諭及び助産師・保健師を目指す学生における性感染症に関する認識調査
　指導教員名　宮崎教授　玄講師　古磯優李

看護大学生男女の低用量ピルにおける知識および意識　豊住春佳
　指導教員名　朝澤准教授　石田准教授

育児期にある就労女性の疲労に影響を及ぼす要因　中田優子
　指導教員名　朝澤准教授　石田准教授

妊産褥婦に対する助産師の乳がんに関する支援の実態と教育的ニーズ　廣瀬友美
　指導教員名　松山教授　佐藤准教授　高橋助教

ローリスク産婦における運動経験と分娩アウトカムの関連　伊藤成美
　指導教員名　朝澤准教授　石田准教授

高度実践助産コース

【教育方針】

平成27年度助産コースでは、免許取得プログラムと助産師プログラムのカリキュラムを分離して展開している。学生を対象に、以下に示す科目を、助産システム（助産師外来、院内助産）の中で自律して実践できる助産師を育成することを目標に教授した。

助産コース開設5年目となった。少子時代が進む中、特に分娩介助実習については、新たな実習場（助産所）を開拓して、実践力を強化できる分娩介助数の確保につとめた。また助産師プログラムの学生には夜間開講を実施すると共に、助産院実習の時期をフレシキブルに選択できるよう利便性を図った。

１）助産学概論

１年次前期

宮﨑文子

本講義の目的は、助産師のアイデンティテーを獲得していく動機とする。助産及び助産の基

本概念及び歴史的変遷から概説し、女性を取り巻く社会背景を認識し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢と魅力について系統的に教授した。具体的内容は、助産とは何ぞや？、助産歴史とこれからの課題、助産学を構成する理論、助産師教育制度と課題、リプロダクティブ・ヘルス/ライツと今日的課題、助産師の専門職性と業務（関連法規）、母子保健の動向と課題について講義とディスカッションを織り交ぜながら展開した。出席率100％。来年度も最新情報を取り込みながら興味ある講義を工夫したい。

２）生殖機能学（正常・異常）

１年次前期

山下博、大野暁子、林　茂徳、辻　浩介、滝川　彩

女性生殖器の解剖・生理、性周期とその調節機構、配偶子の形成、受胎メカニズム　妊娠の成立から出産までの生殖生理を助産実践が生理学的根拠をもって行えるよう教授した。また妊婦期については医師の視点から異常を中心に教授した。さらに女性のライフサイクルを通じた性と生殖の健康問題、性と生殖に関する疾患及び異常（婦人科疾患）に関する基礎的な知識を持ってもらうため教授した。婦人科疾患については、月経異常、子宮内膜症、更年期等、外来でよくある婦人科疾患の理解を深める講義内容とした。

講師が臨床での緊急手術等で、時間割通りに講義を行えないことがあり、講義内容の分担の仕方や講義数について講師間での調整が必要である。

３）助産薬理学特論

１年次後期

中島研、八鍬奈穂、伊藤直樹

八鍬講師が薬理学の基礎（作用機序、代謝経路、半減期等）をまず講義した。また妊産褥婦を対象とした和漢薬物の効用、副作用、併用禁忌、拮抗作用、投与方法、服用方法等について特に漢方を含めて解説した。中島講師がさらに妊婦や授乳婦における催奇形性、胎児毒性、授乳中の安全性について薬物使用上の管理および留意点について講義を深めた。伊藤講師は新生児における発達薬理を講義した。

また薬剤情報の収集方法と読み方および薬剤の取り扱い（麻薬・向精神薬など）と、
薬剤の処方／投与と倫理を講義し、薬物治療に際して求められる助産師としての倫理性とは何かについて学修させた。

妊産褥婦に頻用される治療薬の理解に中心をおいてきたが、正常な妊婦や授乳婦が薬局で手軽に購入することができる薬剤やサプリメントの使用方法や注意点等について、講義内容を広げていくことも課題のひとつである。

４）助産栄養学特論

１年次前期

北島　幸枝　　神藤多喜子

健康な妊娠・出産・育児が行える女性の心と身体作りのための食事のあり方について、基礎知識と具体的な栄養管理や食事指導方法の習得、献立の作成（立案）ができることを学習目標とした。北島准教授は、まず、出産適齢期の食生活の現状と問題点を通して、健康な女性の身体作りに必要な栄養管理に関して講義した。さらに、日本人の食事摂取基準 2015年版を基本に、妊婦・授乳婦における必要栄養素量の考え方や食事調査等からの栄養アセスメントと栄養管理方法、乳汁栄養の栄養上の特性と問題点、補完食の進め方等の講義を行った。神藤講師は、女性の体の特徴と女性ホルモンの変化によって起こる心身の変化と食によるアプローチ法を解説し、心身のバランスを整える具体的な献立の作成方法と食事指導を講義した。

次年度の課題は、臨床現場での保健指導を念頭に、症例を通し栄養アセスメントと栄養教育、食事提案が実践できるような講義展開を増やす必要がある。

５）家族社会学特論

１年次前期

宮崎文子、松島紀子

ジェンダーの視点を学ぶことで家族社会学におけるジェンダー分析を理解し，リプロダクティブヘルス・ライツおよび社会や家族の中で生じる暴力など家族問題とその対応について学ぶことを目的とした.

具体的には，家族の様々な諸相を理解するために，家族社会学についての基礎的な概念を踏まえて，現代の家族問題への理解と社会的対応について整理し，共働き家族，児童虐待，ドメスティックバイオレンスなどの現代の家族問題に言及した．そのうえでリプロダクティブヘルス・ライツに影響を及ぼす現代社会の課題やジェンダーに関連し，ジェンダー格差が健康にもたらす影響について学び，家族社会学の視点や人々をエンパワーメントする方策を検討した．特に，DV は周産期に増加する傾向にあるため，DV 緊急対応ができるように工夫した.

６）乳幼児の成長・発達論

１年次後期

中島美津子、玄順烈

乳幼児期にある子どもの成長発達・生活環境・子どもと家族を取り巻く諸理論の探求と実際の援助に向け、講義内容としては、各発達理論および理論家の背景および理論の源泉を理解すること、各発達理論の概要を理解すること、看護における発達理論の適用と課題を考えること、各発達理論の理論分析を行うことを目標としてアクティブラーニングを展開した。フィンク、クラウスとケネル、ドローター、マーガレット・マーラ、ウィニコット、ゲゼル、デュヴァル、ボーエン、ミルトン、エリクソン、ベイトソンなどの諸理論について文献レビューをし、経験症例をこれらの理論を使って分析することで、多角的理解を深めた。さらに時事問題に対してセンシング能力を高めるため、乳幼児に関する出来事、社会保障に関する

テーマを自ら選択し、情報収集・データ化・分析・プレゼンテーションを実施した。学生からは、今後、増加傾向にある発達障害や医療的ケア児までをも包含する学習による今後への示唆が得られたという評価を得ている。次年度もアクティブラーニングの展開を考えている。

7）助産フィジカルアセスメント学演習

1年次前期

橋本美幸、平出美栄子、山田巧、小嶋奈都子、松井哲

周産期の女性の全身の変化が正常範囲なのか異常を予兆するサインなのかを判断する助産診断能力を育成するため、問診、全身のフィジカルイグザミネーションの技術とその得られた情報の解釈について講義と演習を通して教授した。また周産期のみならず、女性のライフサイクルを通した健康を推進し異常を予防するための基礎的なアセスメントができる全身のフィジカルイグザミネーションの技術を教授した。具体的には、呼吸器系、循環器系、消化器系・リンパ系、神経系・運動系、生殖器系のフィジカルイグザミネーションとアセスメントを教授した。さらに今年度から乳房・乳腺のフィジカルイグザミネーションとアセスメントの演習を新たに加えた。これらを妊娠期と産褥期の全身の変化のアセスメントに応用できるよう、まとめた。

次年度には乳房・乳腺の超音波検査の方法、乳腺炎の画像評価の学習を取り入れ、乳房管理に関しての専門性を高める講義を検討する。

8）助産臨床推論

1年次後期

関屋伸子、高橋　純、橋本美幸、平出美栄子，鈴木久美子、宮﨑文子

本科目では、社会に求められる周産期医療連携の在り方に対する見識を深める。講義を通して助産師としての臨床推論能力を修得するとともに、より自律した助産師の育成を図ることを目的とした。助産師としての自律的な判断スキルをもち、個々の対象者に適切な時期に、適切な対応ができるように臨床推論に関する知識・技術等を習得することを目的とし，助産における面接（問診）やフィジカルアセスメントなどを基本的な助産技術を確認した。また、臨床推論の基本的な概念を理解し、医師の臨床診断について、診断や疾病の定義、医療面接、診断仮説からの鑑別診断への絞り込みのプロセスについて課題事例を通して学んだ。さらに、グループ・ディスカッションを行い、助産診断における臨床推論の活用について考察し、正常分娩を取り扱う場合の臨床推論の活用により、分娩経過が異常に移行するリスクを速やかに、かつ、適切に判断し適切な対応に繋ぐ重要性の理解を深めた。次年度は，実際の臨床活動の実践を院生がイメージしやすいように視聴覚教材の工夫を行う。

9）妊娠期診断・技術学

1年次通年

橋本美幸、平出美栄子、小嶋奈都子、山本詩子

妊娠期の心身の生理的変化と妊娠期に起こりやすい異常、胎児の成長発達、妊婦とその家族へのケアと支援について講義した。アセスメント力・助産診断力の養成するため事例を用いて教員１人付 2～3 名の学生の助産過程展開の個人指導を行い、助産学基礎実習後には、実習で受け持った対象の助産過程の展開演習を行った。妊娠期に必要な助産診断技術については、事例を用いてロールプレイング演習を行った。演習の様子をビデオ撮影し、演習終了後、コミュニケーションのあり方についての振り返り・討論を学生間で行った。妊娠期の健康教育については、各自テーマを決めて保健指導計画案を考え、模擬集団指導演習を実施した。実習に向けて学生の技術力の向上を図ることを目的として、今年から妊婦、褥婦・新生児の観察に必要な技術チェックを行った。

次年度への課題は、効果的な積み上げ式の教育実践を行うため、8 月の実習後の授業・演習方法について充実を図ることである。

１０）分娩期診断・技術学

１年次通年

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、高橋純、馬場一憲

分娩・出産の概念や知識、分娩期の助産診断と助産ケアに関する基本的知識および分娩介助技術の修得を目標とし、講義と演習を行った。助産診断に関しては講義後、事例を用いてグループ討論を行った後、個人指導を行い、学びを深められるよう指導した。後期の授業では、助産学基礎実習（前期）で、学生が受け持った産婦の助産過程の展開演習を行った。分娩介助技術では、仰臥位分娩介助のデモンストレーションを、分娩介助手順とその意味づけをしながら行った。技術テストは、助産学基礎実習履修の必須要件とし、前期 7 月と後期 10 月の 2 回に分けて分娩介助技術テストを行った。後期の技術試験では、OSCE 的な要素を一部取り入れ、事例を作成し、ＴＡに妊婦役を演じてもらい分娩介助試験を行った。

次年度は、分娩期の助産診断力と技術力を強化する演習および試験の方法をさらに検討することで、臨床実習に生かせる OSCE を導入した分娩介助試験に施行を試みる。

１１）産褥期診断・技術学

１年次通年

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、宮下美代子、氷見知子、高橋紀子、加藤江里子、松井哲

産褥期女性の身体的・心理的・社会的変化に応じた助産診断とケアを行うための基本的な知識と技術についての講義、演習を行った。産褥期の助産診断の理解を深めるため、事例を提示しグループワーク後に、個人指導を行い学生の助産診断についての学びを深められるように指導した。産褥期では集団指導を想定し各自が１テーマを選択し指導案の作成と発表を行い全員で共有した。各種乳房管理法については、宮下講師の他、オケタニ式乳房管理法、ラクテ

ーションコンサルタント、堤式乳房マッサージ法の３管理法の講義を組み入れ、それぞれの特徴を理解できるようにした。さらに実習で乳房管理の一部を実践できるよう技術練習を行った。また、乳がんについての基本的な知識についての講義を行った。

次年度は、乳房の進行性変化の基本的な知識の講義を充実させていきたい。

１２）新生児期診断・技術学

１年次前期

橋本美幸、加部一彦、藤田恵理子

本科目では、新生児の生理的特徴、胎外生活への適応、成長・発達の助産診断とケアに必要な知識･技術および乳幼児期の発育･発達と保健相談について理解すること目標とした。新生児の生理的適応に関する基本的知識は､加部講師によりテーマごとの講義を7回で実施した。胎児期のwell-beingのアセスメントから出生直後の新生児の生理的変化と適応状態のアセスメントを行い、適切な助産ケアを行うための講義と演習を行った。

新生児の観察と計測技術については、出生直後の新生児の計測方法、出生直後の全身観察の技術演習を行った。来年度も同様に進めていきたい。

１３）助産診断・技術学特論

１年次通年

橋本美幸、関屋伸子、岡田研吉、高橋純、武山茂、小松久人、達野百合子、高橋ゴールドマン浩美、三田

今年度から開講した科目である。医学モデルと助産モデルの両方から応用的な助産診断・助産ケアを可能にする知識と技術の習得を目標として、オムニバスで講義を計画した。

1) 超音波検査の原理と操作方法の基礎、臨床上の意義について講義し、胎児計測の演習を行った。
2) 会陰縫合についての講義と演習を行った。会陰縫合を行う際に必要な解剖、麻酔、縫合の実際についての知識、持針器の使い方、縫合の仕方、糸結びなどの技術演習を、豚肉を用いて行った。
3) 助産実践力発展実習の予備講義としてハイリスク新生児の看護、NICU についての講義を行った。ディベロップメンタルケア、未熟児や、何らかの病気を持って産まれた児と家族へのケア、医療施設と地域を含めた外部施設との連携について講義を受けた。今年は成育医療研究センターの NICU の見学も行った。
4) 緊急時のチーム医療を考えるためのチームステップスの講義と演習を行った。
5) ペリィネイタルロス、倫理的助産ケア・自己決定権についての講義およびディベートなどの討論を行った。
6) イギリスの助産師教育や海外の助産師をサポートする情報源について教授した。
7) 妊産褥婦への漢方についての講義と東洋医学の１つアーユルベーダの講義、これらを応用

した褥婦へのケアの実際について演習を行った。

8）助産師免許取得プログラムでは、新生児蘇生法 A コースを愛育病院で受講し、講義、蘇生の基本手技の演習、ケースシナリオによる演習を行った。助産師プログラムでは、新生児蘇生法 A コースのインストラクター取得に向けたアシスタントとしてコースに参加できるよう調整を図った。

次年度も継続していきたい。

１４）ウイメンズヘルス特論

１年次通年

朝澤恭子、早乙女智子、片岡弥恵子

セクシュアリティ、リプロダクティブ・ヘルス、女性のライフサイクルに沿った健康問題に対する助産ケアに必要な基礎的能力を養い、女性の健康を支援するための研究・実践への理解を深め、ウィメンズヘルスにおける助産ケアを追究することを目標に展開した。思春期、成熟期、更年期に見られる健康問題、受胎調節の実地指導に必要な原理・知識・技術に関して、講義だけではなく、院生のプレゼンテーションとディスカッションの形式で学習を進めた。女性の健康に影響を及ぼす促進要因と阻害要因および助産ケアの理解を深めた。

次年度もプレゼンテーションの形式を継続し、活発なディスカッションができるよう構成する。

１５）ウイメンズヘルス演習

１年次通年

朝澤恭子

思春期、成熟期、更年期、老年期、周産期のいずれか特定のライフステージにおいてヘルスケアニーズをもつ女性への看護実践を通して、対象および助産の特徴を分析し、ケアモデルを検討すること、助産の実践に用いる概念枠組みの明確化、助産のケアモデルの構造化と妥当性の検討を行うことを目標に展開した。各フィールドにおいて、特定のヘルスケアニーズを持つ対象者へ参加観察、インタビューにより、情報を科学的に分析した。「産婦期の父親の心理状態」」「一般女性の助産師業務の認知度」「里帰り出産を経験した母親の体験」「職場におけるマタニティハラスメントの実態」「開業助産師である母親の印象」父親学級検討のための父親のニーズ」「男性の父親役割の認識」「堤式母乳外来受診の理由」「地域母子保健事業に関わる自治体保健師の認識」「性教育の実態とニーズ」といった多様なテーマでプレゼンテーションおよびディスカッションで学びを深めた。

次年度も、月経に関する指導、性感染症予防指導、乳がんアウェアネス指導、性教育、異常経過のある妊婦への母親学級などの対象の健康状況およびニーズに合った助産のケアモデルの検討を課題とする。

１６）不妊症・遺伝看護学特論

１年次前期

朝澤恭子、小澤伸晃

遺伝看護の対象となる家族性腫瘍、先天異常、神経難病などの患者および生殖医療の対象者と家族に対するアセスメントやケアを理解することを前提に展開した。主な遺伝性疾患の遺伝形式、クライエントが抱える課題と必要なケア、遺伝的な課題を持つ人々へのアセスメントの視点、不妊症の検査および治療、クライエントが抱える課題と必要なケアに関して講義を進めた。また、不妊治療を受ける人々へのアセスメントの視点を理解できるよう展開した。

１７）助産管理学特論

１年次前期

宮﨑文子、橋本美幸、筒井志保、中根直子

本講義の目的は、助産師の働く場、つまり病院をはじめとする診療所、助産所等の組織において「経営」という広い枠組みの中で「質の高い助産の提供」と「経営効率」の両立においていかにしたら成果を上げられるかを検討し、助産管理の在り方を考察する。具体的には組織と管理における基本概念とその変遷から概説し、マネージメントの基本的考え方をドラッカー理論から学び、施設助産管理への応用を試みる。また、マーケテング理論、医療経済、関連法規及び周産期医療システム、目標管理、総合病院での助産師外来と院内助産（院内助産システム）の実際、災害と助産師の役割、関係法規等について講義及びディスカッション形式で進めた。院生は経営について興味を示し、出席率100％。来年度もディスカッション形式を多くとりいれていきたい。

１８）地域助産活動論

１年次後期

宮﨑文子、平出美栄子

本講義の目的は、助産師の開業権を生かした助産所の意義を母子及び家族のニーズにそった地域助産活動の拠点と位置付け、その自営業としての実際の助産所経営管理について学び、これらを踏まえた助産所開業計画を立案し、効果的な地域医療連携システムの在り方を検討・考察することである。具体的には、行政施策の動向と助産師、日本の助産所経営の現状と特質、マーケテング理論の応用と戦略、経営管理（特に財務管理―損益分岐点）、損益分岐点の演習、産後ケア事業、助産所助産業務の安全性、医療事故と助産師、助産所経営・運営の実際、「いいお産」の実現のために：フィーリングバース理論、について教授した。特に、近年助産所分娩数の減少が問題視されており、少子時代に助産所が生き残る戦略が今後の課題（高齢妊産婦の助産ケア）であり、来年度もここを中心にディスカッションで内容を深めたい。

１９）地域母子保健学特論

１年次前期

橋本美幸、福島富士子、萩原玲子

地域母子保健の今日的課題について理解できることを目的として、地域で助産師に期待される役割、地域母子保健の活動の実際について産後ケアセンターの活動について講義を行った。地域に住む母児・家族の今日的課題を理解するため地域・地域診断の方法についての講義を新たに行った。各自が考える日本の社会における母子保健の今日的課題の現状とこれを解決するために必要だと思われる方策、助産師が地域で果たすべき役割についての考えについて、討論した。 次年度も同様に行う。

２０）助産学基礎実習

１年次前期・後期

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、田中恵子

国立病院機構東京医療センター、国立病院機構相模原病院で、8 月と 12 月に各 2 週間の実習を行った。本実習では、正常な妊娠・分娩・産褥・新生児期の経過をたどる対象への助産ケア実践を目標とした。7 月に分娩見学を行い、8 月の実習では妊婦健診（経験例数 20 例以上）での問診、全身の診察、子宮底・腹囲の計測、レオポルド触診、児心音聴取等を実施後、臨床助産師の保健指導を見学した。20 例のうち妊娠中期 2 例、後期 2 例について助産過程を展開した。分娩期は臨床指導者の全面的支援の下、分娩第 1 期～4 期の内診を含めた助産ケアを指導者と実践し、分娩介助は見学とした。産褥/新生児期では、1 組の母児を受け持ち、助産計画を立案しケアを実施した。

後期の実習では、分娩介助実習を行った。分娩介助数は 1～4 件/人と実習施設により分娩介助件数に差ができた。次年度の課題として、学生 1 人に 3 件程度の分娩介助が可能な実習環境を整えることが挙げられる。もう 1 点は、前期と後期の実習内容を検討し、分娩期の実習のあり方（分娩見学/分娩介助）について検討する。

２１）助産実践力開発実習

１年次後期

橋本美幸、平出美栄子、関屋伸子、小嶋奈都子、田中恵子

国立成育医療研究センターと医療法人産育会堀病院の 2 施設で実習を行った。本実習では、対象の個別性と継続性をふまえた助産診断・ケアの実践能力を修得することを目標とした。成育医療研究センターでは、無痛分娩クラスの見学を行い、無痛分娩の産婦の分娩介助を行った。学生 1 人つき 2～3 例程度の分娩介助実習行った。分娩期から産褥期まで短期継続事例として、1 母児 1 例を受け持ち、助産ケアおよび保健指導を立案・、実施した。堀病院では学生 1 人につき 6～8 例程度の分娩介助と 4～5 例程度の間接介助の実習を行った。それぞれの施設の特徴を踏まえた対象者への助産ケアを実践し学習することができた。分娩介助例数は、2 週間の補習実習期間を含めて 12～9 例/人であった。来年度も、実習の内容を見直しつつ実習の質の確保に努める。

２２）助産実践力発展実習

２年次前期

橋本美幸、平出美栄子、小嶋奈都子、田中恵子

ハイリスク妊婦とハイリスク児を対象とした実習を、国立病院機構東京医療センターの産科病棟・産婦人科外来2週間、国立成育医療研究センターのNICU3日間，国立病院機構神奈川病院の重症心身障害病棟2日間で、それぞれ実習を行った。東京医療センターではハイリスク妊婦を約10日間受け持ち、妊娠中の管理、治療、リスクについて学んだ。NICUでは、各学生が目標を挙げて実習に臨み、NICUにおける助産師の役割について考察を行った。神奈川病院では障害を持つ子どもの療養と生活・学習支援、障害を持つ子どもとその親が抱える心理的・社会的課題について学べた。ハイリスクな対象を支援する施設内外の専門職の連携・協同についても学びを深めた。実習前に各自の課題を明確にするためのカンファレンスを実施し、実習目標を明確にしたうえで実習を行ったことから、実習における学生の学びが具体的になり、学びが深まった。次年度も実習の質の確保に努め、継続していく。

２３）ＥＢＰM探究論（エビデンスに基づいた助産実践）

１年次通年

片岡弥栄子、朝澤恭子

エビデンスに基づいたケアが実践できるようにEvidence-based Practice in Midwifery の基本的知識を習得することを目標とし、片岡講師が周産期における女性と家族の健康に関する問題を解決するための方法論を、文献クリティークを通して講義した。

具体的には、身近な事例から、周産期女性の問題・疑問を定式化し、最適な文献を探し出し、批判的吟味をPICOを使用しグループワークを通して行った。その上で、実際に各自で関心のある疑問につきエビデンスを探す文献検索を行い、夏休みに文献を講読し「エビデンスを通して女性に優しいケアを考える」と題して、レポートしpresentationを行った。学生は課題に対するエビデンスを探索する作業を行い、文献を探し得ていたが、clinical questionの設定と文献の批判的吟味には課題が残された。文献講読をしクリティークを発表する時期は、課題研究、特別研究の科目に於いても、研究課題や研究方法を検討している時期であるため、研究科目での学修に活かせるよう、講義運用を継続したい。

２４）助産実践力強化演習

２年次前期

橋本美幸、松井哲、産婦人科医師、武山茂、小松久人

成人女性の正常な子宮、卵巣、卵管、膣（以下、骨盤内臓器とする）の超音波画像の評価ができることを目標とした演習を　国立病院機構東京医療センターの産婦人科外来と外科乳腺科で行った。検査技師と乳腺科医師による学内での講義、産婦人科外来では、子宮、卵巣の正常について、経腹、経膣での正常な骨盤内臓器画像の評価、頸管長の測定・評価、産褥期の子宮の

評価について学習した。外科乳腺科では、乳腺の画像評価を学習した。また、医師の症例カンファレンスに参加して疾患と画像評価についての学びを深めた。

ALSO のプロバイダーコースを大学で実施し、産科危機的状況時の対応など周産期救急時の実践力の強化を図った。

次年度の課題として、学生の臨床経験やスキルを把握したうえで、強化演習の内容を検討する必要がある。演習前に学生の強化したい実践力について確認し、これを考慮した演習計画を考えていく必要がある。

２５）地域助産学実習

１年次後期・２年次前期

宮﨑文子、平出美栄子　橋本美幸、関屋伸子、小嶋奈都子

本科目では、助産所において実践されている助産ケアと助産所の経営管理の実際および総合的な地域母子保健システムの理解を目標とした。今年度の実習施設は、1 箇所増やし矢島助産院、目白助産所、ウパウパハウス岡本助産院、とわ助産院、さくらバース、稲田助産院、ビボーン助産所の7助産所であった。助産師プログラムでは、院生が、実習計画・評価を立案し、各助産所スタッフと事前打ち合わせを実施したうえで実習を行った。これにより自己の目標がより明確になった。助産師免許取得プログラムでは、実習目標にもとに自己の実習計画を明確にした。このことから分娩介助は自律した分娩介助の訓練ができ、また 3 例の継続事例を担当し妊娠期から産褥期まで一連の助産過程を展開しながら助産ケアを実践し、女性と児と家族の変化を捉える視点を学び有意義な実習ができた。来年度も同様の実習方法で進めていく。

２６）助産学特別研究

１～２年次通年

宮﨑文子、玄　順烈

1名の助産師プログラムの学生が特別研究に取り組み最終試験（主査及び副査2名による口頭試問）を受けて合格した。1名の研究題名は以下のとおりである。

学生	指導教員	研究テーマ
岡本麻美子	宮﨑文子教授	経膣分娩に至った高年初産婦と 35 歳未満初産婦における妊娠期の血圧推移及び体重変動の比較検討

<u>看護科学コース</u>

【教育方針】

実践の科学である看護学の発展・進化および看護の一層の質の向上のために、教育現場と実践現場との連携と協同を通して、課題解決に的確に対応できる人材の育成を目指す。

特に、看護学を科学的に視点から探求することにより、エビデンスを蓄積し、それらのエビデンスを

看護実践にまで発展させることができる資質を涵養し、社会のニーズ、時代のニーズに的確に対応できる教育研究能力を持った人材を育成する。

＜修士課程＞

１）看護教育学特論Ⅰ

1年次前期

岩本郁子　石田千絵　山田巧

今年度は初めて開講し、受講者は看護科学コース 4 名であった。自律性が高く社会のニーズに対応できる看護専門職者の育成に対する看護基礎教育、継続教育への期待は大きく、すべての看護実践者はそのキャリア形成過程を通し看護教育において重要な役割を担う。そこで、日本の看護学教育について、教育制度、教育内容・教育方法・教育評価、継続教育等に着目して分析し、考察を深めることを本科目の目的としている。

4 名は臨床経験が豊富で看護基礎教育、継続教育に指導者として関わっており、教育についての関心が高く、さまざまな疑問や課題を持っていた。そのため問題提示し学生同士による意見交換の場を多く設定した。また日頃の教育実践の根拠となる概念や理論を理解したいというニーズが高くそれに対応できるよう説明、文献・資料提示を行った。看護学教育に関する課題についてレポートを課したが、准看護師教育、看護学生の看護実践能力の到達度と継続教育、小児看護学実習に関連した文献検討、専門職養成におけるカリキュラムの比較と各自の視点から問題提起がされ活発な意見交換が行われた。来年度は受講者の人数とニーズにより早い時期から講義内容、方法について検討、対応したい。

2)看護教育学特論Ⅱ

1年次後期

岩本郁子　石田千絵　山田巧

今年度初めて開講し、受講者は看護教育学特論Ⅰに引き続き、看護科学コース4名であった。本科目の目的は、看護学教育における教育論・学習論、教育課程開発、教育方法、教育評価に関する基礎的な理論を学習し、看護学教育上の課題に対応したアプローチの方法を考察することであり、それをレポートとし、発表・意見交換を行った。各自のテーマは、大学就学前までの保健体育の教育内容、看護基礎教育における実習指導、新人看護師の教育、病棟における継続教育の一環である勉強会の展開についてあった。研究的方法を用いた質の高いレポート内容であった。また、授業展開の考察の場として高度実践看護コース、高度実践助産コースの受講生が実施する模擬授業に参加し意見交換も行った。異なるコース間の院生同士の意見交換は継続教育に携わっていく両者にとって有意義であった。来年度は、授業内容に応じたゲストを迎え、より多様な視点から看護学教育を検討し関心を高めることができるよう内容・方法の検討を行いたい。

３）看護基盤科学演習Ⅱ

２年次通年

今井秀樹

英語論文抄読を行った。対象とした文献は広く医学的なものを選択させるよう工夫した。さらに修士論文作成過程における進捗状況の発表をさせ、参加者（教員・学生）の間で議論し、さらに論文作成法についても指導した。

４）小児看護学特論Ⅰ

１年次前期

中島美津子、玄順烈

子どもの成長発達および生活環境を理解し、子どもと家族の理解を深めるために諸理論を探求する。さらに、現代の日本社会においてこれらの理論を活用する上での課題を探求することを目的とした。

講義内容は、発達理論としてはフロイト、エリクソン、ピアジェ、ウィニコット、ボウルビィを教授し、さらに子どもと家族をめぐる理論としては、家族理論、セルフケア理論、ソーシャル・サポート理論、コ―ピング理論について教授。学生なりに自分で調べまとめたものを更に深めるという参加型の講義とした。学生からは、一人の患児への看護を展開するにあたり多角的に捉えることの重要性と必要性が学べたという評価を得ている。

５）小児看護学特論Ⅱ

１年次後期

中島美津子、玄順烈

小児看護学特論Ⅰをさらに発展させることを目的とした。

講義内容は、小児看護特論Ⅰで学んだ理論を使い、自分が経験した症例について、同じ事例を様々な理論で多角的に分析し、理論をツールとして実践的に使用する参加・演習型の講義内容とした。一症例について、複数の理論に基づき分析することで、当初見えていなかった解釈に気がつくことができ、今後の実践に活かすことで、さらに質の高い看護に結びつけながら、臨床現場での学生指導にも活かせる学びができたと評価を得た。

６）臨床看護学演習Ⅰ

１年次通年

今井秀樹、酒井一夫、中島美津子、竹内朋子、朝澤恭子、松本和史

具体的には，各講師の講義によって、放射線や治験の概説、医療やケアサービスの現状、セクシャル・マイノリティ、リフレクション、研究論文講読、研究方法等を教授した後、臨床看護学における今日的課題について討論を行い今後の方向性を深めた。

７）放射線保健学特論Ⅰ

１年次通年

酒井一夫、 草間朋子

放射線に関する基礎的事項(線量、影響および放射線防護の考え方)を学び、これらを基礎として構築されている放射線保健学の概要につき講義を行った。また、国際放射線防護委員会（ICRP）の刊行物を題材として、放射線保健の体系について学んだ。

10）放射線保健学特論Ⅱ

１年次通年

酒井一夫、 草間朋子

原子力・放射線事故への対応ならびに汚染地域での放射線リスク・マネジメントについて学んだ。とくに、大規模事故後の汚染地域の住民に対する支援のあり方について、東京電力福島第一原子力発電所事故を例として取り上げ、考察した。次年度は事故後数年間での状況の変化と、これに伴う放射線保健学の立場からの対応のあり方の変化について考え、長期にわたるケアのありかたについて検討したい。

８）応用看護学演習Ⅰ

１年次　後期

今井秀樹、酒井一夫、宮﨑文子、岩渕紀江、玄順烈

医療における放射線の利用に関して看護師の役割を考察した。国際放射線防護委員会（ICRP）が取りまとめ、公表している医療放射線に関する文書 “Radiation and your Patient：A Guide for Medical Practitioners”（「放射線とあなたの患者：医療従事者のための手引き」)を基本題材として選び、医療における放射線利用、放射線利用の便益と害、放射線による障害を減らす方策、放射線診療を受けている患者への接し方など、「放射線」という視点から検討を加え、検討した。受講生の経験も取り上げ、他の職種との情報共有などについても考察を加えた。

９）応用看護学演習Ⅱ

２年次　後期

今井秀樹、酒井一夫、中島美津子、竹内朋子、朝澤恭子、松本和史

臨床の現場で遭遇する、患者の放射線に対する不安感、恐怖感を題材として取り上げ、これの原因を探り、低減策につながる方策につき検討した。放射線に関する懸念や不安が、実際の健康影響に基づくものではなく、心理的なものであることも多いことに鑑み、低線量の放射線の人体影響について取りまとめた「低線量放射線と健康影響」（医療科学社）を参考教材として、必要に応じて参照しつつ、現実の(科学的な)放射線の健康影響、これに基づく放射線規制や防護の考え方について検討した。

１０）保健統計学

１年次通年

高木晴良、佐藤潤

コンピュータ及び統計解析を習得するための基本的な知識を理解すると共に、主としてSPSSを使った統計解析演習（データの整理から多変量解析まで）を行い、基本的な解析手法を理解することを目的として行った。

11）特別研究

１・２次通年

草間朋子

【2 年次】1）看護基盤科学演習Ⅱ、2）応用看護学演習Ⅱ、3）特別研究

平成 28 年度修了生　研究テーマ

学生	指導教員	研究テーマ
苅田　明子	今井　教授	刑事医療過誤における看護職の法的責任 －刑事医療判例からの考察－
日髙　未希恵	今井　教授	都道府県別データを用いた合計特殊出生率の地域差に影響を及ぼす要因の検証

＜博士課程＞

1）放射線保健学

1 年次通年

酒井一夫　草間朋子

放射線の健康影響に関する最新の知見を整理した上で、わが国の医療被ばくの現状や原子力事故に係る問題等を概観し、放射線保健に関する諸課題と、それに対する具体的なアプローチについて学んだ。

また、文献の講読と紹介に加えて「15 分レクチャー」として、与えられたテーマについて情報収集を行うだけでなく、情報発信を行う形式の演習を行った。これらの活動を通じて、研究者としての問題意識を高め、情報発信能力を養うことができた。

２）特別研究

1～3 年次通年

草間朋子

在学者は、1 年次 2 名、2 年次 2 名、3 年次 4 名であった。

本学博士課程修了第 1 期生となった3年次生および研究テーマは次の通りである。

平成 28 年度修了生および研究テーマは次の通り

学生	指導教員	研究テーマ

加藤　江里子	草間　研究科長	自律的な活動に向けた助産師業務の明確化に関する研究
新実　絹代	草間　研究科長	看護基礎教育と新人看護職員研修とを連携させた看護教育のあり方に関する研究－「看護管理学」教育に着目して－
堀田　昇吾	草間　研究科長	放射線による虚血性心疾患の発症機構とそのリスクに関する考察
山田　巧	草間　研究科長	看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育へのプロジェクションマッピング導入に関する研究 －胸部のフィジカルアセスメントに焦点をあてて－

学位審査は、5 名の審査員によって行うこととし、内 2 名を学外の審査員に依頼した。学外の審査員の選考にあたっては、当該該当論文の専門性を最優先し、研究科教授会で決定した。

７．業績

臨床看護学コース

【看護基盤学】

1. 著書(なし)

2. 論文等 (原著, 総説, 短報, 研究報告, 実践報告, 資料)

国島正義、松尾直樹、武田明希子、村尾正樹、今井秀樹. 救急外来におけるトリアージの実態(2016). 日臨救急医会誌, 19, 657-663.

Yukiko Nishihama, Jun Yoshinaga, Ayako Iida, Shoko Konishi, Hideki Imai, Miyuki Yoneyama, Daisuke Nakajima, Hiroaki Shiraichi, (2016). Association between paraben exposure and menstrual cycle in female university students in Japan. *Reproductive Toxicol* 63, 107–113.

鈴木 桂子, 鶴巻 香奈子, 廣田 有霞, 吉原 有佳理 (2016). 幼児前期の子どもと付添い家族への看護演習時に臨床看護師を導入する試み. 日本看護学会論文集ヘルスプロモーション (2188-6458), 46, 216 - 219.

渡邉奈緒美, 柴木智三子, 平澤典子, 堀越悦子, 高橋邦子, 鶴巻香奈子 (2016). 小児外科鼠径ヘルニア手術を受ける子どものプレパレーション導入後の実態調査. 長岡赤十字病院医学雑誌, 29, 5 - 12.

3. 学会における発表

五十嵐恵吏, 鶴巻香奈子, 臨床的脳死状態の思春期の子どもへの関わりによる小児病棟看護師の感情の様相, 日本小児看護学会第 26 回学術集会, 2016 年 7 月 24 日, 大分.

Tomoko Koda, Jun Takanari, Hideki Imai, Effects of Enzyme-Treated Asparagus Extract (ETAS) on stress-loaded cultured keratinocytes, International Congress on Nutrition and Integrative Medicine 2016, 2016 年 8 月 25 日, 札幌.

西浜柚季子、吉永淳、飯田彩花、中島大介、米山美幸、白石寛明、今井秀樹、小西祥子. 女子大学生の血清中抗ミューラー管ホルモン(AMH)濃度とパラベン類曝露との関係. 第 86 回日本衛生学会総会、2016 年 5 月 13 日、旭川.

寺井佳奈江、今井秀樹. A 大学病院における看護師の心身の健康と特徴-健康チェック票 THI を用いた評価-. 第 81 回日本民族衛生学会総会、2016 年 11 月 27 日、東京.

酒井一夫、低線量・低線量率放射線のリスク・防護研究の国際動向－研究プラットフォームを中心に,日本放射線影響学会、2016 年 10 月 26 日、広島.

酒井一夫、ラドン:そのリスクと効能 日本放射線影響学会、2016 年 10 月 26 日、広島.

Kazuo Sakai, Impacts of the Fukushima Daiichi NPP accident on the Non-Human

Biota: Challenges to the Environmental Protection System, Joint IES-ICRP Symposium　Aomori, Japan, October 4, 2016.

4. 研究助成および研究成果報告書

小宇田智子, 酵素処理アスパラガス抽出物（ETAS)の記憶障害抑制に関する研究. アミノアップ化学株式会社受託研究費. 2014 年～

小宇田智子, ポリフェノールの機能性評価に関する研究. アルプス薬品工業株式会社受託研究費. 2015 年 4 月～

5. 社会貢献

今井秀樹

1) 長崎大学医学部非常勤講師
2) 環境省化学物質の内分泌かく乱作用に関する報告の信頼性評価作業班班員
3) 日本衛生学会評議員
4) 筑波大学体育専門学群非常勤講師
5) 日本看護科学会和文誌専任査読員

酒井一夫

1) IAEA の福島第一原子力発電所事故報告書について―放射線影響を中心に、東北放射線科学センター講演会、2016 年 5 月 31 日、仙台
2) 酒井一夫　放射線教育フォーラム　平成 28 年 6 月 12 日、東京
3) 酒井一夫、原子力･放射線災害と看護職の役割、放射線の基礎、放射線の影響、茨城県看護協会　認定看護管理者教育課程研修、平成 28 年 8 月 29 日、水戸
4) 酒井一夫他　ワークショップ －放射線に関する演習 －放射線に関する演習 －　放射線看護学会　平成 28 年 9 月 4 日、東京
5) 酒井一夫　原子力・放射線利用の概要および放射線の基礎、日本アイソトープ協会主催トレーナーズ研修、平成 28 年 10 月 15 日、東京
6) 国際放射線防護委員会（ICRP）　第 5 専門委員会委員（環境の放射線防護)。
7) 内閣府　政策調査員
8) 放射線の影響に関する国連科学委員会日本代表メンバー
9) 財団法人放射線影響研究所　科学諮問委員会委員
10) 日本保健物理学会　低線量・低線量率リスク推定法専門研究会　主査
11) 東京大学　放射線安全学および放射線安全学演習
12) 東京大学大学院工学系研究科原子力専攻
13) 茨城県看護協会　認定看護管理者教育課程講師
14) 日本アイソトープ協会　　文科省委託研究費トレーナーズ研修・講師
15) 東京電力福島第一原子力発電所事故に係る訴訟における国側証人。平成 29 年 1

月 27 日および 2 月 17 日、京都地方裁判所。

小宇田智子

1）厚生労働省委託事業 平成 28 年度「有害性評価原案作成グループ」委員

2）杏林大学医学部衛生学公衆衛生学 共同研究員

鶴巻香奈子

1）長岡赤十字病院「家族関係の調整（基礎）研修」講師

2）NPO 法人子ども虐待防止ネット・新潟 会員

【基礎看護学】

１．著書（なし）

２．論文等（なし）

３．学会における発表

穴沢小百合, 髙橋智子, 松山友子, 海江田育実, 川﨑香織, 佐藤佑香, 淺沼智恵, 木村弘江, 「ラウンド会議」を導入したアクションリサーチー看護管理ラウンドにおける情報収集と問題解決の強化の過程ー. 第 20 回 日本看護管理学会学術集会,2016 年 8 月 20 日, 横浜.

髙橋智子, 穴沢小百合, 松山友子, 佐藤佑香, 海江田育実, 川﨑香織, 木村弘江, 淺沼智恵, 「ラウンド会議」を導入したアクションリサーチー看護管理ラウンドの成果が院内に波及した過程ー. 第 20 回 日本看護管理学会学術集会,2016 年 8 月 20 日,横浜.

穴沢小百合, 髙橋智子, 松山友子, 川﨑香織, 淺沼智恵, 木村弘江, 「ラウンド会議」を導入した看護管理ラウンドに対する看護師長の認識—問題解決の強化を意図したラウンドの評価—. 第 36 回 日本看護科学学会学術集会,2016 年 12 月 11 日,東京.

髙橋智子, 穴沢小百合, 松山友子, 川﨑香織, 木村弘江, 淺沼智恵, 「ラウンド会議」を導入した看護管理ラウンドに対する看護師長の認識—進捗管理の浸透を意図したラウンドの評価—. 第 36 回 日本看護科学学会学術集会,2016 年 12 月 11 日,東京.

石田千絵, 穴沢小百合, 岩本郁子, 朝澤恭子, 竹内朋子, 玄順烈, 田野将尊, 岡村眞喜子, 田吹弘子, 小山陽子, 宮本舞, 今野弘子, 実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価. 第 36 回日本看護科学学会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

４．研究助成および研究成果報告書

穴沢小百合, 松山友子, 髙橋智子, 海江田育実, 佐藤佑香, 川﨑香織, 看護管理ラウンドの実践モデル作成に向けた基礎的研究. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助

成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究（C). 2014 年~2016 年

５．社会貢献

髙橋智子　第 30 回 日本看護歴史学会学術集会 企画委員（2016 年 7 月～2017 年 8 月）

６．その他

松山友子(2016). 「改訂版 今日の看護指針」刊行記念 臨床実践能力をどう身につけるか 「看護技術の現代における指標」の基本的な考え方と活用への示唆―教育の場での活用に向けて―, 看護実践の科学,41(6),16-21, 看護の科学社, 東京.

穴沢小百合(2016). 「改訂版 今日の看護指針」刊行記念 臨床実践能力をどう身につけるか 教育現場での活用の実際, 看護実践の科学, 41(6), 22-27, 看護の科学社, 東京.

穴沢小百合(2016). フィジカルアセスメント実践講座 フィジカルアセスメントのココがポイント！, Clinical Study, 37(8), 14-17, メヂカルフレンド社, 東京.

【成人・老年看護学】

1. 著書（翻訳書を含む）

秋場研（2016）.第６章：心肺蘇生法の代替手技と補助的器具.池上敬一・加塩伸行・後藤拓也・編. AHA 心肺蘇生と救急心血管治療のためのガイドラインアップデート 2015. 128-132, American Heart Association, 東京.

秋場研（2016）.第 14 章：教育. 池上敬一・加塩伸行編. AHA 心肺蘇生と救急心血管治療のためのガイドラインアップデート 2015. 262-268, American Heart Association, 東京.

秋場研（2016）.第 15 章：ファーストエイド. 池上敬一・加塩伸行・河波弘昇・山寺圭編. AHA 心肺蘇生と救急心血管治療のためのガイドラインアップデート 2015. 262-268, American Heart Association, 東京.

2. 論文等（原著, 総説, 短報, 研究報告, 実践報告, 資料）

竹内朋子, 大久保清子, 真田弘美（2016）. 単身看護師のワーク・ライフ・バランスの現状および労働条件との関連. 日本医療マネジメント学会誌, 17（2）, 83-87.

竹内朋子（2016）. 看護基礎教育における「看取り」の教育. 保健の科学, 58(7), 460-465.

佐々信子, 竹内朋子, 佐々木美奈子(2016). 中堅看護師の職務満足感と臨床実践力及び他者からの承認との関連性. 東京医療保健大学紀要, 11(1), 25-31.

戸ヶ里泰典 , 米倉佑貴 , 中山和弘 , 横山由香里 , 竹内朋子 , 山崎喜比古 (2016). Sense of Coherenceと心理社会的地域生活環境の認知との関係性に関する日英比較. 日本健康教育学会誌 , 24, 62.

田中純子, 松本和史, 水澤久恵, 伊藤美香, 小林登喜代, 込山恵子, 中西美千代, 出貝裕子,

後藤百万(2016). 経腟分娩後の褥婦における助産師による排尿アセスメントの有用性 携帯型 3 次元超音波断層装置(BVI6100)による妥当性の検討. 日本排尿機能学会誌, 25(2), 298-303.

日髙未希恵 (2016). その人が望む生き方を全うするために必要な「life 生命と人生」. コミュニティケア臨時増刊号, 18(13), 66-74.

3. 学会における発表

印銀里絵子, 田野將尊, 竹内朋子. がん化学療法に携わる看護師の専門的自律性に関わる要素. 第 31 回日本がん看護学会学術集会, 2017 年 2 月 4 日, 高知.

石田千絵, 穴沢小百合, 岩本郁子, 朝澤恭子, 竹内朋子, 玄順烈, 田野將尊, 岡村眞喜子, 田吹弘子, 小山陽子, 宮本舞, 今野弘子. 実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価. 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

菱沼加寿子, 小村三千代, 伊藤桂子, 松本和史. 近親者が自殺した家族の状況と支援のありかた 救急外来勤務の看護師の語りから, 第 23 回日本家族看護学会学術集会, 2016 年 8 月 27-28 日, 山形.

岩渕起江, 只浦寛子, 真島知美, 正座姿勢における足背部の体圧分散, 第 18 回日本褥瘡学会学術集会, 2016 年 9 月 3 日, 横浜市.

只浦寛子, 岩渕起江, 真島知美, キネステティクによる動きのパターン―臥位・水平移動の動作解析―, 第 18 回日本褥瘡学会学術集会, 2016 年 9 月 3 日, 横浜市.

日髙未希恵, 今井秀樹, 関屋伸子, 鶴巻香奈子. 都道府県別データを用いた合計特殊出生率の地域差に影響を及ぼす要因の検証. 第 87 回 日本衛生学会学術総会, 2016 年, 3 月 28 日, 宮崎.

庄司満明・井上智子, 救急看護師が経験する惨事ストレスに関する研究. 第 13 回日本クリティアルケア看護学会, 2016 年 6 月 10 日, 宇都宮.

坂本陽, 清野歩弥, 大澤栞, 平井智佳, 比留間陽子, 秋場研, 岩渕起江, 竹内朋子. A 大学看護学生における自尊感情とバーンアウトの関連, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

佐藤佑香, 保谷知美, 青木理和子, 佐藤麻衣, 泉水静紀, 高橋幸, 東久世愛, 中村孔美, 松本和史, 竹内朋子. 長時間の仰臥位による精神的ストレスと身体的ストレスの変化, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

4. 研究助成および研究成果報告書

竹内朋子. 看護師のワーク・ライフ・バランス(WLB)に関する調査研究. 日本学術振興会科学研究費補助金. 若手研究(B). 2015 年度-2017 年度.

戸ケ里泰典, 竹内朋子, 山崎喜比古, 中山和弘, 米倉佑貴 , 横山由香里. 全国代表サンプル

によるストレス対処力SOCを規定する社会的要因に関する実証研究. 日本学術振興会科学研究費補助金. 基盤研究(B). 2013 年度-2016 年度.

長村文孝, 山下直秀, 神里彩子, 各務茂夫, 渡邉俊樹, 加藤直也, 松本和史. 先端医療開発を担う人材養成のための標準化教育プログラムの策定と実践. 独立行政法人日本医療研究開発機構(AMED)医療技術実用化総合研究事業(臨床研究・治験推進研究事業). 2015 年度-2016 年度.

5. 社会貢献

竹内朋子

1) 日本看護科学学会 表彰論文選考委員会委員

2) 東京都看護協会 看護学生ワーキンググループメンバー

3) 卒業研究指導, 放送大学. 2016 年 4 月-2017 年 3 月

4) 看護研究発表会講評, 東芝病院. 2016 年 6 月 4 日

松本和史

1) 東京大学大学院医学系研究科医学集中実習 IX トランスレーショナルリサーチ看護学入門, TR における看護学, 東京大学医科学研究所附属病院, 2016 年 7 月 12 日

2) 看護研究指導, 東京医療センター看護部, 2016 年 5 月 20 日, 6 月 3 日, 7 月 11 日, 9 月 28 日, 10 月 26 日, 11 月 25 日, 12 月 16 日, 2017 年 1 月 13 日, 2 月 14 日

3) 日本看護科学学会和文誌統計担当専任査読委員

4) 第 20 回日本看護管理学会実行委員

岩渕起江

1) 高齢者施設体験学習, 明治薬科大学, 2016 年 7 月 30 日

2) 成人看護学急性期, 横浜医療センター附属横浜看護学校, 2016 年 4 月-2016 年 7 月

3) 国家試験対策特別講義, 横浜医療センター附属横浜看護学校, 2017 年 1 月

秋場研

1) 日本医療教授システム学会 教育・トレーニング委員会委員. 2016 年 4 月-2017 年 3 月

2) AHA ECC International BLS Project Team メンバー. 2016

3) 講演 救命処置研修の企画・運営のノウハウと実際. NPO 法人救急医療の質向上協議会. 2016 年 4 月 23 日

4) 院内 BLS 研修.ライフタウン歯科クリニック. 2016 年 5 月 22 日

5) 看護師急変対応研修(AHA PEARS プロバイダーコース).日本医療教授システム学会. 2016 年 5 月 28 日

6) 院内 BLS 研修. ライフタウン歯科クリニック. 2016 年 7 月 30 日

7) 看護師急変対応研修(AHA PEARS プロバイダーコース).日本医療教授システム学会. 2016 年 9 月 10 日

8) 一次救命処置(BLS)研修指導.山形県立総合療育訓練センター. 2016 年 6 月 18 日

9）二次救命処置研修（ACLS プロバイダーコース）. 聖路加国際大学 Luke's Life Support. 2016 年 7 月 23 日

10）エピペン・小児 BLS 研修.文庫幼稚園. 2016 年 8 月 26 日

11）親子で学ぶ救命教室.かいじゅうの森ようちえん.2017 年 1 月 21 日

12）保護者向け小児・乳児の救急蘇生法.文庫幼稚園. 2017 年 3 月 6 日

13）JSISH 教育・トレーニングサイトを立ち上げよう（AHA-ECC 編）.日本医療教授システム学会. 2017 年 3 月 4 日

日髙未希恵

1） 生活を支える看護師の会　運営メンバー.　2016 年 2 月 - 2017 年 3 月

【母性看護学・助産学】

1. 著書（なし）

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

朝澤恭子, 加藤慶洋, 田島真実 (2016). 一般市民を対象としたアロマトリートメントの実践報告. 看護展望.41(8). 80-85.

3. 学会における発表

朝澤恭子. ART 診療実践講座　カップルのパートナーシップ支援. 第 61 回日本生殖医学会学術講演会. 2016 年 11 月 3 日. 横浜

森明子. 星るり子. 湯村寧. 朝澤恭子. 男性不妊症クライエントの看護に対する不妊症看護認定看護師の意識と実践. 第 61 回日本生殖医学会学術講演会. 2016 年 11 月 3 日. 横浜

朝澤恭子. 森明子. 星るり子. 湯村寧. 不妊症看護認定看護師がとらえた男性不妊症クライエントとパートナーの訴え・悩み. 第 14 回日本生殖看護学会学術集会. 2016 年 9 月 11 日. 仙台

朝澤恭子. 加藤慶洋. 山口敦子. 井ノ上朝子. 産褥早期の母親に対するアロマトリートメントの実施と評価. 第 36 回日本看護科学学会学術集. 2016 年 12 月 10 日. 東京

川畑佳奈. 宮崎文子. 真下綾子. 関屋伸子. 朝澤恭子. 加藤江里子. NICU の看護職による母乳育児支援の実態調査「NICU に入院した新生児のための母乳育児支援ガイドライン」の視点から. 第 16 回日本母子看護学会学術集会. 2016 年 7 月 9 日-10 日.幕張

Asazawa K, Kato Y. Aromatherapy Treatments during the Early Puerperal period in Japan: A Pilot Study. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, dated 9 March 2017. Hong Kong.

伊藤成美 朝澤恭子 星野雄子. ローリスク産婦における運動経験と分娩アウトカムの関連. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 18 日. 徳島.

石井 茜 朝澤恭子. 生殖年齢の男女における卵子凍結保存の知識および意識の実態. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 19 日. 徳島.

石田千絵. 穴沢小百合. 岩本郁子. 朝澤恭子. 竹内朋子. 玄順烈. 田野將尊. 岡村眞喜子. 田吹弘子. 小山陽子. 宮本舞. 今野弘子. 実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価. 第 36 回日本看護科学学会学術集会. 2016 年 12 月 10 日. 東京

岡本麻美子 宮﨑文子 朝澤恭子. 経膣分娩に至った高年初産婦と 35 歳未満初産婦における妊娠期の血圧推移及び体重変動の比較検討. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 18 日. 徳島.

加藤江里子・宮﨑文子, 助産師の業務範囲を検討する, 第 57 回日本母性衛生学会学術集会, 2016 年 10 月 15 日, 東京.

川崎竹哉. 石田千絵. 朝澤恭子. 危機回避のための電話連絡における看護師の思考・判断の実態－チーム医療における医師との連携に着目して－第 36 回日本看護科学学会学術集会. 2016 年 12 月 10 日. 東京

清水悠加・菊地真悠子・河野志保・小嶋美南・田島美央・谷口晏理・奈良麻衣子・藤田麻央・松田優子・加藤章子・橋本美幸, 大学生の母親の更年期症状と親離れ・子離れに関する認識の母子間の相違との関連, 第 57 回日本母性衛生学会, 2016 年 10 月 14 日, 東京.

髙木知子・日比野守男・髙橋智子, 橋本美幸, 診療看護師 (Japanese Nurse Practitioner) の特定行為に関する研修の実態調査, 第 2 回日本 NP 学会, 2016 年 11 月 26 日, 豊明市.

高橋美帆. 青澤優美. 前田有里. 宮崎文子. 朝澤恭子. 関屋伸子. 加藤江里子. 女子看護大学生の月経に関係する知識およびマイナートラブル,セルフケア行動の実態. 第 16 回日本母子看護学会学術集会. 2016 年 7 月 9 日-10 日.幕張

豊住春佳 朝澤恭子. 看護大学生男女の低用量ピルにおける知識および意識. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 19 日. 徳島.

中田優子 朝澤恭子. 育児期にある就労女性の疲労に影響を及ぼす要因. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 19 日. 徳島.

橋本美幸 小嶋奈都子 実母娘間と義母娘間の祖母の子育て支援と母親の育児ストレスとの関連. 第 31 回日本助産学会学術集会. 2017 年 3 月 19 日. 徳島.

藤田麻央・清水悠加・菊地真悠子・河野志保・小嶋美南・田島美央・谷口晏理・奈良麻衣子・松田優子・加藤章子・橋本美幸, 大学生の親離れに関する認識の実態調査, 第 57 回日本母性衛生学会, 2016 年 10 月 14 日, 東京.

星るり子. 朝澤恭子. 森明子. 湯村寧. 男性不妊症クライエントの看護 不妊症看護認定看護師は何に対応困難を感じ,どの様な配慮と工夫をしているか? 第 14 回日本生殖看護学会学術集会. 2016 年 9 月 11 日. 仙台

御船曜. 石田千絵. 朝澤恭子. 佐藤潤. 末梢静脈穿刺時の「叩く」手技が静脈断面積の変化に及ぼす影響第 36 回日本看護科学学会学術集会. 2016 年 12 月 11 日. 東京

4. 研究助成および研究成果報告書

橋本美幸. 家庭訪問事業の質の確保と向上のためのマニュアル作成. 独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C). 2013 年度～2017 年度

朝澤恭子.不妊治療中の男性における QOL 向上のためのファティリティ看護プログラムの開発. 日本学術振興会科学研究費補助金 研究課題番号:15K11684, 基盤研究(C). 2015 年度～2017 年度

湯村寧(研究代表者). 森明子. 朝澤恭子. 星るり子他. 厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業 我が国における男性不妊に対する検査・治療に関する調査研究 総括・分担研究報告書

5. 社会貢献

宮﨑文子

1) 日本母子看護学会監事

2) 日本助産学会専任査読委員

3) 性の健康医学財団評議員

4) 大分県立看護科学大学大学院非常勤講師, 大分県

①看護教育特論. 平成 28 年 12 月 3 日,2 コマ

②助産マネジメント論. 平成 28 年 12 月 3 日・4 日 4 コマ

5) 基調講演座長

第 16 回日本母子看護学会学術集会「母乳だけで育てなかった女性への支援」,2018 年 7 月 9 日(千葉県)

朝澤恭子

1) 日本生殖看護学会 理事会総務幹事

2) 日本生殖看護学会 選挙管理委員会委員

3) 日本生殖看護学会 理事会編集委員会幹事

4) 看護研究指導. 独立行政法人国立病院機構東京医療センター看護部 2016 年 5 月～2017 年 2 月

5) 独立行政法人国立病院機構 平成 27 年度看護師等実習指導者講習会 講師
「助産師教育課程と実習指導」. 独立行政法人国立病院機構, 2016 年 10 月 24 日

6) 看護研究講演. 独立行政法人国立病院機構 東京医療センター看護部,
2017 年 3 月 14 日～23 日

7) 世田谷区認可保育園, 育児相談, 2016 年 11 月

平出美栄子

1) 東京都助産師会 政策担当理事 2016 年 4 月～

2） 三多摩医療生活協同組合 さくらっこ保育園運営委員会有識者会議委員 2016 年 4 月～

3)）第 72 回 日本助産師学会 ワークショップ「もう一人生みたくなる助産師のケア」講演 . 2016 年 5 月 28 日

4)助産マネジメント. 聖路加看護大学大学院. 2016 年6月15日

5）「卒乳・断乳について」講演 . 公益社団法人東京都助産師会国分寺市助産師地区. 2016 年 8 月 6 日

6)「女性のためのライフマネジメント講座」. 福生市市民講座. 2016 年 9 月 2 日

7)「助産師の力アップセミナー」講演. 兵庫県助産師会. 2016 年 9 月 25 日

8)フリースタイル分娩の介助技術学. 山形大学医学部看護学科 助産師コース. 2016 年 10 月 17 日

9)院内助産に生かす、フリースタイル分娩介助術. 東京医療センター産科病棟勉強会. 2016 年 11 月 18 日

10)院内助産に生かす、フリースタイル分娩介助術. 東京医療センター産科病棟勉強会. 2016 年 11 月22日

11)新任期助産師教育プログラム 「①助産師の役割②妊産褥婦のフィジカルアセスメント、分娩介助」研修. 2016 年 11 月 30 日

12)「卒乳・断乳について」講演 . 公益社団法人東京都助産師会国分寺市助産師地区. 2016 年11月14日

13)「妊産婦の支援事業―現代の妊産婦について―」. 国分寺市子ども家庭支援センター. 2017 年 2 月 22 日

14)「女性に寄り添う助産ケアのためにーマーケティングの視点を取り入れて」講演. 産育会堀病院 院内研修会.2017 年 3 月 1 日

6. その他

宮﨑文子

書評：草間朋子他監修「体の仕組みと働きを知るー基本を学ぶ看護シリーズ②」保健の科学 第 58 巻 第 9 号、612 ページ、2016 年

【小児看護学】

1.著書（なし）

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

山田恵子・中島美津子（2017）. 看護基礎教育におけるコンピテンシー教育に向けた一考察. 看護，69（2）p92-94.

3. 学会における発表

中島美津子：福島原発と医療機関，第 63 回日本科学史学会，平成 28 年 5 月 29 日，札幌

中島美津子：働き続けられる組織づくり，第 7 回多業種フットケア研究会，平成 28 年 12 月 3 日，東京

河井洋乃，元村碧，相澤崇文，内田潮美，笠原友里香，神尾夏美，小林正明，鈴木あい，水島美咲，玄順烈：乳児はマスクを着用している母親を認識できるか。第 42 回日本看護研究学会、平成 28 年 8 月 21 日

石田千恵，穴沢小百合，岩本郁子，朝澤恭子，竹内朋子，玄順烈，田野蒋尊：実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術モデル構築と評価、第 36 回日本科学学会、平成 28 年 12 月 10 日

4. 研究助成および研究成果報告書

酒井一博，伊藤雅史，木戸道子，中島美津子，深澤理香，福島通子，眞鍋一，吉川徹，吉村浩美，脇坂明．医療勤務環境改善マネジメントシステムに基づく医療機関の取組みに対する支援の充実を図るための調査・研究．厚生労働省．平成 28 年度．

中島美津子、久保恭子、酒井一夫：放射線災害後の子どもとその家族の健康障がいとメンタルヘルスとの関連 ― Social Capital の視点から（学長裁量経費研究）

5. 社会貢献

中島美津子

1） 岩手県看護協会　認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師
2） 京都府看護協会　認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師
3） 富山県看護協会　認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師
4） AMG　認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師
5） AMG　認定看護管理者教育課程セカンドトレベル講師
6） 国際医療福祉大学　認定看護管理者教育課程ファーストトレベル講師
7） 国際医療福祉大学　認定看護管理者教育課程セカンドトレベル講師
8） 国際医療福祉大学　認定看護管理者教育課程サードトレベル講師
9） 京都府看護協会　看護管理者研修講師
10） 岩手県看護協会　看護研修会講師
11） 滋賀県看護協会　看護職の WLB 推進フォローアップワークショップ講師
12） 静岡県看護協会　看護職の WLB 推進フォローアップワークショップ講師
13） 埼玉県看護協会　看護研修会講師
14） 大阪府済生会吹田病院　看護研究指導講師
15） 茨城県看護協会　認定看護管理者教育課程修了式特別講演講師

16) 京都府私立病院協会　医療勤務環境改善 WLB 実践研修会講師
17) 神奈川県保健福祉局保健医療部　医療従事者の勤務環境改善のための研修会講師
18) 岡山県医師会　医師・看護職等の WLB 推進ワークショップ報告会特別講演講師
19) 福岡県保健医療介護部　医療勤務環境改善マネジメントシステム講習会講師
20) 長野県健康福祉部　医療勤務環境改善マネジメントシステム講習会講師
21) 兵庫県健康福祉部　医療勤務環境改善マネジメントシステム講習会講師
22) 名古屋大学医学部付属病院卒後臨床研修・キャリア形成支援センター　認定看護管理者教育課程ファーストトレベル講師
23) 和歌山県田辺医療圏医療と介護の連携を進める会　地域包括ケアシステム講演会講師
24) 東京都福祉保健局医療政策部　看護管理者研修会講師
25) 千葉市社会福祉協議会　看護職研修会講師
26) 全国自治体病院協議会　看護管理者研修講師
27) 全国済生会看護部長会近畿ブロック　看護職員研修会講師
28) マッターホルンリハビリテーション病院　看護研究指導講師
29) 長田病院　管理者研修講師
30) 栃内第二病院　管理者研修講師
31) クオラリハビリテーション病院　管理者研修講師
32) 日本医療マネジメント学会長野支部　特別講演講師
33) 日本トータルフットマネジメント協会　ランチョンセミナー講師
34) 日本フットケア学会　年次大会教育講演講師
35) 東京都立国分寺高校　医療系進路講演会講師
36) 厚生労働省 医療勤務環境改善マネジメントシステム普及促進セミナー講師
37) 厚生労働省，医療分野の「医療の質」向上マネジメントシステムに基づく医療機関の取組みに対する支援の充実を図るための調査・研究委員会委員
38) 日本医療 POS 学会評議員

玄順烈

1）トリオ・ジャパン定期総会　啓発活動
2）養育室　つばさ（児童発達支援）ボランティアにて障害児支援
3）第 20 回　千葉大学大学院看護学研究科　千葉小児看護勉強会　運営会員

6．その他

中島美津子（2016）. 淘汰の波に溺れず、患者重視のケア実践のために！かみくだき 2016 年度診療報酬改定解釈と看護管理のやりくり、受け身の取り方. 看護部長通信, 14(1), p2-22.

中島美津子（2016）. 勤務環境改善の実践手順！スタッフのメンタル問題悪化予防&「困

ったちゃん」とのお付き合いの作法．看護部長通信，14(2)，p8-15.

中島美津子（2016）． 生かすも振り回されるも自分次第！「ちょっと変わった？困った？看護師長」との付き合い方． 看護部長通信，14(3)，p65-70.

中島美津子（2016）．みっちゃんのカンタン（簡単・感嘆）♪感動♪看護感理塾，第９回　組織を一段階大人にしてくれる発達障害の仲間たち！～ホンモノのインクルーシブな組織へ の脱却．看護部長通信，14(4)，p113-120.

中島美津子（2016）．地域包括ケアシステム　病院看護管理者の落とし穴と真に機能するためのシステム構築ポイント．看護部長通信，14(5)，p2-7.

中島美津子（2016）．インクルーシブ教育．看護，68（6），p98-99.

中島美津子（2016）．「やさしさ」と成長．看護，68（7），p98-99.

中島美津子（2016）．レスパイトケア．看護，68（9），p96-97.

中島美津子（2016）．大人の発達障害．看護，68(10)，p102-103.

中島美津子（2016）．AI　Articial Intelligence（人工知能）．看護，68(11)，p98-99.

中島美津子（2016）．予測的看護．看護，68（12），p100-101.

中島美津子（2016）．DPC 調整係数．看護，68（13），p98-99.

中島美津子（2016）．地域．看護，68（15），p98-99.

中島美津子（2016）．地域包括ケア．看護，69（1），p98-99.

中島美津子(2017)．中長期的視野に立ち，強い看護部づくりに不可欠な人材の見極め方，育て方．看護部長通信，14(6)，p65-74.

中島美津子（2017）．ソーシャル・キャピタル（絆）．看護，69（3），p96-97.

中島美津子（2017）．観察（observation）．看護，69（5），p92-93.

【精神看護学】

１．著書（翻訳書を含む）

中村裕美（2016）．アセスメントの視点と観察．森千鶴監編著　田中留伊編著．改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版)．146-150，ピラールプレス，東京．

中村裕美（2016）．摂食障害の理解と看護．森千鶴監編著　田中留伊編著．改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版)．266-284，ピラールプレス，東京．

田中留伊（2016）．修正型電気けいれん療法．森千鶴監編著　田中留伊編著．改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版)．83-85，ピラールプレス，東京．

田中留伊（2016）．精神科におけるコミュニケーション．森千鶴監編著　田中留伊編著．改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版)．

160-163, ピラールプレス, 東京.

田中留伊 (2016). 薬物依存症の理解と看護. 森千鶴監編著　田中留伊編著. 改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版). 248-265, ピラールプレス, 東京.

田野将尊 (2016). 防衛機制. 森千鶴監編著　田中留伊編著. 改訂版　これからの精神看護学　病態生理をふまえた看護実践のための関連図(初版). 170-171, ピラールプレス, 東京

２．論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

伊藤桂子, 田中留伊, 中村裕美, 大迫哲也 (2016). 首都圏看護系大学に通う学生の携帯電話依存傾向に関する研究. アディクション看護, 13(1) , 9-16.

３．学会における発表

石田千絵, 穴沢小百合, 岩本郁子, 朝澤恭子, 竹内朋子, 玄順烈, 田野將尊, 岡村眞喜子, 田吹弘子, 小山陽子, 宮本舞, 今野弘子.実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価. 第 36 回日本看護科学学会学術集会: 2016 年 12 月 10 日/11 日. 東京（千代田)

印銀里絵子, 田野将尊, 竹内朋子. がん化学療法に携わる看護師の専門職的自律性に関わる要素. 第 31 回日本がん看護学会学術集会:2017 年 2 月 4 日/5 日, 高知

西川はるみ, 大川和男, 田中留伊. 条件反射制御法(CRCT)ってなに?. 第15回日本アディクション看護学会学術集会, 2016 年 9 月 3 日, 兵庫

小貫亜希子, 竹内秀子, 田野将尊, 後藤博道. 院内サイコネフロロジー・ケースカンファレンス開催の試み. 第27回日本サイコネフロロジー研究会: 2016年7月10日, 東京(六本木)

佐藤美繰, 落合友里, 小仁所のぞみ, 高橋幸, 中村美紗樹, 中山弘美, 広川志野, 福井彩水, 星野まなみ, 田中留伊, 伊藤桂子, 田野将尊, 中村裕美. 発達障害およびその疑いのある学生に対する看護系大学教員の関わりの現状と支援のあり方. 日本看護技術学会第15回学術集会: 2016 年 9 月 24 日/25 日, 群馬

４．研究助成および研究成果報告書

田野将尊. 精神科救急・急性期病棟における地域移行支援のための多職種連携ガイドラインの開発. 日本学術振興会科学研究費補助金. 若手研究(B). 2015 年度-2017 年度.

５．社会貢献

田中留伊

1) 第 46 回日本看護協会論文集看護教育　査読委員

2) 代々木メンタルクリニック倫理審査委員会　外部委員

3) 代々木メンタルクリニック治験審査委員会　外部委員
4) ゆたかクリニック治験審査委員会　外部委員
5) 日本アディクション看護学会　理事　事務局長
6) 小澤高等看護学院　非常勤講師

田野将尊
1) 明星大学人文学部福祉実践学科　非常勤講師
2) 医療法人埼友会埼友草加病院・医療法人社団医山会埼友クリニック　非常勤看護師(リエゾンアドバイザー)
3) 日本アディクション看護学会　事務局
4) 日本アディクション看護学会　査読委員
5) 第 16 回日本アディクション看護学会学術集会　企画委員

中村裕美
1) 日本アディクション看護学会　事務局

6.その他
1) 田中留伊, 一般演題座長, 地域ケア, 第 15 回日本アディクション看護学会学術集会, 2016 年 9 月 4 日, 兵庫

【地域看護学】

1．著書（なし）

2．論文等（なし）

3．学会における発表

今関亜矢乃,蟹澤祥子,佐藤ひかる,須﨑祐蘭,髙橋祐香,田邊あゆみ,戸澤恵美,星茜,山口冴子,手塚久美子,牧栄理,佐藤潤,石田千絵.日本における在留外国人のヘルスリテラシーに関する実態調査.第 75 回日本公衆衛生学会, 2016 年 10 月,大阪.

石田千絵,穴沢小百合,岩本郁子,朝澤恭子,竹内朋子,玄順烈,田野將尊,岡村眞喜子,田吹弘子,小山陽子,宮本舞,今野弘子.実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価.第 36 回日本看護科学学会学術集会プログラム集,P62,2016 年 12 月,東京.

川崎竹哉,石田千絵,朝澤恭子.危機回避のための電話連絡における看護師の思考・判断の実態―チーム医療における医師との連携に着目して―.第36回日本看護科学学会学術集会プログラム集,P36 ,2016 年 12 月,東京.

御船曜,石田千絵,朝澤恭子,佐藤潤.抹消静脈穿刺時の「叩く」手技が静脈断面積の変化に及ぼす影響. 第 36 回日本看護科学学会学術集会プログラム集, P97,2016 年 12 月,東京.

久保祐子,小原真理子,石田千絵,斎藤麻子,斎藤正子.東日本大震災発生直後における看護職による避難所支援の特徴－個別支援に関する一考察－.第 22 回日本集団災害医学会,2017.2 月,愛知.

石田千絵,小原真理子,久保祐子,斎藤正子,斎藤麻子. 東日本大震災発生直後における看護職による避難所支援の特徴－集団支援に関する一考察－.第 22 回日本集団災害医学会,2017.2 月,愛知.

４．研究助成および研究成果報告書

石田千絵(研究分担者).看護職・介護職による要援護者二次トリアージの開発（研究代表者小原真理子）. 文部科学省科学研究費補助金基盤(B). 2014 年度～2016 年度.

佐藤潤.保健指導の効果指標としての Preference（選好）の変化の適用可能性の検討(研究代表者). 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C). 2015 年度～2017 年度.

５．社会貢献

石田　千絵

講演

1) 東京医療センター　論文の基礎　講師、9 月

2) 三崎保健福祉事務所　難病患者在宅支援評価委員会　講師、3 月. 役員

1) 日本災害看護学会　評議委員

2) 日本地域看護学会　査読委員

3) 日本看護系大学協議会　データベース委員

4) 日本災害看護学会学術集会　査読委員

5) 日本放射線学会学術集会　実行委員 2016 年 9 月 3-4 日

佐藤　潤

1) 日本看護系大学協議会　広報・出版委員会委員.

2) 第 5 回日本放射線看護学会　実行委員. 2016 年 9 月 3-4 日

牧　栄理

1) 第 5 回日本放射線看護学会　実行委員. 2016 年 9 月 3-4 日

手塚　久美子

1) 第 5 回日本放射線看護学会　実行委員. 2016 年 9 月 3-4 日

６．その他

石田千絵. ライフヒストリー「重症心身障害児　英太郎くん（脊髄性筋萎縮症）の場合」. 医学映像教育センター.2016 年.DVD

石田千絵.メディカコンクール　保健師国家試験対策テスト 2016 年（メディカ出版）　問題・解説作成

佐藤潤.メディカコンクール　保健師国家試験対策テスト 2016 年（メディカ出版）　問題・解説作成

佐藤潤.メディカ出版 e-learning N プラス保健師国家試験解説　2017 年

【総合看護学】

1．著書（なし）

2．論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

山田巧, 【事例でみる　フィジカルアセスメント実践講座】 フィジカルアセスメント実践講座, クリニカルスタディ, 37 巻 8 号, 698-712, 2016

池田洋美,宮﨑文子,岩本郁子,小嶋奈都子, (2016). 損益分岐点分析の手法を用いた助産外来の効果的な運営方法の検討, 日本母子看護学会誌, 9(2), 59-69

3．学会における発表

山田巧,プロジェクションマッピングを用いたフィジカルアセスメント教育の効果, 第 26 回日本看護学教育学会学術集会, 2016.8.22, 東京

山田巧, 草間朋子, フィジカルアセスメント教育におけるプロジェクションマッピング利用の効果, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016.12.10, 東京

山田巧, 胸部のフィジカルアセスメントに関する看護学生の技術評価, 第 14 回国立病院看護研究学会学術集会, 2016.12.17, 熊本

岩本郁子,衣川さえ子,高橋正子,梅津靖江, 看護学生のための医療安全に関する non-technical skill トレーニング教材の開発（1）－e ラーニング教材開発－, 第 26 回日本看護学教育学会, 2016 年 8 月 22 日, 東京.

高橋正子,衣川さえ子,岩本郁子,梅津靖江, 看護学生のための医療安全に関する non-technical skill トレーニング教材の開発（2）, 第 26 回日本看護学教育学会, 2016 年 8 月 22 日, 東京.

岩本郁子,加藤章子, 昭和初期における産婆看護婦の修身教育についての一考察－教科書「新編産婆看護婦修身書」を通して－, 第 26 回日本看護学教育学会, 2016 年 8 月 23 日, 東京.

衣川さえ子,岩本郁子,高橋正子,梅津靖江, 看護学生への医療安全に関する non-technical skill トレーニングの効果－直後の評価－, 第 36 回日本看護科学学会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

石田千絵,穴沢小百合,岩本郁子,朝澤恭子,竹内朋子, 玄順烈,田野将尊,岡村眞喜子,田吹弘子,小山陽子,宮本舞,今野弘子,実習指導者と大学教員の連携を目指した看護技術指導モデルの構築と評価, 第 36 回日本看護科学学会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

Saeko KINUGAWA Ikuko IWAMOTO Masako TAKAHASI Yasue UMEZU,

Development of a non-technical skills training for nurses, 5th world Congress of Clinical Safety, 22,September,2016, Boston.

４．研究助成および研究成果報告書

衣川さえ子,岩本郁子,高橋正子,梅津靖江,医療安全に関するノンテクニカルスキルの看護基礎教育トレーニングプログラムの開発, 文部科研基礎研究(C)) , 2014 年度～2016 年度.

佐々木幾美,雑賀美智子,岩本郁子,西田朋子,社会の変化に対応する看護実践能力の育成のための教育方法に関する研究,厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）,平成 28 年 9 月～平成 29 年 3 月.

５．社会貢献

山西文子

1)講義「看護専門職論―○看護専門職論としてのキャリア発達　○看護専門職の動向」公益社団法人山梨県看護協会主催　「平成 27 年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程」 2016.8.6

2)青森県立病院経営評価会議委員

3)独立行政法人国立病院機構参与

4)独立行政法人国立国際医療研究センターヒトＥＳ細胞研究倫理審査委員会委員

5)日本ＮＰ教育大学院協議会副会長

6)日本ＮＰ学会副会長

山田巧

1)国立病院看護研究学会理事

2)2016.4～2017.3、看護研究指導、国立病院機構東京病院看護部

3)2016.6.11、プリセプターコース、国立病院機構都城医療センター看護部

4)2016.7.5、プリセプターコース、国立病院機構横浜医療センター看護部

5)2016.9.26、臨地実習におけるフィジカルアセスメント指導の Pitfall、独立行政法人国立病院機構　九州グループ看護研究指導. 国立病院機構東京病院看護部. 2015 年 4 月～2016 年 3 月 10 日

岩本郁子

1)平成 28 年 6 月～10 月、教育課程開発、慈恵会教務主任養成講習会

2)平成 28 年 8 月～10 月、教育課程開発、日本看護学校協議会教務主任養成講習会

６．その他

衣川さえ子,岩本郁子,高橋正子,梅津靖江,看護基礎教育における新たな医療安全教育－ノンテクニカルスキルトレーニングの提唱－, 第 26 回日本看護学教育学会学術集会交流

集会, 2016 年 8 月 23 日, 東京.

岩本郁子,衣川さえ子,高橋正子,梅津靖江,医療安全に関する新たな看護教育の展開を考える（第二報）－NTS トレーニングプログラムとその活用－第 36 回日本看護科学学会学術集会交流集会,2016 年 12 月 11 日, 東京.

岩本郁子,看護師の NTS を支援する「点滴管理における安全チェックリスト」の有用性の検討,パネルディスカッション,第 3 回日本医療安全学会学術総会,2017 年 3 月 19 日,東京.

災害看護学コース

【看護基盤学】

1. 著書（翻訳書を含む）

石井美恵子 (2016). 災害支援ナース育成に携わって 岩手県の皆様へのメッセージ, 東日本大震災を体験して 5 年後の今. 岩手県看護協会. p49.

小井土雄一, 石井美恵子 編著 (2017). 他職種連携で支える災害医療. 医学書院. 東京.

2. 論文等（なし）

3. 学会における発表

Tomomi Sato, Michiyo Komura, Syogo Horita, The Effects and Subjects of “Pair Nursing” Pediatric clinical Practice, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference, 2016 年 3 月 26 日, Fukuoka.

森塚倫也, 高木晴良, 福田淑江, 岸川貴司, 中道親昭. 当院フライトナース教育の標準化に向けた基礎調査. 第 23 回日本航空医療学会総会, 2016 年 10 月 28 日, 川越.

森泉元, 高木晴良, 福田淑江. 経験年数 6 年以下の看護師の社会的スキルと精神健康度の実態調査. 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 10 日, 東京

Yoko Hamadate BSN, RN, Eei Asai, Yuzuru Kawashima, Mieko Ishii, Kazuhiko Maekawa (2016), An activity report on medical need survey by an assessment team sent for the Tropical Cyclone Pam mission in the Republic of vanuatu. 4th World Society of Disaster Nursing conference, September 29-30th, Indonesia.

山本晶子, 石井美恵子. 呼吸数測定の完全実施に影響する要因－A 県医療機関の看護師を対象とした呼吸数測定の実態調査―, 日本管理学会, 2016 年 8 月 19 日, 横浜.

山本晶子, 石井美恵子. 看護師の呼吸数測定について再考する-呼吸数測定の実施状況および認識と行動の多施設実態調査-. 日本集中治療学会, 2017 年 3 月 10 日, 札幌

4. 研究助成および研究成果報告書

磯和勅子, 石井美恵子. 高齢者および災害時要援護者に配慮した避難所運営のための地域防災対策支援方法の構築, 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2015 年度-2018 年度

高木晴良, 高野貴子. 保育者が日常的に使える携帯端末を利用したダウン症身体発育評価システムの開発. 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2012 年度-2016 年度

5. 社会貢献

石井美恵子

1) 災害看護(看護の統合と実践) 大阪大学, 2016 年 4 月 14 日.
2) 災害時救助活動における女性の役割. 笹川平和財団,パブリックフォーラム「平和と持続可能な開発に果たす女性の役割」, 2016 年 5 月 5-9 日, Tehran, Iran.
3) JICA 国際緊急援助隊医療チーム パブリックヘルス課題検討会 アジア地域緊急対応期におけるパブリックヘルス調査(ネパール), JICA 2016 年 4 月 16-23 日, Nepal.
4) シンポジウム「看護師業務拡大の課題と今後の方向性」, 第 19 回日本臨床救急医学会総会・学術集会, 2016 年 5 月 13 日, 福島.
5) 災害支援ナースの基礎知識～災害看護の第一歩～ 災害時に求められる看護支援活動 2016 年 7 月 6 日, 兵庫.
6) 平成 28 年熊本地震の災害支援ナース派遣に係る報告会(事後研修会), 2016 年 7 月 13 日, 千葉.
7) 「災害支援ナースの役割と心構えについて」, 宮崎県看護協会, 2016 年 7 月 16 日, 宮崎.
8) 災害支援ナース育成研修 研修内容に関するヒアリング, 東京.
9) ジェネラリストを育成する教育研修会 災害看護, 福島県看護協会研修, 2016 年 7 月 19 日, 福島.
10) 『災害に負けない学校づくり』～危機管理と防災教育～, 神奈川県教育委員会, 2016 年 7 月 26 日, 神奈川.
11) 災害対策看護管理者研修 ー看護管理者のための災害への備えと発生時の対応ー, 山形県看護協会, 2016 年 8 月 8-9 日, 山形.
12) 講演1「災害訓練」, 第 18 回日本災害看護学会年次大会, 2016 年 8 月 26 日, 久留米.
13) 災害看護, 愛知県厚生連看護師会, 2016 年 8 月 27 日, 愛知.
14) 「被災地での支援経験からみる人道対応の本質的な課題 ～東日本大震災, そして熊本地震～」, 名古屋大学医学部付属病院, 2016 年 9 月 6 日, 愛知.
15) 災害看護におけるリーダーシップ 災害における環境変化と健康問題, 愛知県看護協会, 2016 年 9 月 27 日, 愛知.
16) 災害看護(看護管理者編), 沖縄県看護協会, 2016 年 8 月 22 日, 沖縄.
17) 災害看護(災害支援ナースフォローアップ), 沖縄県看護協会, 2016 年 8 月 23-24 日, 沖縄.

18) 災害看護(実務編), 沖縄県看護協会, 2016 年 9 月 16-17 日, 沖縄.
19) 災害支援ナース強化研修(登録更新), 新潟県看護協会, 2016 年 9 月 20 日, 新潟.
20) 看護実践能力養成研修会 みんなで考え取り組む災害看護, 山口県看護協会, 2016 年 9 月 23 日, 山口.
21) 来て、見て、学ぼう！「みんなの防災フェア 2016」(第 5 回), ネパール親善ブース, 2016 年 10 月 1-2 日, 新潟.
22) 「“災害感染症”というもう一つの被害～東日本大震災と熊本地震の事例から～」, 災害時から考える日常でできる感染症対策, 帝人株式会社, 2016 年 10 月 13 日, 東京.
23) 災害看護Ⅱ 災害支援ナースの活動の実際、机上シミュレーション, 岩手県看護協会, 2016 年 8 月 29-30 日, 岩手.
24) 災害看護Ⅲ 災害支援ナースの役割、昨日、活動展開 災害看護ナースの活動の実際, 岩手県看護協会, 2016 年 9 月 5 日, 岩手.
25) 災害看護Ⅴ 災害に関する看護管理者の役割、災害発生時における看護管理者の活動、災害支援ナースへの具体的な支援, 岩手県看護協会, 2016 年 10 月 17 日. 岩手.
26) 災害対策看護管理者研修-看護管理者のための災害への備えと災害時の対応-, 山形県看護協会, 2016 年 8 月 8-9 日, 山形.
27) 災害看護-実務編-(災害支援ナース育成研修), 山形県看護協会, 2016 年 10 月 11-12 日, 山形.
28) 認定看護管理者教育課程セカンドレベル ヘルスケアサービス管理論, 山形県看護協会, 2016 年 10 月 18 日, 山形.
29) 災害医療 ～災害に立ち向かう医療者たち～ 災害看護の実際(東日本大震災とふくし避難所). 国際医療福祉大学大学院乃木坂スクール. 2016 年 10 月 14 日, 東京.
30) 都立病院看護職員エキスパートコース リーダーシップ, 東京都福祉保健財団, 2016 年 10 月 21 日, 東京.
31) 看護支援ナースフォローアップ研修会 災害支援ナースの役割・昨日と研修の概要 災害支援ナースの活動の実際, 宮崎県看護協会, 2016 年 10 月 22 日, 宮崎.
32) 看護管理論, 北海道医療大学, 2016 年 10 月 25 日, 北海道.
33) 看護管理者のための災害看護研修, 青森県看護協会, 2016 年 10 月 29 日, 青森.
34) 大規模災害時の保健・医療・福祉に必要なこと ～平時からの備えと地域連携～, 埼玉県草加保健所研修会, 2016 年 10 月 31 日, 埼玉.
35) 認定看護管理者教育課程セカンドレベル ヘルスケアサービス管理論, 奈良県看護協会, 2016 年 11 月 7 日, 奈良.
36) 災害支援ナース更新研修Ⅲ 災害支援ナースの活動に求められる資質について, 東京都看護協会, 2016 年 11 月 9 日, 東京.
37) 防災実践基礎演習 第 4 回 演習 10 被災者のメンタルケア・ヘルスケア, 三重大学 みえ防災塾, 2016 年 11 月 12 日, 三重.

38) 災害支援活動における看護職の役割 第 49 回看護学生看護研究学会, 2016 年 11 月 22 日, 東京.
39) 看護管理者のための危機管理, 新潟県看護協会, 2016 年 11 月 29--30 日, 新潟.
40) 国際保健の観点から見た災害医療支援 阪神淡路・東日本大震災の教訓は熊本大震災にどう生かされたか, 第 31 回日本国際保健医療学会学術大会 2016, 2016 年 12 月 3 日, 福岡.
41) 千葉大学大学院看護学研究科「看護政策論」, 2016 年 12 月 6 日, 千葉
42) 災害対策看護管理者研修～看護管理者のための災害への具と発生時の対応 大震災を想定して～, 大分県看護協会, 2016 年 12 月 7-18 日, 大分.
43) 災害支援ナーススキルアップ研修, 奈良県看護協会, 2016 年 12 月 9-10 日, 奈良.
44) 災害看護Ⅱ(災害支援ナース要請)研修会, 北海道看護協会, 2016 年 12 月 13-14 日, 北海道.
45) 災害看護 管理者編, 三重県看護協会, 2016 年 12 月 19-20 日, 三重.
46) 第 7 回高知医療センター看護実践発表会 基調講演, 高知医療センター看護局, 2016 年 1 月 22 日, 高知.
47) 防災講演会 基調講演, 東邦ガス株式会社, 2016 年 2 月 10 日, 愛知.
48) 特別講演 野口健「テント村という選択肢」, 第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 2017 年 2 月 14 日, 愛知.
49) 災害支援ナース更新・再登録要件講習会 看護専門職として、自律的に災害支援ナース活動を行うために, 千葉県看護協会, 2017 年 2 月 21 日, 千葉.
50) 認定看護管理者修了書交付式特別講演「災害時の看護管理」,長崎県看護協会,2017 年 3 月 4 日,長崎.
51) ジェネラルコース「教育担当者育成研修第 1 回」,都立小児総合医療センター,2017 年 3 月 8 日,東京.
52) 学会企画Ⅰネットワーク活動委員会 「災害発生時に全員避難を行った医療機関・社会福祉施設の経験と教訓」
53) 世界災害救急医学会 2021 招致委員会委員
54) 内閣府男女共同参画有識者議員
55) 男女共同参画推進連携会議「次世代への働きかけ」企画委員
56) 外務省総合外交政策局女性参画推進室「女性・平和・安全保障に関する行動計画」評価委員
57) 日本集団災害医学会理事.
58) 日本集団災害医学会評議委員.
59) 日本集団災害医学会災害看護委員会担当理事
60) 日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会担当理事
61) 日本集団災害医学会災害医療教育研修検討委員会委員

62) 日本集団災害医学会 DMAT テキスト編集委員会委員
63) 日本集団災害医学会第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会実行委員回委員
64) 日本災害看護学会理事.
65) 日本災害看護学会評議委員.
66) 日本災害看護学会ネットワーク活動委員会委員長
67) 日本災害看護学会　熊本地震看護プロジェクト委員長
68) 日本臨床救急医学会緊急度判定体系のあり方に関する検討委員会委員
69) 2016 年度国際緊急援助隊医療チーム課題検討会「Public Health」メンバー
70) 2016 年度国際緊急援助隊医療チーム課題検討会総合調整部会　アドバイザー
71) NPO 災害人道医療支援会常任理事
72) 新潟大学医学部　大学改革推進等補助金（課題解決型高度医療人材養成プログラム）に係る評価委員
73) 東京医科歯科大学　非常勤講師.
74) 東海大学医療技術短期大学　非常勤講師

高木晴良

1) 生物統計学. 早稲田大学教育学部. 2016 年 4 月 - 7 月
2) 統計学. 大妻女子大学家政学部. 2016 年 4 月 - 6 月
3) 統合実習（医療情報）. 帝京大学医学部. 2016 年 10 月-11 月
4) 健康管理論. 岐阜県立看護大学. 2016 年 10 月-2016 年 2 月
5) 情報科学. 帝京高等看護学院. 2016 年 4 月 - 6 月
6) 物理・化学. 資生堂美容技術専門学校. 2016 年 4 月-2017 年 2 月
7) 特別セミナー SPSS を使った統計解析　基礎編Ⅰ. 杏林大学. 2016 年 9 月 23 日
8) 特別セミナー SPSS を使った統計解析　基礎編Ⅱ. 杏林大学. 2016 年 9 月 28 日
9) 特別セミナー SPSS を使った統計解析　応用編. 杏林大学. 2017 年 3 月 21 日

堀田昇吾

1) 文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(平成 28～30 年度)「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」 プログラム委員
2) 自然放射線の理解, 文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(平成 28～30 年度)「看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング」, 2016 年 10 月 16 日, 東京.
3) 自然放射線の測定, 第 5 回日本放射線看護学会学術集会ワークショップ, 2016 年 9 月 4 日, 東京.

6. その他

石井美恵子 原案監修 (2016). 目で見る災害看護 Vol.1 災害看護の基礎知識と災害急性の医療・看護(教育資料). 医学映像教育センター. 東京

石井美恵子 原案監修 (2016). 目で見る災害看護 Vol.2 災害時の地域における医療・看護 (教育資料). 医学情報センター. 東京

【基礎看護学】

1. 著書 (翻訳書を含む)

岩満裕子(2017). 集団力学を把握し、リーダーとしてのスタイルを確立. 主任看護師. 2017年1・2月号. 37-40, 日総研, 東京.

山田英子(2017). 小井土雄一・石井美恵子編著. 第1版 多職種連携で支える災害医療—身につけるべき知識・スキル・対応力. 第8章 75-86. 医学書院, 東京.

2. 論文等 (原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

Satoh M, Watanabe I, Asakura K. (2017). Occupational commitment and job satisfaction mediate effort reward imbalance and intention to continue nursing. *Japan Journal of Nursing Science.* 14 (1), 49-60, doi: 10.1111/jjns.12135.

Satoh M. (2016). We Have To Create A New and Successful Way to Retain Nurses in The Future: How Can We Further Improve Nurses' Commitment to Their Profession? *Journal of Comprehensive nursing research and care.* 1: 102. doi: http://dx.doi.org/jcnrc/2016/102.

Asakura K, Saton M, Watanabe I. (2016). The development of the Attitude toward Professional Autonomy Scale for nurses in Japan. *Psychological Reports.* 2016; 119 (3) , 761-782, doi: 10.1177/0033294116665178.

3. 学会における発表

恩部陽弥, 石井美恵子, 山田英子, 峯田雅寛, 張替喜世一ほか. BHELP運営委員会活動報告. 第22回日本集団災害医学会総会・学術集会ポスター発表, 2017年2月15日, 名古屋.

佐藤みほ, 渡邊生恵, 朝倉京子. 看護師の離職意向の形成から離職決断に至るプロセス. 第36回日本看護科学学会学術集会. 2016年12月10日, 東京.

Miho Satoh, Ikue Watanabe, Kyoko Asakura. The effect of work family culture on turnover intention among Japanese female nurses: focusing on the differences by marital and child status. 8 th International Congress on Innovations in Nursing, Perth, November, 24, 2016.

Kyoko Asakura, Maki Tominaga, Yukari Hara, Ikue Watanabe, Miho Satoh, Takashi Asakura. The interaction of occupational commitment and health indicators with nurses' intention to leave in Japan. 4th Well-being at work Conference, 2016 May, Amsterdam.

4. 研究助成および研究成果報告書

安達和美, 田村康子, 山田英子, 相羽利昭, 巽夕起ほか. 外国人旅行者を対象にした災害発生時における看護支援活動モデルの構築. 日本学術振興会科学研究費助成金, 挑戦的萌芽研究. 2016 年度 - 2018 年度.

佐藤 みほ.結婚、出産・育児を経た女性看護職員が職業キャリアを継続するための支援のあり方. 文部科学省: 科学研究費補助金 (若手研究 (B)). 2015 年度 - 2017 年度

栗林好子.一般住民の入院経験・闘病経験を生かした新 SP 参加型教育システムの構築. 科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）.2016 年度-2017 年

5. 社会貢献

岩満裕子

1)非常勤講師「医療人材管理特論」,早稲田大学大学院,2016 年 4 月-7 月（前期）

2)講師「看護政策」, 埼玉県立大学大学院,2016 年 10 月 8 日・10 月 15 日

3)認定看護管理者ファーストレベル講師,グループマネジメント,埼玉医科大学職員キャリアアップセンター.2016 年 11 月 4 日,2017 年 1 月 6 日,1 月 13 日

4)認定看護管理者ファーストレベル講師,看護サービス提供論, 国際医療福祉大学.2016 年 7 月 2 日,8 月 5 日

5) 認定看護管理者セカンドレベル講師,コンフリフトマネジメント, 国際医療福祉 2016 年 11 月 12 日

6)認定看護管理者ファーストレベル講師,チームマネジメント,埼玉県看護協会.2016 9 月 26 日,9 月 29 日

7)認定看護管理ファーストレベル講師, 看護サービス提供論,群馬県看護協会.2016 年 9 月 14 日

8)認定看護管理セカンドレベル講師,看護人事管理・労務管理, 群馬県看護協会.2016 年 8 月 23 日

9)認定看護管理セカンドレベル講師,人的資源活用論, 栃木県看護協会.2016 年 8 月 24 日

10)緩和ケア認定看護師教育課程講師,看護管理,埼玉県立大学.2016 年 10 月 31 日,11 月 11 日

11) 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程講師,リーダーシップ, 国立障害者リハビリテーションセンター,2016 年 9 月 13 日

12)訪問看護師研修講師,在宅システム論,埼玉県看護協会,2016 年 10 月 18 日

13)研究発表会の講評者,社会福祉法人黎明会,2016 年 11 月 30 日

14)日本赤十字社埼玉支部内三病院合同師長会研修講師,2016 年 9 月 24 日

15)医療機能評価事業評価部会員,公益財団法人日本医療機能評価機構 2007 年～

山田英子

1) 熊本地震支援. 日本集団災害医学会. 2016 年 5 月 3-8 日

2) 災害支援ナース育成研修講師. 公益社団法人宮城県看護協会. 2016 年 10 月 15-16 日

3) BHELP 標準コース試行コース講師. 日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会. 2016 年 6 月 - 3 月(全 15 回).

4) 産科病院における災害対策講師. 小阪産病院. 2016 年 11 月 17 日

5) ポスター発表座長. 第 22 回日本集団災害医学会学術集会. 2017 年 2 月 14 日. 名古屋.

6) BHELP 伝授コース講師. 日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会. 2017 年 3 月(全 2 回)

7) Start-up Drill instructor/facilitator. タイ国・国際協力機構 ARCH プロジェクト (ASEAN 災害医療・救急医療にかかる連携), 2017 年 1 月 15-20 日.

8) 日本集団災害医学会評議員

9) 日本集団災害医学会 BHELP 運営委員会委員長

10) 日本集団災害医学会災害看護委員会委員

11) 日本集団災害医学会査読委員

12) 国際協力機構 ARCH プロジェクト国内支援委員

13) エマルゴトレインシステム 上級インストラクター

14) 一般社団法人 日本防災教育訓練センター 国際認定資格 「Pet Saver ペットセーバープログラム」 インストラクター

15) 災害看護論(2 コマ), 京都府立医科大学看護学部, 平成 28 年 11 月 25 日

16) 災害看護の実際(2 コマ), 公益社団法人地域医療振興協会 さいたま看護専門学校, 平成 28 年 12 月 12 日

佐藤みほ

1) 佐藤みほ. 2014 年 6 月～ 特定非営利活動法人ヘルスサービス R&D センター正会員

【成人・老年看護学】

1. 著書(なし)

2. 論文等(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

福田淑江, 草間朋子(2016) , 無床診療所における看護職の業務に関する実態調査報告 –潜在看護職の再就業支援にあたっての研修のあり方を検討するための基礎資料として-, 週刊日本医事新報, (4816) 41-45.

3. 学会における発表

新実絹代, 新人看護職員研修の「管理的側面」の教育に関する実態調査, 第 20 回日本看護

管理学会学術集会, 2016 年 8 月 20 日, 横浜.

福田淑江, 診療所における看護職の配置状況と看護業務の実態, 第 20 回日本看護管理学会, 2016 年 8 月 19 日, 横浜.

森泉元, 高木晴良, 福田淑江, 経験年数 6 年以下の看護師の社会的スキルと精神健康度の実態調査, 第 36 回日本看護科学学会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

森塚倫也, 高木晴良, 福田淑江, 岸川貴司, 中道親昭, 当院フライトナース教育の標準化に向けた基礎調査, 第 23 回日本航空医学会, 2016 年 10 月 28 日, 川越.

藤村朗子, 循環器領域の終末期医療・看護の経験状況,第 81 回日本循環器学会学術集会,2017 年 3 月 19 日, 金沢.

藤村朗子, 循環器疾患患者の終末期における看護実践内容, 第 81 回日本循環器学会学術会, 2017 年 3 月 19 日, 金沢.

三浦由紀子, 中込さと子, 先天性表皮水疱症患者の創傷・スキンケア方法に関する探索研究, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会 第 25 回学術集会, 2016 年 6 月 12 日, 金沢.

三浦由紀子, 中込さと子, 先天性表皮水疱症患者の創傷・スキンケア方法の検討, 日本遺伝看護学会 第 15 回学術集会, 2016 年 9 月 15 日, 新潟.

大関春美, 鈴木英子, 三島正彦, 田辺幸子, 新卒看護師のアサーティブネスに関する研究の動向, 第 20 回日本看護管理学会, 2016 年 8 月 19 日, 横浜.

三島正彦, 鈴木英子, 大関春美, 田辺幸子, 日本精神科看護師の陰性感情に関する研究の動向, 第 20 回日本看護管理学会, 2016 年 8 月 19 日, 横浜.

田辺幸子, 鈴木英子, 大関春美, 三島正彦, 看護学生の実習ストレスの研究の動向, 第 20 回日本看護管理学会, 2016 年 8 月 19 日, 横浜.

4. 研究助成および研究成果報告書

藤村朗子. 循環器疾患患者への終末期ケアにおける看護職の役割・機能に関する研究.日本学術振興会科学研究費補助金.若手(B).2014-2016 年度.

5. 社会貢献

新実絹代

1) 福島県看護協会 認定看護管理者研修(ファーストレベル)講師 2016 年 5 月 11 日
2) 独立行政法人労働者健康福祉機構 教育責任者研修講師 2016 年 10 月 26 日
3) 茨城県立病院 認定看護管理者研修(ファーストレベル)講師 2017 年 1 月 13 日
2017 年 1 月 27 日

福田淑江

1) 日本災害看護学会 ネットワーク活動委員会委員.
2) 国際医療福祉大学看護生涯学習センター認定看護管理者制度 教育委員(サードレベル).
3) 福井大学医学部看護学科 非常勤講師. 2016 年 6 月 8 日

4) 茨城県看護協会　認定看護管理者教育課程　セカンドレベル講師. 2016 年 8 月 12 日
5) 日本災害看護学会学術集会　シンポジウム座長. 2016 年 8 月 26 日

藤村朗子

1) 第 13 回クリティカルケア看護学会学術集会実行委員. 2016 年 6 月 4～5 日. 栃木.
2) 第 47 回(平成 28 年度)日本看護学会—急性期看護— 論文選考委員. 2016 年 8 月 12 日 ~2016 年 2 月 21 日

三浦由紀子

1) 独立行政法人国際協力機構（JICA）国際緊急援助隊チーム　第2回中級研修講師, JICA, 2016 年7月 23-24 日, 兵庫県.
2) 表皮水疱症と仲間たち(患者会) 第1回交流会　アドバイザー, 2016 年 12 月17日, 埼玉.
3) 独立行政法人国際協力機構(JICA) 国際緊急援助チーム　第3回中級研修講師, JICA, 2017年2月25-26日, 兵庫県.
4) NPO 法人表皮水泡症友の会 DebRA Japan 賛助会員.
5) 医療法人財団慈生会野村病院　非常勤 WOC 看護師(創傷・皮膚・排泄ケア・アドバイザー).
6) 独立行政法人国際緊急援助隊(JICA) 中級研修検討会メンバー.
7) 日本集団災害医学会　評議員.

【母性看護学】

1. 著書(なし)

2. 論文等 (なし)

3. 学会における発表

筒井志保・鈴木久美子, 新卒助産師のリアリティショックについての検討—プリセプターの認識するリアリティショックとの相違から—, 第 18 回日本母性看護学会学術集会, 2016 年 6 月 18 日, 久留米

中野志麻・鈴木久美子, 助産師が行う防災教育の現状と課題—初産婦が受けたと認識している防災教育の視点から—, 第 18 回日本母性看護学会学術集会, 2016 年 6 月 18 日, 久留米

尾嶋美里・岩満裕子・鈴木久美子, 集中部門に勤務する看護師の呼吸音の判断能力の現状調査—呼吸音の聴診教育を考える—, 第 20 回日本看護管理学会学術集会, 2016 年 8 月 19 日～2016 年 8 月 20 日, 横浜

4. 研究助成および研究成果報告書(なし)

5. 社会貢献

山口幸子

1)平成 28 年度　神奈川県鎌倉市助産師会　副会長

2)横浜市病院協会看護専門学校　母性保健　非常勤講師　2016 年 7 月

【小児看護学】

1. 著書(なし)

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

河原智江　久保恭子　西村ユミ (2016). 研究対象者に対する倫理的配慮の問題点①. 看護研究, 49（3）206-209.

河原智江　久保恭子　西村ユミ (2016). 研究対象者に対する倫理的配慮の問題点②. 看護研究, 49（5）410-413.

河原智江　久保恭子　西村ユミ (2016). 研究対象者に対する研究倫理を考える④. 看護研究, 49 (7)　598-603.

川島雅子　久保恭子　宍戸路佳 (2016). 保育園における発達障がい児の状況と課題. 神奈川工科大学研究論集, 印刷中.

久保恭子　宍戸路佳 (2016). 高校生・大学生への性虐待・乳幼児揺さぶられ症候群の予防活動の実践と親性教育の効果. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 第 68 集, 印刷中.

久保恭子　宍戸路佳 (2016). 性虐待児への対応プログラムリフカ研修の実践報告と評価･課題. 保育と保健, 23 (1). 125-126.

宍戸路佳　久保恭子 (2016). 保育園･幼稚園の施設における防災･危機管理に関する状況. 保育と保健, 23 (1). 128-129.

3. 学会における発表

川島雅子　久保恭子　宍戸路佳, 噴火災害に関連した子どもの健康への影響と対策に関する文献検討, 第 63 回日本小児保健協会学術集会, 2016 年 6 月 23 日, 大宮.

久保恭子　宍戸路佳他, 日本と中国の祖母の孫育てと心理社会的な変化・人間関係の満足度との関連, 第 63 回日本小児保健協会学術集会, 2016 年 6 月 23 日, 大宮.

田崎知恵子　久保恭子　宍戸路佳, 幼稚園教諭・看護師を目指す学生の子育て観, 第 63 回日本小児保健協会学術集会, 2016 年 6 月 23 日, 大宮.

川島雅子　久保恭子　宍戸路佳, High-school students' learning experience about infants' characteristics and child abuse, XX111IFHE　World Congless2016, 2016 年 8 月 4 日, 韓国大田.

久保恭子　宍戸路佳, Difference in grandmotherhood and grandmother's capacity between Japan and China, XX111IFHE　World Congless2016, 2016 年 8 月 4 日, 韓

国大田.

山下麻美　久保恭子, 幼児を養育する親が経験した子どもの不慮の事故の実態, 日本母性衛生学会 57 回大会, 2016 年 10 月 15 日, 東京.

久保恭子　宍戸路佳, 性虐待児への対応プログラム RIFCR 研修の実践報告と評価・課題, 第 22 回日本保育保健学会, 2016 年 10 月 15 日, 岩手.

宍戸路佳　久保恭子, 保育園、幼稚園等の施設における防災、危機管理に関する現状, 第 22 回日本保育保健学会, 2016 年 10 月 15 日, 岩手.

草間真由美　久保恭子　宍戸路佳, 高校生向けの子どもの虐待防止活動の実践報告と効果, 第 22 回日本子どもの虐待防止学会, 2016 年 11 月 26 日, 大阪.

久保恭子　宍戸路佳, Sexual abuse and shaken baby syndrome prevention activities for high-school and university students and the effect on education of readiness for parenthood, 第 20 回 EAFONS, 2017 年 3 月 9 日, 香港.

4. 研究助成および研究成果報告書

久保恭子、性虐待児の早期発見･保護のための専門職者育成のためのプログラムの検討. 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2015 年度-2016 年度.

岸田泰子　久保恭子、第 3 者の関与を伴う高度生殖医療に対応する看護の探求. 日本学術振興会科学研究費補助金, 挑戦的萌芽. 2015 年度-2017 年度.

久保恭子、終末期の在宅療養児と家族への訪問看護師のグリーフケアの明確化と心理職との連携の可能性、笹川記念保健協力財団. 2016 年度.

山口りえ　久保恭子、熊本地震で被災した子どもと家族へのミュージックアートコンサートによる心理的効果、公益財団法人ベネッセこども基金. 2016 年度.

久保恭子　川島雅子　宍戸路佳、火山噴火災害が人々の健康・生活に与える影響と対策の明確化および火山噴火災害に関する教材開発、神奈川県看護師等養成機関連絡協議会研究助成金. 2015 年度-2016 年度.

中島美津子　久保恭子　酒井一夫、放射線災害後の子どもとその家族の健康障がいとメンタルヘルスの明確化、東京医療保健大学学長裁量研究費. 2016 年度.

5. 社会貢献

久保恭子

1) 日本災害看護学会誌の査読を担当（2015 年-現在）
2) 第 37 回日本看護科学学会の抄録の査読を担当（2016 年）
3) 子どもの虐待防止に関する講義. 小金井市公民館. 2016 年 6 月 28 日
4) 子どもの虐待防止に関する講義. 神奈川県相模原市保育室マミーナ. 2016 年 11 月 2 日
5) 子どもの虐待防止に関する講義. 川越市市内と周辺保育園保育士大正に実施. 2016

年 10 月 29 日

6）子どもの虐待防止に関する講義. 子どものくに保育園. 2016 年 12 月 9 日 16 日

7）熊本地震後 、熊本県山都町中島小学校 町中保育園園児へのミュージックセラミー イベントの開催.2016 年 7 月 27 日

【精神看護学】

1. 著書（翻訳書を含む）

金子眞理子 (2016). リエゾン精神看護, 森千鶴監編. 田中留伊編. 改訂版 これからの精神看護学—病態生理をふまえた看護実践のための関連図. 134-142. ピラールプレス, 東京.

金子眞理子監修 (2016).うつ病の理解と看護, DVD 版, 医学映像教育センター, 東京.

石﨑実(2016). リエゾン精神看護, 森千鶴監編. 田中留伊編. 改訂版 これからの精神看護学—病態生理をふまえた看護実践のための関連図. 134-142. ピラールプレス, 東京.

2. 論文等（なし）

3. 学会における発表

異儀田はづき, 山内典子, 安田妙子, 嵐弘美, 金子眞理子,坂本倫美, 松村幸美, 白石和子, 河野良子, リエゾンナースへの 1 年目の看護師の面やるヘルス相談の実態と課題～新卒看護師と既卒看護師の比較～, 第 12 回東京女子医科大学看護学会, 2016 年 10 月 1 日, 東京.

金子眞理子, 秋山美紀, サイコオンコロジー領域における教育プログラムの有効性の検討, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 10 日, 東京.

秋山美紀, 菅原大地, 廣島麻揚, 金子眞理子, 近藤浩子, 前野隆司, 看護職と患者に幸せをもたらし、レジリエンスを高める、マインドフルネスのエビデンスと実践, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月 11 日, 東京.

4. 研究助成および研究成果報告書

金子眞理子,がん医療におけるコミュニケーション教育プログラムの開発と評価, 平成 28 年度文部省科学研究費補助金 研究報告書.

5. 社会貢献

金子眞理子

1） 第 29 回日本サイコオンコロジー学会総会一般演題査読

2） 第 29 回日本サイコオンコロジー学会学術集会 プログラム委員

3） 日総研 研修講師 がん患者の「不安」、「抑うつ」、「怒り」のアセスメントと対応法 2016 年

9 月 3 日～9 月 4 日　東京

4) 筑波大学大学院人間総合科学研究科　コンサルテーション論　非常勤講師 2016 年 6 月 9 日

5) 国立研究開発法人放射線医学総合研究所、放射線診療患者のメンタルケア　講師 2016 年 6 月 10 日　東京

6) 順天堂大学大学院医療看護学研究科　看護コンサルテーション論　非常勤講師 2016 年 12 月 5 日

7) 日本専門看護師協議会専門看護師活用促進委員会委員

8) 日本サイコオンコロジー学会代議員

9) 国立がんセンター中央病院精神看護専門看護師

10) あいクリニック神田　リワークディケアサポート

11) 日本ケアリング学会　評議員

12) 金子眞理子, がん患者と家族の間で意向が異なるときのコミュニケーション, 抗がん剤を「する」「しない」で対立するときにどうするか？2016 年 9 月 24 日, 第 29 回日本サイコオンコロジー学会総会, 座長, 北海道.

筧亮子

1) 日本精神保健看護学会　教育活動委員

石崎実

1) 日本アディクション看護学会　編集委員

【在宅看護学】

1. 著書（なし）

2. 論文等 （なし）

3. 学会における発表（なし）

4. 研究助成および研究成果報告書

小山珠美. 胎芽・胎児の放射線被ばくの正当化, 最適化に関する研究. 平成 28 年度学長裁量経費. 2016 年 7 月-2017 年 3 月

5. 社会貢献 （学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師等）

桜井礼子

1） 日本放射線看護学会理事

2) 日本放射線看護学会広報・渉外委員会委員. 2015 年 4 月～

3）査読委員．インターネットジャーナル「看護科学研究」． 2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日

4）第 5 回日本放射線看護学会学術集会企画委員．2015 年 5 月～2016 年 10 月

5）第 6 回日本放射線看護学会学術集会企画委員 2016 年 5 月～

6）日本放射線看護学会法人化準備委員会委員 2016 年 9 月～

7）大分県立看護科学大学研究科 非常勤講師 看護管理学特論． 2016 年 10 月 21 日

8）大分県看護協会 看護管理認定看護師セカンドレベル教育課程 講師 2016 年 9 月 25 日

小山 珠美

1）目白大学 2016 年度フレッシュマンセミナーBLS 講習補助講師．日本 BLS 協会. 2016 年 4 月 8 日

2）第 5 回日本放射線看護学会学術集会企画委員．日本放射線看護学会. 2016 年 4 月-10 月

3）よしくぼ保健室運営協力員．東京医療保健大学. 2016 年 9 月 16 日

4）日本放射線看護学会広報・渉外委員会委員．日本放射線看護学会. 2016 年 9 月-

5）日本放射線看護学会法人化準備委員会委員．日本放射線看護学会. 2016 年 9 月-

6）平成 28 年度文部科学省「国際原子力人財育成イニシアティブ事業」看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング講師．公益社団法人日本アイソトープ協会．2016 年 10 月 15-16 日

7）AHA ハートセイバーCPRAED コース講師. BLS 横浜. 2016 年 11 月 3 日

8）平成 28 年度文部科学省「国際原子力人財育成イニシアティブ事業」保健師現任研修講師. 公益社団法人日本アイソトープ協会. 2017 年 1 月 21 日

1. 著書（なし）

2. 論文等（原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料）

金子あけみ. 熟練保健師のコミュニケーションの特徴－特定保健指導場面における相互作用の分析から－, 北里看護学誌（掲載予定）

3. 学会における発表

坂野朋未, 田久保由美子, 臼井雅美, 金子あけみ. 看護基礎教育課程用教科書における家族看護に関する記述内容の分析－領域別教科書の分析より－, 日本家族看護学会第 23 回学術集会, 2016 年 8 月 27-28 日, 山形

田久保由美子, 臼井雅美, 金子あけみ, 坂野朋未. 家族劇制作を含めた家族看護学教育の学びの様相－履修後 1 年を経過した看護学生のグループインタビューより－, 日本看護科学学会第 36 回学術集会, 2016 年 12 月 10-11 日, 東京国際フォーラム

Yumiko Takubo, Masami Usui. Akemi Kaneko, Tomomi Sanano. The Current Situation and

Issues of Family Nursing in Baccalaureate Nursing Education:Interviews with Educators at
a Nursing University in Japan The 12th interational Family Nursing Conference, 2017. June
18 -21 in Spain.

4. 研究助成および研究成果報告書

金子あけみ, 田久保由美子, 臼井雅美, 三好智美. 壮年期男性の生活習慣病予防行動と家族機能に関する研究. 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2015 年度-2017 年度

田久保由美子, 金子あけみ, 臼井雅美, 坂野朋未. 看護基礎教育における家族看護学教育プログラムの開発と評価. 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2015 年度-2017 年度

臼井雅美, 金子あけみ, 田久保由美子. 家族システムケアアプローチを用いた周産期家族支援プログラムの開発研究. 日本学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究(C). 2015 年度-2017 年度

5. 社会貢献

金子あけみ

1)保健福祉政策学特論. 青森県立保健大学. 2016 年 8 月 20 日、9 月 3 日